

1 共同研究

[概要]

「共同研究」は、歴博が大学共同利用機関として、国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり、研究課題は日本の歴史と文化に関する今日の動向を踏まえて設定されてきた。その特徴は、1981年に設置されて以来、歴史学、考古学、民俗学及び関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本を置いてきた点にある。

歴博が取り組む共同研究には、基幹研究（Principal Research Project：本館の取り組む中心的な研究）、基盤研究（Fundamental Research Project：考古・歴史・民俗の資料に基づく実証的で学際的な研究）がある。また、若手研究者育成という面から、開発型共同研究（Developmental Research Project：対象は本館の任期付き助教）および共同利用型共同研究（Collaborative Access Type Joint Research：若手を主体とする外部研究者を対象とした館蔵資料および分析機器・設備を利用した研究）を行っている。その他、人間文化研究機構が実施する基幹研究プロジェクト、および、大学共同利用機関法人に属する4機関が連携して行う人間文化研究機構機関間連携・異分野連携研究プロジェクト事業を進めている。

歴博は大学共同利用機関としての共同利用性を高め、大学等の研究・教育に供するため、2017年度から開発型共同研究を除くすべての共同研究（基幹研究、基盤研究、共同利用型共同研究）の全面公募を行っている。

【人間文化研究機構基幹研究プロジェクト】 プロジェクトには「機関拠点型」、「広領域連携型」及び「ネットワーク型」がある。機関拠点型としては「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」、広領域連携型としては「地域における歴史文化研究拠点の構築」、「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」、ネットワーク型としては「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」、「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」を実施しており、いずれも6年計画の3年目である。

【基幹研究】 基幹研究は、本館の取り組む中心的な研究テーマのもとに、学際的研究を実施する共同研究である。

基幹研究には①「先端的な歴史研究の開拓をめざす資料論的かつ方法論的な挑戦的研究」、②「日本の歴史と文化を広く通史的な視点に立って研究する現代的課題研究」、の2つの枠組みがあり、①については、学際的で国際的な視点を重視して歴史研究自体の革新をめざすテーマが求められる。また②については、学界をリードし、かつ学際的で、社会的状況・要請にも応えられるようなテーマが求められ、特に研究成果の高度化・可視化が必要とされる。

2018年度に発足させた全体課題「近代日本社会の形成・展開についての学際的・国際的研究」（基幹研究Ⅰ）では、すでに開始しているランチ「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」に加え、2019年度からランチ「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」を3年計画で開始した。また、2019年度からは新たな全体課題として、「水と人間の日本列島史」（基幹研究Ⅱ）を発足させ、ランチ「水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成」を3年計画で開始した。

【基盤研究】 基盤研究は、基盤研究1（課題設定型）、基盤研究2（館蔵資料型）、基盤研究3（歴博研究映像）からなる。基盤研究1は、考古・歴史・民俗資料の研究資源化、高度情報化を主要な目的として実施する学際的な研究であり、新しい研究視点、研究手法などの研究基盤の新構築を目指す共同研究である。基盤研究2は、本館の収蔵資料を対象として研究計画を提案する共同研究である。そして、基盤研究3は、「歴博研究映像」の制作・研究活用に関する共同研究である。2019年度は、基盤研究1では「近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会」「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」の2件、基盤研究2では「番方旗本家に関する総合的研究—大番士・儒者杉原家文書を中心に—」の1件、基盤研究3では「歴博研究映像の制作・保存・活用—苧麻文化の映像記録化を中心に—」の1件を、それぞれ開始した。いずれも3年計画である。2019年度に終了した研究課題は、「『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究」と「直良コレクションを構成する更新統産動植物化石の分類学的再検討と現代的評価」の2件である。

【開発型共同研究】 開発型共同研究は、若手研究者（本館の助教）を対象として、新規課題発掘と人材育成に取り組むものである。2019年度は「歴史災害研究のオープンサイエンス化に向けた研究」が、2年目を迎えた。

【共同利用型共同研究】 大学院生やポストドクターなどを含む外部の若手研究者を主な対象として、館蔵資料および分析機器・設備を利用し取り組むもので、館蔵資料利用型と分析機器・設備利用型がある。いずれも期間は1年である。2019年度は、館蔵資料利用型6件、分析機器・設備利用型1件を実施した。

共同研究担当 柴崎茂光・三上喜孝・吉井文美

2019年度 国立歴史民俗博物館共同研究計画一覧

研究種別	研究課題	年度(西暦)				
		'17	'18	'19	'20	'21
機構基幹研究プロジェクト (21年度まで)	(1) 機関拠点型基幹研究プロジェクト 総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築(歴博・考古研究系 教授 西谷 大 他41名)					
	(2) 広領域連携型基幹研究プロジェクト 日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築(主導機関:国立歴史民俗博物館, 国立国語研究所) 地域における歴史文化研究拠点の構築(歴博・民俗研究系 教授 小池淳一 他23名) 異分野融合による総合書物学の構築(主導機関:国文学研究資料館) 古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究(歴博・歴史研究系 准教授 小倉慈司 他26名)					
	(3) ネットワーク型基幹研究プロジェクト日本関連在外資料調査研究・活用 ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—(歴博・情報資料研究系 教授 日高 薫 他33名) 北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—(代表 国立国語研究所 朝日祥之)(歴博・歴史研究系 准教授 原山浩介 他7名)					
基幹研究	(1) 学知と教育から見直す近代日本の歴史像(歴博・歴史研究系 教授 樋口雄彦 他11名)					
	(2) 近代日本における産業・労働の展開とジェンダー(歴博・歴史研究系 教授 横山百合子 他11名)					
	(3) 水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成(歴博・考古研究系 教授 松木武彦 他12名)					
基盤研究	(4) 高精度同位体比分析法を用いた古代青銅原料の産地と採鉱に関する研究(歴博・情報資料研究系 教授 齋藤 努 他12名)					
	(5) 高度経済成長と食生活の変化(お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系 教授 宮内貴久 他8名)(館内 教授 関沢まゆみ)					
	(6) 近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会(同志社大学歴史資料館 教授 若林邦彦 他6名)(館内 准教授 上野祥史)					
	(7) 古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究(歴博・考古研究系 准教授 高田貴太 他11名)					
	(8) 『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究(東京大学史料編纂所 准教授 藤原重雄 他14名)(館内 教授 三上喜孝)					
	(9) 直良コレクションを構成する更新統産動物化石の分類学的再検討と現代的評価(国立科学博物館地学研究部 グループ長 甲能直樹 他9名)(館内 教授 坂本 稔)					
	(10) 奈良僧師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成(京都女子大学文学部 教授 梅田千尋 他11名)(館内 教授 小池淳一)					
	(11) 番方旗本家に関する総合的研究—大番士・儒者杉原家文書を中心に—(国文学研究資料館 プロジェクト研究員 三野行徳 他11名)(館内 准教授 福岡万里子)					
	(12) 歴博研究映像の制作・保存・活用—苧麻文化の映像記録化を中心に(多摩美術大学非常勤講師 春日 聡 他6名)(館内 准教授 内田順子)					

開発型	(13) 歴史災害研究のオープンサイエンス化に向けた研究 (歴博・研究部 助教 橋本雄太 他12名)				
共同利用型共同研究 (当該年度実施)	館蔵資料利用型	港湾政策をめぐる制度設計の行政史：「石川準吉関連文書」に着目して (北海道大学大学院法学研究科 大学院生 (博士後期課程) 山田健/歴博・歴史研究系 准教授 原山浩介)			
		葬列における輿に関する日韓比較研究 (総合地球環境学研究所 特任助教 金セツピョル/歴博・民俗研究系 准教授 山田慎也)			
		御屋根方「棟梁鈴木家資料」所収図面群の特性について (東京都公文書館 公文書館専門員 小粥祐子/歴博・情報資料研究系 教授 大久保純一)			
		「棟梁鈴木家文書」にみる幕府小普請方支配御屋根方の職務 (東京都公文書館 公文書館専門員 工藤航平/歴博・情報資料研究系 教授 大久保純一)			
		歴博所蔵地震関連資料の調査研究 (東京大学地震研究所 准教授 加納靖之/歴博・研究部 助教 橋本雄太)			
	「豊後若林家文書」の伝来検討と関連水軍史料との比較 (名古屋学院大学国際文化学部 教授 鹿毛敏夫/歴博・研究部 准教授 荒木和憲)				
装置利用型・分析機器	関東縄紋時代中期後葉の土器群の年代的位置づけ (中央大学大学院文学研究科 大学院生 (博士後期課程) 西本志保子/歴博・情報資料研究系 教授 坂本 稔)				

【機構基幹研究プロジェクト】

(1) 機関拠点型基幹研究プロジェクト

総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築

2016～2021年度

(研究代表者 西谷大)

1. 目的

本研究の最終的な目的は、総合資料学の構築にある。総合資料学とは、既存の学問の枠を超えた資料学の方法の構築である。本研究課題は、多様な「モノ」資料を時代・地域・分野等の視点で分類・統合し、高度な共同利用・共同研究を実現する。また、従来から実施してきた人文・社会科学と自然科学の両面からの分析に加えて、さらに、様々な学問分野からのアプローチによる史実に基づいた日本歴史の再構築、歴史を通じた様々な分野の課題発見や解決に資するとともに、一つの資料を多様な分野で研究することによって異分野連携・融合を図り、新たな知の発見につながる「総合資料学」を創成するものである。大学を含めた研究機関において日本歴史文化に関する研究資源を活用できる基盤を構築する。

本研究課題は、機構の中期目標・中期計画の「国内外の大学等と連携して、総合資料学の創成と大学・博物館資料の相互利用環境の整備を図る」という方向性及び機構の目指すべき方向性の「機構内機関に蓄積された研究資料を有効に活用することができる」とともに、資料にもとづく研究方法など新たな研究システムを提供することによって、大学の研究機能の強化に貢献するとともに、教育プログラムを提供すること等によって大学の教育の機能強化に貢献する。」と合致したものである。

2. 今年度の研究計画

昨年度に引き続き、今年度も多くの大学との連携を図り、広くデータを共有し、共同利用を行うという最終目標に対しては、想定以上に進展した。当初目標の「6年間で18大学との協定とそれにもとづく事業展開」については、国内で16大学、海外6大学を数え、4年間で22大学にまで広がった。これらの協定は形式的なものではなく、データ共有・異分野連携研究・教育への貢献などそれぞれの大学の特性と本事業のユニットの目的に応じた形で進展しており、大学の機能強化に資するという観点と対応しつつ展開することができた。

また、人文情報ユニットに関しては、システムの公開を果たすとともに、具体的な国際的連携などを含み込んだ展開へと結びつけつつある。さらに、大学とのデータの共同公開を果たすなど、高度な連携を進めつつある。

今後は、データ受け入れのための効果的なスキームの確立や、これらのデータをいかに活用するかの方策が重要な鍵となる。

特に地域・社会貢献の取り組みは、昨年度同様、実施件数が多いとは言えなかった。しかし、山形大学で全体集会を開催し、地域連携・教育ユニットを中心に歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業と連携するなどの対策は行い、展開を広げつつある。地域の企業と連携して、通常学術集会が行われないような場所での研究集会を予定するとともに、自治体との連携協定によるデータの共有化などを検討しており、この課題については大きく改善する。

また、異分野連携と国際展開についても、新たな展開をはかるべく、人員の確保を予定している。今後はそれらの人員をもとに、より広い展開へと結びつける。

3. 今年度の研究経過

①研究会

共同利用の文理融合型情報基盤を構築するための人文情報ユニット（5月・6月・8月・10月・12月）、情報基盤を活用した文理融合型研究を行う異分野連携ユニット（10月・3月(コロナ対策で中止)）、研究成果を活用する地域連携・教育ユニット（11月・2月）の研究会・シンポジウム・ワークショップ等を実施した。また7月にはイタリアから研究者を招聘し、国際研究集会を東京大学地震研究所と共催で実施した。ほか2月には公開集会で全体の活動成果を予定した（コロナ対策で延期）。これら研究会・国際研究集会等は計11回である。

②国内外での研究発表

人文情報学の環太平洋カンファレンスであるPNC2019（シンガポール、10月）において、総合資料学に関する発表を行った。これを含め国際会議での発表を10件（うち2件コロナ対策で延期）、国内では計49件の研究発表を行った。

ほか、ルーヴェン大学（ベルギー）において、日欧の人文情報学に関するワークショップを実施した。今後も一定の頻度でこのようなワークショップを実施することを確認した。

③成果論文、成果論文を含む書籍など

総合資料学奨励研究（公募型共同研究）の成果を含む報告書（2016年度～2018年度）を刊行した（3月）ほか、総合資料学に関する査読付き英語論文を含む研究書の刊行に向けて国内外の研究者と原稿のやり取りを開始した（3月）。

④学術交流協定

今年度は國學院大學（法人全体）・岡山大学・ボーフム大学（ドイツ）・成功大学（台湾）と学術包括協定を締結した。今年度までに協定を締結した大学とは、共同研究や大学院教育だけでなく、地域資料の保全や活用のための事業においても連携した。

⑤共同研究の公募

総合資料学奨励研究の公募を行い、計6件を採択し、公募型共同研究を実施した。その成果は3月に全体の成果活動報告での公表を予定した（コロナ対策で延期）。

主な成果としては、東京大学史料編纂所との連携による、館蔵資料である田中穰氏旧蔵典籍「活套」の紙背文書に関する紙質を含む総合的な研究分析や、琉球大学における民具の分析に関わった具体的な地域との連携など、今後の総合資料学の手法に反映しうる成果を得ることができた。

⑥広報

専用Webサイトを運営し、研究会活動や国内外の研究発表については全てWeb上での活動報告を行った。リーフレット（日本語版、英語版）、ステッカー（日英併記）の作成のほか、ニューズレター（日英併記、第7号・第8号）を引き続き作成し、既刊号はWebサイトでの掲載を行うなどした。

加えてEAJRS（日本資料専門家欧州協会、9月）では、欧米の日本資料関係者に向けて情報基盤で公開中のデータを示しつつ発表し、現地の研究者へのアピールに努めた。

⑦その他（教育・若手育成・共同利用等）

大学院の教育機能強化に貢献する「国立歴史民俗博物館未来世代育成プログラム」の対象を国外の大学院にも広げて実施したほか、総合資料学の長期的な発展を見据え、大学院生1名を対象として、人文情報学の実践的な若手研究者教育プログラムを実施した。

総合資料学の情報基盤システムを、館外からのフィードバックをふまえ改修するとともに、大学所蔵資料に限らない地方資料の可視化・共同利用化に向けた協議を進め、複数の自治体や企業と協定・覚書を締結した（公開のための実務はコロナ対策のため延期）。加えて国際研究集会（7月）等を通じて情報基盤の国際化のための議論を深め、大学を含む複数の国内外の研究機関等とも連携する態勢を強化した。

○研究会の開催

人文情報ユニット研究会 第1回（2019年5月27日 於：学術総合センター 一橋講堂）

人文情報ユニット研究会 第2回（2019年6月20日 於：国立歴史民俗博物館）

地域連携・教育ユニットシンポジウム 学術野営2019in能登半島 *第1回研究会兼（2019年7月6日・7日 於：さいはての『キャバレー準備中』）

国際研究集会「デジタル化する歴史災害研究」（2019年7月20日 於：東京大学地震研究所）

人文情報ユニット研究会 第3回（2019年8月23日 於：コワーキングスペース・まるも）

人文情報ユニット ワークショップ（2019年10月8日 於：国立歴史民俗博物館）

異分野連携ユニット研究会 第1回（2019年10月10日 於：フクラシア品川（高輪口））

日本研究ワークショップ（2019年10月23日 於：ルーヴェン・カトリック大学）

国際シンポジウム「料紙研究×自然科学：古文書研究の新展開」*共催（2019年11月23日 於：東京大学本郷キャンパス 山上会館）

地域連携・教育ユニット研究会 第2回（2019年11月29日 於：広島県立文書館）

人文情報ユニット研究会 第4回／じんもんこん2019 歴博共催企画セッション「若手研究者」によるCH／人文情報学」（2019年12月14日 於：立命館大学大阪いばらきキャンパス いばらきフューチャープラザ）

人文情報ユニット研究会 第5回／第122回人文科学とコンピュータ研究会発表会の企画セッション「地域から世界へ—史資料のウェブ公開とオープンデータ化—」（2020年2月1日 於：佐賀大学本庄キャンパス 理工学部6号館多目的セミナー室）

地域連携・教育ユニット研究会 第3回（2020年2月21日 於：国立歴史民俗博物館）

○研究の進捗状況

総じて、コロナ対策による延期・中止した事業があるにもかかわらず順調に進展している。調査研究活動は、文理融合型研究や、地域資料の保全・活用に関する研究実践を軸に、順調に進展しており、研究成果の公開・可視化についても同様に協定大学との多様な共同研究にかかる報告書の刊行、国際研究集会・シンポジウム等の実施、大学院教育への展開等、順調に進展しているといえる。

研究プロセスの国内外に向けた情報発信は、従来のウェブサイト運営、リーフレット・ニュースレター（日英併記）の配布に加え、複数の海外の大学との国際ワークショップが新たな発信の形としても順調に機能している。また、若手研究者の人材育成の取組みも、若手研究者教育プログラムの実施を含め、順調に進展しており、今後の成果へとつなぐことが期待される。

4. 今年度の研究成果

1) 研究成果の概要

人文情報ユニットを中心に複数の論文成果を出すことができた。研究会については、すべてのユニットについて、バランスよく実施することができ、異分野連携ユニットについては、これまでと異なる新たな分野への挑戦も行われた。そして、地域連携・教育ユニットにおいても、実際に地域と連携した幅広い研究を実施するとともに、博物館資料の大学教育への幅広い活用なども検討することができ、それぞれの側面から新たに展開することができた。さらに、国際研究集会やワークショップの実施など、国際的な連携も更に進展し、総合資料学を地域・国際の両面から進めることができていく。

2) 著作物名、論文名

【主な論文】

2019年4月 「地図空間與地理思想」青山宏夫、『文献・文物的詮釋與歴史記憶』逢甲大學歴史與文物研究所、

pp.1-24

- 2019年5月 「地域歴史文化資料の保存・継承に向けたネットワーク構築へ」天野真志,『千葉史学』74号,千葉歴史学会, pp.26-35
- 2019年6月 'Application of Historical Resources for Geographical Data in Japan',後藤真, "International Journal of Geoinformatics"15-2, Association for Geoinformation Technology, pp.49-56
- 2019年8月 'Honkoku 2: Towards a Large-scale Transcription of Pre-modern Japanese Manuscripts', 橋本雄太, "The 9th Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2019)", pp.97-100
- 2019年9月 'Digital Humanities Research in National Museum of Japanese History', 橋本雄太, "Proceedings of The International Conference for Museums of Language & Writing 2019"
- 2019年10月 「デジタルアーカイブから見る文書」後藤真,『近世・近現代 文書の保存・管理の歴史』勉誠出版, pp.310-326
- 2019年10月 「歴史のデータは誰のものか—Digital Historyがもたらす未来とは」後藤真,『パブリック・ヒストリー入門 開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版, pp.372-387
- 2019年12月『「延喜式」へのTEI適用と日本史資料のテキストデータ共有・流通』小風尚樹, 後藤真,『国立歴史民俗博物館研究報告』第218集, 国立歴史民俗博物館, pp.218-315

3) 主な研究会・シンポジウム等

- ・ニコニコ超会議「超みんなで翻刻してみた2019」(2019年4月27日・28日 於:幕張メッセ)
橋本雄太
- ・人文情報ユニット研究会 第1回(2019年5月27日 於:学術総合センター 一橋講堂)
「地域に現存する文化財の継承とオープンな情報資源化に向けた取り組み」
趣旨説明 堀井洋(合同会社AMANE)
報告 後藤真「地域の歴史・文化資料のデータ化の課題とオープンサイエンス」
高田良宏(金沢大学)「研究データの早期オープン化に資する「逐次公開」型運用モデルと運用支援環境の検討」
松岡弘之(尼崎市立地域研究史料館)「オープンサイエンスと地域文書館」
山内利秋(九州保健福祉大学)「誰のために地域社会の資料はまもられるのか?」
- ・International Workshop on Spatiotemporal Knowledge Toward Sharing Resources about Spatiotemporal Information「時空資訊關聯之知識」國際工作坊(2019年5月30日・31日 於:国立台湾歴史博物館(台湾))
Session II Gazetteers Makoto Goto "Usages and Needs for Gazetteers in Studies about Japanese History"
- ・人文情報ユニット研究会 第2回(2019年6月20日 於:国立歴史民俗博物館)
「博物館におけるデータ公開の実務を学ぶ」
趣旨説明 後藤真
報告 後藤真「近年のデジタルアーカイブの動向—著作権とライセンスを中心に」
数藤雅彦(五常総合法律事務所, 弁護士・デジタルアーカイブ学会評議員)「博物館のデジタルアーカイブをめぐる権利と実務」
- ・第22回大学博物館等協議会・第14回博物科学会(2019年6月27日・28日 於:秋田大学 手形キャンパス)
ポスター発表 後藤真・天野真志・川邊咲子
- ・地域連携・教育ユニットシンポジウム「学術野営2019 in 能登—地域の学術資料をむすんでひらく会—」
*第1回研究会兼(2019年7月6日・7日 於:さいはての『キャバレー準備中』)
はじめに(趣旨説明) 堀井洋(合同会社AMANE)・後藤真(国立歴史民俗博物館)
セッション1【学術資料の存在・喪失に関する現状の正確な把握・公開】
川邊咲子(国立歴史民俗博物館・金沢大学)「能登半島における民具の収集・保存の状況とその記録情報について」
堀井美里(合同会社AMANE)「歴史資料の保存・継承・活用～能登地域を事例として～」
セッション2【正確な現状把握に基づいた継承・研究利用の検討】
天野真志「地域の資料を保存・継承することの課題を考える」
林正治(国立情報学研究所)「学術資料の保存・継承:リポジトリができること」
セッション3【学術資料の継承と一体となった利活用と発信】
中村浩二(石川県立自然史資料館)「生態系評価による地域再生と持続発展」

阿見雄之（東京国立博物館）「Information Logisticsを規定に学術資料や文化資源を見つめ続ける」
 原嶋亮輔（Root Design）「学術資料を活かすデザイン思考」
 加藤諭（東北大学史料館）「大学アーカイブズにおける学術資源の利活用～東北大学を事例に～」
 高橋そよ（琉球大学）「民俗文化の記録が紡ぐ島と人と時間・序」
 ディスカッション（全体討論） 司会：高田良宏（金沢大学）

* 7月7日巡見（緑剛崎灯台，珠洲市立珠洲焼史料館，吉祥寺，天領庄屋中谷家）

- ・ the Digital Humanities Conference 2019 (DH2019) (2019年7月9日～12日 於：ユトレヒト (オランダ))
 ポスター発表 Naoki Kokaze, Kiyonori Nagasaki, Yuta Hashimoto, Ayano Kokaze, Makoto Goto “Towards Constructing An Ecosystem for Digital Scholarly Editions of East Asian Historical Sources : With the Focus on the TEI-Markup of the Engi-Shiki”
- ・ 第8回全国歴史民俗系博物館協議会年次集会 (2019年7月11日 於：北海道博物館)
 ポスター発表 天野真志・川邊咲子
- ・ 国際研究集会「デジタル化する歴史災害研究」(2019年7月20日 於：東京大学地震研究所)
 基調講演 マリオ・ロカティ（イタリア国立地球物理学火山学研究所）「イタリア，欧州，そしてグローバルスケールの歴史地震データ管理—10年間の経験から得られた洞察—」
 講演 榎原雅治（東京大学史料編纂所，東京大学地震火山史料連携研究機構）「地震研究のための歴史史料の情報化とネットワーク構築をめざして」
 話題提供 加納靖之（東京大学地震研究所，東京大学地震火山史料連携研究機構）「歴史地震研究と人文情報学ツール」
 橋本雄太「歴史地震研究における市民科学」
 パネルディスカッション
- ・ 人文情報ユニット研究会 第3回 (2019年8月23日 於：コワーキングスペース・まるも)
 趣旨説明
 報告 小川潤（東京大学大学院人文社会研究科）「TEI (EpiDoc) によるラテン碑文マークアップと社会的紐帯の可視化」
 村田祐菜（東京大学大学院人文社会研究科）「近代短歌テキストのTEI化」
 渡邊要一郎（東京大学大学院人文社会研究科）「Pali Text Society 版に基づくパーリ語文献検索システム」
 亀田堯宙（京都大学東南アジア地域研究研究所）「Reconciliation API を使ってみた，作ってみた」
 橋本雄太（国立歴史民俗博物館）「ANTLR 4 を利用した日本語史料のための軽量マークアップ言語の開発」
- ・ EAJRS2019 (第30回日本資料専門家欧州協会) (2019年9月18日～21日 於：ソフィア大学 (ブルガリア))
 ブース発表 後藤真・橋本雄太・川邊咲子
- ・ 人文情報ユニット ワークショップ (2019年10月8日 於：国立歴史民俗博物館)
 バンドン工科大学 (ITB) からの報告：ネディナ・サリ，アリアンティ・アユ・プスピタ，プラナンダ・ルフィアンシャ
 1. デザイン工学科の紹介と日用工芸品に関する研究についての略説
 2. デザイン教育のための文化的人工物のデジタル化
 「総合資料学の創成」プロジェクトからの報告：後藤真，橋本雄太，川邊咲子
 1. 「総合資料学の創成」について
 2. khirinについて
 3. 日本における文化的人工物のデジタル化
 討論
- ・ 異分野連携ユニット研究会 第1回 (2019年10月10日 於：フクラシア品川 (高輪口))
 報告 箱崎真隆「2つの新しい年輪年代法の登場と歴史学・考古学・地球科学資料の高精度年代測定の実状」
 三宅美沙（名古屋大学宇宙地球環境研究所）「樹木年輪の放射性炭素分析に基づく過去1万年間の太陽活動復元」
 総合討論
- ・ Pacific Neighborhood Consortium (PNC) 2019 (2019年10月16日 於：Nanyang大学 (シンガポール))
 報告 Makoto GOTO “Possibility of Applying Historical Gazetteer to Knowledgebase of Japanese History”

- ・ Workshop in KU Leuven the New Movement of Japan Resources - Preservation, Digitization and Utilization (2019年10月23日 於：ルーヴェン・カトリック大学)
 - Makoto GOTO “Introducing “Japanese Digital Archive” and “Digital Humanities”
 - Masashi AMANO “Preserving Historical Materials”
- ・ 「日帰り学術野営：デザイン編—学術とデザインをつぐ—」 (2019年10月29日 於：AMANE東京ラボ)
 - 話題提供 中村美里 (東京大学総合図書館) 「東京大学総合図書館所蔵資料のデザイン展開の可能性—『摺拾帖』を中心に—」
 - 原嶋亮輔 (Root Design Office) 「学術資料の分解とデザイン編集」
 - 原 大輔／甲賀ゆうこ (Missing Link) 「MISSINGLINK ロストテクノロジーを求めて」
 - ディスカッション 「学術資料に基づいたプロダクト創出と事業化に向けて」
- ・ 国際シンポジウム 「紙研究×自然科学：古文書研究の新展開」 *共催 (2019年11月23日 於：東京大学本郷キャンパス 山上会館)
 - 開会挨拶・趣旨説明 渋谷綾子 (東京大学総合研究博物館)
 - 講演 湯山賢一 (神奈川県立金沢文庫) 「日本における古文書料紙の変遷」
 - 鍾 國芳 (台湾・中央研究院生物多様性研究中心) 「How paper mulberry DNA tells stories of Austronesian migration and paper invention」
 - 報告 石川隆二 (弘前大学農学生命科学部) 「カジノキの遺伝的多様性は古文書の由来を説き明かせるか」
 - 高島晶彦 (東京大学史料編纂所) 「デジタル機器を利用した楮繊維の分析」
 - パネルディスカッション パネリスト：湯山賢一、鍾國芳、石川隆二、高島晶彦
 - モデレーター：渋谷綾子
 - 全体コメント 小倉慈司
- ・ 第24回情報知識学フォーラム 「地域資料とオープンサイエンス～地域資料の継承と情報資源化～」 (2019年11月23日 於：ITビジネスプラザ武蔵)
 - 報告 後藤真 「持続可能な地域資料のためのデータ化・オープン化を考える」
- ・ 地域連携・教育ユニット研究会 第2回 (2019年11月29日 於：広島県立文書館)
 - 趣旨説明 天野真志
 - 報告 下向井祐子 (広島県立文書館) 「広島県立文書館における被災文書への対処とボランティアとの協働」
 - 山口悟史 (東京大学史料編纂所) 「被災資料に対する文化財修理技術者の役割～和本を中心に～」
 - 添田仁 (茨城大学) 「水損した資料は被災地の文化資源になりうるか—2015年関東・東北豪雨の実践から」
 - 天野真志 「資料保存と救済・修理・継承」
 - 討論 下向井祐子・山口悟史・添田仁 (司会：天野真志)
 - 総括 西谷大
- ・ 人文情報ユニット研究会 第4回／じんもんこん2019 歴博共催企画セッション 「「若手研究者」によるCH／人文情報学」 (2019年12月14日 於：立命館大学大阪いばらきキャンパス いばらきフューチャープラザ)
 - 趣旨説明 後藤真
 - 研究発表
 - 亀田亮宙 「Linked Data 地名辞書における Reconciliation API の実装」
 - 小川潤 (東京大学大学院) 「ラテン碑文のTEIマークアップに基づくtext-image linking, およびグラフDBとの連携」
 - 小風尚樹 (東京大学大学院) 「財務記録史料のTEI化と度量衡の単位体系のオントロジー構築」
 - 吉賀夏子 (佐賀大学) 「低コストな文化財書誌の機械可読化を目指して」
 - 質疑応答
 - ライトニングトーク
 - 小風綾乃 (お茶の水女子大学大学院) 「18世紀フランス『百科全書』の典拠作成」
 - 渡邊要一郎 (東京大学大学院) 「パブリック文献の検索システムに関して」
 - 村田祐菜 (東京大学大学院) 「近代短歌テキストのTEIによる構造化と利活用」
 - 王一凡 (東京大学大学院) 「過去と未来の文字情報」
- ・ 人文情報ユニット研究会 第5回／第122回人文科学とコンピュータ研究会発表会の企画セッション 「地域から世界へ—史料資料のウェブ公開とオープンデータ化—」 (2020年2月1日 於佐賀大学本庄キャンパス 理工

学部6号館多目的セミナー室)

基調報告

大向一輝 (東京大学)「オープンデータと人文情報学」

亀田堯宙「地域歴史資料のオープン化事例と課題」

特別報告

本多美穂 (佐賀県立図書館)「佐賀県立図書館データベースのリニューアルについて」

牛島清豪 (株式会社ローカルメディアラボ)「デジタルアーカイブ×シビックテックの可能性」

吉賀夏子 (佐賀大学総合情報基盤センター)「小城藩日記プロジェクトの紹介」

伊藤昭弘 (佐賀大学地域学歴史文化研究センター)「なぜ小城藩日記プロジェクトを始めたか」

・地域連携・教育ユニット研究会 第3回 (2020年2月21日 於: 国立歴史民俗博物館)

趣旨説明 天野真志

報告 三上喜孝「博物館展示を活用した「課題解決型学習」の試み～日韓の大学を対象にした2018,19年度の実践例の紹介～」

阿見雄之 (東京国立博物館)「学校教育・生涯教育 (一般利用) に向けた文化財・文化資源情報の在り方とは」

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

阿見 雄之 東京国立博物館・主任研究員

伊藤 昭弘 佐賀大学・准教授

岩崎奈緒子 京都大学総合博物館・館長

宇陀 則彦 筑波大学・准教授 (2020年1月～ 教授)

大向 一輝 国立情報学研究所・准教授

岡田 義弘 九州大学・教授

小川 正人 北海道博物館・アイヌ民族文化研究センター長兼学芸副館長, 研究部長

奥村 弘 神戸大学大学院・教授

五島 敏芳 京都大学総合博物館・講師

柴原永遠男 大阪歴史博物館・館長

崎山 直樹 千葉大学・講師

篠原 徹 滋賀県立琵琶湖博物館・館長

島立 理子 千葉県立中央博物館・主任上席研究員

新 和宏 千葉市科学館・館長補佐

関野 樹 国際日本文化研究センター・教授

高田 良宏 金沢大学・准教授

研谷 紀夫 関西大学・教授

原 正一郎 京都大学・教授

宮武 正登 佐賀大学・教授

百原 新 千葉大学・教授

藪田 貫 兵庫県立歴史博物館・館長

山家 浩樹 東京大学史料編纂所・教授

山田 太造 東京大学史料編纂所・助教

青山 宏夫 本館研究部・教授

荒川 章二 本館研究部・教授

内田 順子 本館研究部・准教授

小倉 慈司 本館研究部・准教授

小池 淳一 本館研究部・教授

橋本 雄太 本館研究部・助教

関沢まゆみ 本館研究部・教授

◎西谷 大 本館研究部・教授・副館長

日高 薫 本館研究部・教授

三上 喜孝 本館研究部・教授

天野 真志 本館研究部・特任准教授

荒木 和憲 本館研究部・准教授

大久保純一 本館研究部・教授

久留島 浩 本館・館長

○後藤 真 本館研究部・准教授

齋藤 努 本館研究部・教授

鈴木 卓治 本館研究部・教授

高田 貫太 本館研究部・准教授

原山 浩介 本館研究部・准教授

松田 睦彦 本館研究部・准教授

村木 二郎 本館研究部・准教授

(2) 広領域連携型基幹研究プロジェクト
 日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築
 (主導機関：国立歴史民俗博物館，国立国語研究所)
 地域における歴史文化研究拠点の構築
 2016～2021年度
 (研究代表者 小池淳一)

1. 目的

日本列島上の地域社会においては、その構造的な変動や東日本大震災をはじめとする災害によって、歴史文化の継承が危機に瀕している。本事業は、そうした地域社会の変化に対応し、次代へ歴史と文化を継承していくためのシステムの構築を目的としている。特に地域社会における多様な文化資源を保存継承し、それらを伝えていくための拠点の形成とそれを維持していくための条件について集中的に調査研究し、具体的な提言をおこないたい。

日本列島は地震や津波、台風など古くから数多くの災害に見舞われてきた。また高度経済成長や開発によって地域社会は動揺し、人びとをとりまく生活環境は抜本的な変化にさらされている。その中で地域の文化は抛りどころを失い、記録や遺物、伝承や芸能は保存・維持することが困難になりつつある。これらは生活の基層をなしているだけにその消滅は表面化しづらく、気づいた時には取り返しのつかない段階まで崩壊している場合が少なくない。本事業では歴史学における資料保存運動や民俗学における祭礼・芸能の継承活動などをふまえ、地域社会における文化の拠点を多角的複層的にとらえ、その可能性を探るものである。これらは人文学の最も基礎的な部分を構成しており、複数の学問分野を結ぶ核でもある。この実状と再生を考えることは人文学の基盤を守ることであるとともに新たな学問領域の創成を探ることにもつながっている。

具体的に共同研究では、東北地方の太平洋岸地帯と山間部の比較検討に加え、四国地方における地域文化をさらに対象として調査分析を進める。次いで第2にそうした国内における災害や地域変動に対応できる歴史文化研究の拠点の特徴と課題を東アジア世界における比較研究に広げていく。

調査対象地としては東北地方の宮城県気仙沼市、南三陸町、石巻市、岩手県宮古市などに加えて、福島県只見町、南会津町、石川県輪島市皆月等を取りあげる。さらに四国地方では高知市、徳島市等を予定している。アジアにおける歴史文化研究の拠点比較については韓国国立民俗博物館、台湾国立歴史博物館等との協力、連携を図る予定である。

2. 今年度の研究計画

日本列島内での調査研究を継続する一方で、韓国における災害および地域変動に関する調査と地域における歴史文化研究拠点の把握と可能性に関する調査を行う。併せて昨年度開催した地域社会の風土や環境に即した歴史文化研究拠点の創設と維持・発展に関する国際シンポジウムの成果をとりまとめ、編集刊行する。併せて協定等で連携している大学等での授業の成果をもとに地域文化に関する教科書を作成する。

3. 今年度の研究経過

【研究会】

2019年5月11日～12日 第1回研究会（国立民族学博物館共同研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」と共催）

5月11日

日高真吾（国立民族学博物館）「地域文化の宝箱について」, 「奥三面の山に生かされたくらしパック案」

武智邦博（枚方市立田中鋳物民俗資料館）「地域文化の宝箱枚方パックについて」

葉山 茂（国立歴史民俗博物館）「気仙沼パック案」

伊達仁美（京都造形芸術大学）「久多パック案「久多のたからもの」（仮称）」

5月12日

国立民族学博物館企画展「子ども／おもちゃの博覧会」見学

2019年11月29日～12月1日 第2回研究会（国立民俗博物館（韓国）ほか）

11月29日～30日

国立民俗博物館において日韓共催展「昆布とミヨク」のシンポジウム参加、展示見学

11月30日～12月1日

仁川市マウル博物館見学, 日本人租界・中国人租界巡見

2019年3月7日～9日 第3回研究会(愛媛県歴史文化博物館ほか)

3月7日

愛媛県歴史文化博物館の企画展「四国・愛媛の災害史と文化財レスキュー」の見学, 展示についての討論

3月8日～9日

伊方町立町見郷土館・伊方ビジターズハウス見学, 宇和島市内の巡見

【報告書・成果論集】

『歴博』125号〔特集・よみがえる地域文化〕国立歴史民俗博物館, 2019年7月

日高真吾, 黄貞燕ほか著『地域文化を保存する—実践者の視点から』国立民族学博物館, 2019年10月

大本敬久著『四国・愛媛の災害史と文化財レスキュー』愛媛県歴史文化博物館, 2020年2月

葉山茂, 日高真吾ほか著『追尋新地域文化研究の可能性—從日本和台湾觀察區域文化的活用法—與居民一同學習在地』人間文化研究機構, 2020年3月

山田 巖子編『地方における「民俗」思想の浸透と具現化—渋沢敬三影響下の地方民間博物館』弘前大学地域未来創生センター, 2020年3月

小池淳一・日高真吾ほか著『地域文化の可能性』人間文化研究機構, 2020年3月

【大学等における教育プログラム】

・弘前大学人文社会科学部との協定に基づき, リレー講義において学部3年生を対象とした「地域文化振興論」の授業2コマを担当した。

【展示等】

・特集展示第4展示室特集展示「よみがえる地域文化—岐路に立つ共同体(コミュニティ)のいま—」2019年7月23日(火)～11月4日(月)を開催した。

・愛媛県立歴史文化博物館において特別展「四国・愛媛の災害史と文化財レスキュー」2020年2月15日(土)～4月7日(火)を開催した。

4. 今年度の研究成果

本研究は人間文化研究機構の基幹研究の一翼も担っている。そのために, 機構内の他のユニットとの連携を図り, 第1回研究会では民博で共同して研究会を開催した(2019年5月11日～12日)。これにより, 地域における多様な拠点の機能についての認識と学習キット等の開発に関する新知見を得ることができた。

第2回研究会は韓国ソウルおよびインチョンで開催した。これにより, 地域文化研究の国際連携の可能性を韓国の地域博物館の展示活動や資料収集を通して議論することができた。

また研究成果の発信の一環として, 歴博第4展示室の特集展示「よみがえる地域文化—岐路に立つ共同体(コミュニティ)のいま—」(2019年7月23日～11月4日), 愛媛県立歴史文化博物館の特別展「四国・愛媛の災害史と文化財レスキュー」(2020年2月15日～4月7日)の開催や展示協力を通じて, 地域資料の活用と, 展示を通しての分析の深化を図ることができた。なお, 愛媛県立歴史文化博物館で開催した第3回の研究会では展示をふまえ, また地域における比較的小規模の資料館活動の取り組みを通して, 地域文化の表象に関する議論を行なった。

昨年度におこなった鹿児島大学大学院人文社会科学研究科における連携講義の内容を大学等における教科書とするために, 今年度は講義内容を再検討し, 冊子体で刊行した(『地域文化の可能性』, 2020年3月)。この刊行により, 本共同研究および機構の基幹研究の成果を大学等の教育に広く活かしていく方策を具体化し, さらに一般社会への発信の可能性を登録することができた。

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

(館外)

笹原 亮二 国立民族学博物館研究戦略センター・教授

日高 真吾 国立民族学博物館文化資源センター・准教授

川島 秀一 東北大学災害国際科学研究所・教授

古川 実 青森県立郷土館学芸課・課長
 梅津 一史 秋田県立博物館学芸課・学芸主事
 赤沼 英男 岩手県立博物館学芸二課・上席研究員
 山口 博之 天童市立旧東村山郡役所資料館・館長
 石黒 宏治 山形県立博物館学芸課・研究員
 佐藤 憲幸 東北歴史博物館企画部・主任研究員
 内山 大介 福島県立博物館学芸課・副主任学芸員
 田邊 幹 新潟県立歴史博物館学芸課・主任研究員
 大本 敬久 愛媛県立歴史文化博物館学芸課・学芸主事
 梅野 光興 高知県立歴史民俗資料館学芸課・学芸主事
 磯本 宏紀 徳島県立博物館学芸課・学芸係長
 田井 静明 瀬戸内海歴史民俗資料館・主任専門研究員
 久野 俊彦 東洋大学文学部・非常勤講師

(館内)

内田 順子 本館研究部・准教授
 ○川村 清志 本館研究部・准教授
 松田 陸彦 本館研究部・准教授
 三上 喜孝 本館研究部・准教授
 村木 二郎 本館研究部・准教授
 葉山 茂 本館研究部・特任助教
 ◎小池 淳一 本館研究部・教授

(3) 異分野融合による総合書物学の構築 (主導機関：国文学研究資料館) 古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究 2016～2021年度 (研究代表者 小倉慈司)

1. 目的

本共同研究は2014年10月より機構内連携研究として開始された準備研究「古代の百科全書『延喜式』の総合書物学研究—多分野協働をめざして—」を踏まえて、広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」の構成ユニットとして開始するものである。同じく2016年度より採択された科研基盤研究(B)「史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究」(小倉慈司代表)とも連動して活動を行なう。また当館が推進する「総合資料学の創成」の一環としても位置づけられる。そのため以下の記述は、両者の成果も合わせた形で記すこととした。

古代日本の法制書『延喜式』を「古代の百科全書」としての観点から、分析科学・薬学・食品学・考古学・技術史等、古代史(文献史学)以外の様々な分野と協働して研究を進めることにより、新たな視点に基づいた研究を生み出すとともに、『延喜式』の様々な情報が広く活用されるような体制を作り上げる。

これまでの『延喜式』研究の到達点として、現在『訳注日本史料』が刊行中であるが、写本研究・本文校訂の観点からは不十分な点があり、また同書に使用されていない新たな善写本が近年、学界で紹介されている。そこで本研究では、まず写本研究に基づいた新たな校訂本文を作成し、さらに様々な分野の研究者と協働して現代語訳・英訳を試みるなかで、新たな『延喜式』研究を生み出していきたい。

達成目標は大きく分けて以下の2点である。

①分野の枠を越えた協働研究 古代史(文献史学)以外の分野、具体的には分析科学や薬学・食品学・考古学等の諸分野の研究者と協働して『延喜式』の研究を進めることにより、古代の知識と技術の現代的活用など新たな視点に基づいた研究を生み出す。研究にあたっては日本国内のみならずアメリカ等海外の日本史研究者、また古代朝鮮史等の研究者とも連携し、東アジア史の視点を重視して進める。

②垣根の開放 海外も含めた幅広い分野の研究者や一般市民が最新の『延喜式』研究成果を把握できるよう、写本画像・校訂本文にタグ付けをおこなったデータベースや現代語訳・英訳データベース、さらに文献目録データベースを構築して公開する。作成にあたっては海外の研究者と連携して進めることにより、海外の研究者にとっても利

用しやすい形を模索する。

2. 今年度の研究計画

今年度は分科会を編成して以下の作業を実施する。

- ・校訂本文3巻分の作成。
 - ・現代語訳2巻分の作成。
 - ・延喜式データベース公開に向けてのデータ整理・検討
 - ・延喜式関係論文目録データベースの増補補訂
 - ・水産品および金属加飾、土器、英訳をテーマとする多分野協働研究の推進
 - ・全体研究会2回開催（8月頃、2月頃）
- 科研基盤研究（B）「史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究」共催

3. 今年度の研究経過

2019年9月に東海大学海洋学部と学術交流協定を締結した。またこれまでRA・資料整理補助員として本研究に参加していた若手研究者1名が研究機関に就職したため、新たに共同研究員に追加した。

今年度は2度の全体研究会を予定していたが、COVID-19の流行により3月8日の研究会を急遽中止し、1回のみとなった。8月31日に歴博にて開催、7本の報告をおこない、例年通り公開とし、メンバーのほか、大学院生・外部研究者を含め、35名が参加した。

昨年度、公開を開始した延喜式関係論文目録については、引き続きデータ増補・修正を進め、8月に4,220件を追加し、合計18,405件となった。後半期作業分については2020年度に公開予定である。

分科会については、主計式（土器）、内膳大膳式（食品）、TEI（データベース検討）、本文校訂、現代語訳・英訳の各分科会において、研究会・打合わせ・調査等の活動を行なった。

主計式分科会では駒沢大学にて土器イラスト作成の検討等を行なった（7月12日、12月26日）。

TEI分科会では延喜式本文データベース作成に向けて、仕様やデータ整理等についての検討を行なった。

英訳検討については、アメリカより若手研究者を招き、5月30日より7月3日にかけて、太政官式・正親式を中心にワークショップ等を開催した。また2月24日より3月13日にかけても再度、実施した。ただし2回目はCOVID-19の拡大により、館外に広く声をかけることはせず、小規模にて行なった。

現代語訳分科会は毎月1回の頻度で典薬式・正親式・中務式の検討を進めた。

昨年度より本格化した水産品を対象とした調査・研究活動については、ホヤ・貽貝のまぜ鯨や堅魚加工品調査・製造実験についての調査を進め、1月からはアワビなれ鯨製造実験に取り組んだ。堅魚加工品調査については学術交流協定に基づき、東海大学海洋学部の学生が取り組んだ塩鯨商品開発プロジェクトにも協力した。

また以前より成分分析に協力いただいている味の素食品研究所と今後の協力関係について、2020年度に契約を交わす方向で調整を進めた。

なお、2020年2月からのCOVID-19流行により、先述した通り3月開催予定の全体研究会を中止したほか、同じく3月に南九州（宮崎～鹿児島～熊本）を調査地域として企画していた『延喜式』記載に関わる土器による醸造の民俗技術調査を延期することになった。

【全体研究会】

全体研究会（通算10回） 2019年8月31日 於国立歴史民俗博物館 参加者総数35名

小倉 慈司 昨年度後半および今年度前半の活動、今年度後半の研究活動予定

古田 一史 『延喜式』現代語訳活動状況報告

小川 宏和 古代のツトと贄

中村 光一 「三衛府式」の構成

余語 琢磨 延喜式中の大型須恵器・諸道具と醸造プロセス—酢を事例とする研究ノート—

高橋 人夢 弘仁式・貞観式逸文集成作業の紹介

三舟 隆之 古代発酵食品の復元について—「豉」と酢を中心に—

小倉報告は前年度から今年度前半にかけての活動状況の報告および今年度後半の活動予定の説明。

古田報告では『延喜式』の現代語訳および条文概要紹介文の作成について、データベース化との関わりから作業の基本的な方針を確認し、現在の作業プロセスを示しつつ進捗を報告し、課題点を提示した。

小川報告では古代に食事を包装するために用いられたツトに着目し、ツトが食品の保存（塩漬け）に適するため

によく用いられ、これが贈答品の表象となったとした。そして畿内周辺の供御所の生産者（貢納者）が顕名してツトに包まれた魚鳥を天皇に直接奏覧するという儀式を経る贅について、天皇に対して自発的な贈答品として食品を献上する行為が、その主体を贅戸として把握することで制度化されたのではないかと指摘した。

中村報告では延喜左右近衛式・左右衛門式・左右兵衛式（以上を「三衛府式」と呼称）の条文配列に着目し、これらの条文の概要から相互の関連性を分析した。そして三衛府式の配列は左右近衛式が比較的整っているのに対し、左右衛門・左右兵衛両式はやや雑然としており、『延喜式』編纂時の編纂態度が異なったのではないかと指摘した。

余語報告では古代における酢の醸造について、土器の観点から検討を行った。推定される酢の醸造法において、その経過から嫌気性条件と好気性条件とを迅速に切り替える必要があることを前提に、これを古代の須恵器で行うための蓋に相当する物品を史料上から析出した。

高橋報告では『弘仁式・貞観式逸文集成』公刊以降の成果を中心に弘仁式・貞観式を巡る研究状況を整理し、現在行っている逸文収集作業について報告した。そして『延喜式』との対応関係から問題を含んでいる『新撰年中行事』や『小野宮年中行事』等の史料を提示した。

三舟報告では東京医療保険大学における古代の甑と酢の復原実験について、写真などを踏まえつつその経過と結果とが説明された。特に酢について、『延喜式』に記載された原料のみから製造することは困難であり、実際には造酒司などの製造官司における技術蓄積など、明文化されない前提が存在すると考えられるとした。

【史料調査等】

東海大学海洋学部（7月22日）・御食国若狭おぼま食文化館（7月29日）・株式会社になべん（8月5日）・静岡県水産技術研究所（8月21日）・民宿「佐助」（10月21～22日）等において水産加工品研究調査・なれ鮓調査を行ない、1月30日より歴博にてアワビなれ鮓製造実験を開始した。実験にはRAや補助業務を依頼している院生も参加した。

この他、『延喜式覆奏短尺草写』の調査のため、9月18日に宮内庁書陵部図書寮文庫、12月8～9日に京都御所東山御文庫を調査した。

4. 今年度の研究成果と成果発信

今年度の主な研究成果および成果発信は以下の通りである。

- ①写本系統研究を継続し、巻5・17校訂文を公刊、巻11等の校訂文を投稿した。
- ②公益財団法人味の素食文化センター・味の素株式会社食品研究所の協力を得て、アワビなれ鮓実験および東海大学塩麩商品開発プロジェクトにかかる成分分析を実施した。塩麩商品開発プロジェクトについては、第21回ジャパン・インターナショナル・シーフードショー（2019年8月23日、東京ビッグサイト南展示棟）ブース出展、和食文化学会第2回研究大会（2019年10月20日、マリカ市民ホール（山形県鶴岡市））ポスターセッション花森功仁子・川本大智ほか「西伊豆田子地区に残る塩カツオを用いた商品開発」等が行なわれた。
- ③定期的に現代語訳検討会および英訳検討会を実施し、現代語訳作業を進めるとともに来年度以降の英訳作業、海外若手古代史研究者育成に向けての検討を進めた。
- ④延喜式関係論文目録データベースのデータを増補した。2019年8月データ4,220件増補、修正（のべ18,405件）
- ⑤2019年8月31日に全体研究集会を開催した（詳細は別掲）。
- ⑥2019年12月に『国立歴史民俗博物館研究報告』218「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究 中間報告」を刊行した。総頁508頁で研究概要および24本の論考を収録。

小倉 慈司 古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究 中間報告

相曾 貴志 勢多家旧蔵延喜式について

早川 万年 延喜神祇式の本文校訂について

小倉 慈司 『延喜式』巻五校訂（稿）

三輪 仁美 『延喜式』の写本系統に関する試論

小倉 慈司 『延喜式』巻一七の写本系統と本文校訂

清武 雄二・神戸 航介・堀部 猛・古田 一史 『延喜式』巻一七「内匠寮」現代語訳（稿）

倉本 一宏 『延喜式』と頒曆

小川 宏和 赤幡考

永島 朋子 延喜太政官式に見える挿頭花について

井上 正望 廢務からみた神祇祭祀

神戸 航介 平安時代の検交替使と朝使
 古田 一史 雑工戸の変質と造兵司の解体
 中村 光一 江戸時代における『延喜式』研究の一様相
 堀部 猛 古代の鍍金と内匠式
 石川 智士・花森功仁子・武藤 文人

延喜式研究と水産研究を題材とした異分野融合研究体制の確立にむけた取り組みと課題

小風 尚樹・後藤 真 『延喜式』へのTEI適用と日本史資料のテキストデータ共有・流通
 山口 えり 海外における『延喜式』の研究状況
 大隅亜希子 日本古代における布の単位「端」と「段」について
 荒井 秀規 瓮(盆)(ホトギ)と瓮・缶(モタイ)に関する覚え書き
 酒井 清治 主計式の題と出土土器のハソウ
 仁藤 敦史 「延喜齋宮式」から見た堅魚製品の貢納と消費
 清武 雄二 古代の税物生産における長鯨
 三舟 隆之・中村絢子 古代の堅魚製品の復元
 天野 誠

遺跡発掘調査報告書に基づく『延喜式典葉寮』に記述された「諸国進年料雑葉」の桃仁の自給について

<https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/ronbun/ronbun9/index.html>

⑦歴博モバイルミュージアム「古代国家とアワビ～『延喜式』にみる生産と貢納～」を歴博、成田市芸術文化センター、日本科学未来館にて展示した。

⑧他ユニットと連携して総合書物学のサイトにて、活動概要、研究メンバー、年度毎の活動状況を発信した。

https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sougoushomotsu.web/rekihaku_b31.html

⑨前年度に引き続き、東京医療保健大学の卒研ゼミ活動に対し、研究計画策定支援、成分分析支援を行なった。またメンバーが広島市立大学において『延喜式』英訳に取り組むゼミ活動を行なった。

⑩総合情報誌『歴博』219(2020年3月20日刊)にて「ひろがる『延喜式』」と題した特集を組んだ。掲載論考は以下の通りである。

小倉 慈司 『延喜式』は官人の業務マニュアル

早川 万年 神社の歴史と『延喜式』

荒井 秀規 謎の発酵食品“豉(くき)”

清武 雄二、石川 智士 『延喜式』と水産研究 古代の水産食品に関する多分野協働研究への挑戦

仁藤 敦史 コラム『延喜式』と陵墓設定の意味

山口 えり コラムThe Power of Engishiki—『延喜式』の国際発信

<https://www.rekihaku.ac.jp/outline/publication/rekihaku/index.html>

【論文等】

『国立歴史民俗博物館研究報告』218「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究 中間報告」, 2018年12月, 査読有 所収論考については上記参照

総合情報誌『歴博』219「特集 ひろがる『延喜式』」, 2020年3月, 所収論考については上記参照

酒井清治, 韓国全羅道の楔形陶枕と大庭寺窯跡の陶枕について, 郵政考古紀要70(歴史・民族・考古学論攷(II)), 2019年6月, 依頼有

稲田奈津子, 日本古代皇后制度的形成與中国礼制, 古今論衡33, 中央研究院歴史語言研究所(台湾), 2019年12月, 査読有

山口えり, 『古代国家の祈雨儀礼と災害認識』, 塙書房, 2020年2月

三舟隆之, 古代における鯨の加工・保存法の復元とその成分, 古代文化71-3, 2019年, 査読有

中村光一, 平安前期における近衛大将の補任について, 日本史学集録40, 45-57, 2019年7月, 査読有

古田一史, 律令国家の軍事行政における鞠智城, 令和元年度鞠智城跡「特別研究」論文集『鞠智城と古代社会』8, 熊本県教育委員会, 2020年3月

小倉慈司, 皮革生産賤視観の発生, 日本史研究691, 2020年3月, 査読有

【分担執筆・共著】

- 小倉慈司, 『勘例』に見える九世紀以前の史料, 『陽明文庫 近衛家伝来の至宝』, 吉川弘文館, 2019年4月
- 仁藤敦史 (川尻秋生編), 古代都城の思想, 『古代の都城と交通』, 竹林舎, 2019年5月
- 荒井秀規 (川尻秋生編), 古代東日本の交通—駅路と往来する人々—, 『古代の都城と交通』, 竹林舎, 2019年5月
- 稲田奈津子 (狭川真一さん還暦記念会編) 武寧王妃墓誌の「改葬」, 『論集 葬送・墓・石塔』, 2019年5月
- 酒井清治, 関東における須恵器生産と流通—武蔵を中心に—, 特別展図録『那須の古代窯業—瓦・須恵器の生産と流通—』大田原市なす風土記の丘湯津上資料館, 2019年9月
- 仁藤敦史 (白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会編), 天若日子伝承再考—モガリの主宰—, 『古墳と国家形成期の諸問題』, 山川出版社, 2019年10月
- 酒井清治 (白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会編), 日韓の軟質系土器と軟質土器の生産, 『古墳と国家形成期の諸問題』, 山川出版社, 2019年10月
- 三舟隆之, 大甕を使う—文献史料に見える「甕」とその用法—, 第22回古代官衙・集落研究会報告書『官衙・集落と大甕』, 奈良文化財研究所, 2019年12月
- 酒井清治, 関東の渡来人, 『日本の中の百濟—本州・九州地域』, 忠清南道歴史文化研究院, 2019年12月
- 小倉慈司 (田島公編), 東山御文庫本『栲囊抄』解題・影印, 『禁裏・公家文庫研究』7, 思文閣出版, 2020年3月
- 堀部猛, 『常陸国風土記』にみる郡家の移転, 平成28年度～令和元年度科学研究費補助金 (基盤研究C研究成果報告書)『古代日本における国郡制形成に関する考古学的研究』(研究代表者 大橋泰夫), 2020年2月
- 小倉慈司 (新古代史の会編), 『延喜式』, 『テーマで学ぶ日本古代史』社会・史料編, 吉川弘文館, 2020年6月

【口頭報告】

- 荒井秀規, 公式令朝集使条の「出雲以北」と延喜主税式位禄条の「伯耆以西」, 第30回出雲古代史研究会古代出雲の諸相, 島根県埋蔵文化財調査センター, 2019年8月3日
- 山口えり, 日本古代の陰陽道と「理運」, 第8回陰陽道史研究の会, 佛教大学, 2019年9月8日
- 小倉慈司, 古代の天皇と神祇祭祀, 天皇制と日本—歴史, 政治, 社会, 文化との関わりをめぐって—学術シンポジウム, 北京外国語大学, 2019年9月28日
- 堀部猛, 『常陸国風土記』にみる香島郡家の移転をめぐって, 島根大学山陰研究プロジェクト『出雲国風土記』の学際的研究, 島根大学生涯教育推進センター, 2019年10月20日
- 小倉慈司, 皮革生産賤視観の発生, 日本史研究会古代史部会例会 (大会個別報告代替報告), 機関紙会館, 2019年10月22日
- 仁藤敦史, 古代国家と讓位制の成立—「平成の代替わり」を古代史から考える—, シンポジウム「天皇と皇位継承のコスモロジー」, 明治大学, 2019年4月13日

【講演等】

- 酒井清治, 生産の考古学—窯業, 日本考古学協会第85回 (2019年度) 総会, 駒沢大学, 2019年5月18日
- 仁藤敦史, 太上天皇の成立と展開—皇極・孝謙・斉明の事例を中心に—, 國學院大學文化講演会, 国学院大学, 2019年6月8日
- 小倉慈司, 江戸時代における古代典籍の伝来—政事要略を中心に—, 蓬左文庫典籍研究会講演会, 愛知大学車道キャンパス, 2019年6月30日
- 早川万年, 聖武天皇の東国行幸, 養老歴史講座, 養老町中央公民館, 2019年8月25日
- 荒井秀規, 北陸と東国の人面墨書土器を比べてみる, 企画展「古代とやまのまじない」記念講演会, 富山市民俗民芸村管理センター, 2019年10月5日
- 荒井秀規, 東国と蝦夷政策, 帝京大学総合博物館企画展「キャンパス遺跡発見伝 古代多摩に生きたエミシの謎を追え」エミシ研究講座第2回, 帝京大学八王子キャンパス, 2019年11月9日
- 山口えり, 令和改元と大嘗祭, 国際フェスタ・国際学部公開講座, 広島国際会議場, 2019年11月17日有
- 小倉慈司, 延喜神名式と式内社, 皇学館大学史学会, 皇学館大学, 2019年11月22日
- 荒井秀規, 古代の郡の成立と行政, 県博講座「古代神奈川の郡の役所」第1回, 神奈川県立歴史博物館, 2020年1月12日
- 三舟隆之, 古代における醸造と甕, 第41回山梨考古学協会記念講演, 山梨学院大学, 2020年2月16日

【展示】

歴博モバイルミュージアム「古代国家とアワビ 『延喜式』にみる生産と貢納」, (2019年3月19日)～6月19日, 国立歴史民俗博物館メディアルーム, 7月18日～8月18日, 成田市芸術文化センター, 10月20日, 日本科学未来館

【その他】

小倉慈司, 小林宣彦著『律令国家の祭祀と災異』, 神社新報3446, 2019年5月13日
 清武雄二, 北陸歴史よもやま話 ホヤ 古代若狭の高級食材, 読売新聞(石川・富山面) 2019年6月
 山口えり, 塩川哲朗著『古代の祭祀構造と伊勢神宮』, 史学雑誌128-8, 2019年8月
 三舟隆之, 古代食研究の現状と課題, 日本歴史858, 2019年11月
 小倉慈司, 包まれた食べ物の歴史—古代日本を中心として, vesta117, 2020年2月
 仁藤敦史, 書評 古市晃著『古代国家形成期の王宮と地域社会』, 歴史評論838, 2020年2月
 清武雄二, 古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究, わくわくする研究を歴博で!—『国立歴史民俗博物館の共同研究か—』3, 国立歴史民俗博物館, 2020年3月
 小倉慈司, 書評 矢野建一著『日本古代の宗教と社会』, 歴史評論840, 2020年4月
 (協力) 東海大学海洋学部ブース出展, 第21回ジャパン・インターナショナル・シーフードショー(一般社団法人大日本水産会主催)

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

(館外)

相曾 貴志 宮内庁書陵部図書課・首席研究官
 天野 誠 千葉県立中央博物館・主任上席研究員
 荒井 秀規 藤沢市生涯学習部郷土歴史課・主査上級(学芸員)
 石川 智士 東海大学海洋学部・教授
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・助教
 小川 宏和 御食国わかさ小浜食文化館・学芸員
 小口 雅史 法政大学文学部・教授(国際日本学研究所・所長)
 神戸 航介 宮内庁書陵部編修課・研究員
 倉本 一宏 国際日本文化研究センター・教授
 酒井 清治 駒澤大学文学部・教授
 中村 光一 上武大学ビジネス情報学部・教授
 西川 明彦 宮内庁正倉院事務所・所長
 早川 万年 岐阜大学教育学部・教授
 堀部 猛 土浦市立博物館・市史編さん係長
 町 泉寿郎 二松学舎大学文学部・教授
 三舟 隆之 東京医療保健大学・教授
 三輪 仁美 宮内庁書陵部編修課・研究員
 山口 えり 広島市立大学国際学部・准教授
 余語 琢磨 早稲田大学人間科学学術院・准教授
 Ethan Segal ミシガン州立大学歴史学部・准教授

(館内)

清武 雄二 本館研究部・特任助教
 後藤 真 本館研究部・准教授
 鈴木 卓治 本館研究部・教授
 仁藤 敦史 本館研究部・教授
 林部 均 本館研究部・教授
 村木 二郎 本館研究部・准教授
 ○三上 喜孝 本館研究部・教授
 ◎小倉 慈司 本館研究部・准教授
 小風 尚樹 東京大学大学院博士後期課程(研究協力者)
 古田 一史 R A

(4) ネットワーク型基幹研究プロジェクト日本関連在外資料調査研究・活用
 ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用
 ―日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築―
 2016～2021年度
 (プロジェクト代表者 日高 薫)

1. 目的

本研究は、ヨーロッパ各地に現存する19世紀日本関連資料の調査をおこない、それらをデータベース公開、展示、シンポジウム、セミナー、教育プログラム、大学における教育など、多彩な方法により効果的に活用することによって、日本研究や日本文化理解を促進することを目的とする。3つの異なる地域における異なるレベルの事業を、現地の博物館・大学などとの学術協力協定のもと、協同で展開することにより、日本・現地双方へ成果の還元を図るとともに、日本文化発信の国際連携モデルの構築を目指すものである。

(1) ウィーンを中心としたシーボルト(子)関係資料の調査研究では、シーボルトの子どもたちの収集「もの資料」および文献資料の総合的調査に基づく《資源基盤型》の日本文化発信をおこなう。(2) イギリスにおける日本展示活性化事業は、日本資料の展示・活用方法を、現地の学芸員や教育普及担当者と共に検討し、モデルとなる展示(常設および企画)を各地で実現させていく《対話型》の発信スタイルをとる。(3) スイスにおける大学教育連携事業は、現地大学および美術館・博物館と協力関係を保ちながら、資料調査と展示協力の過程において、学生および学芸員の教育やスキルアップを図るもので、現地において次世代の日本紹介を担うことのできる研究者の養成を手助けする《人材育成型》の事業を推進している。

2. 今年度の研究計画

各チームにおける調査研究および教育事業を継続し、データベース化を進めるとともに、ミュンヘン五大陸博物館(2019年10月～)およびウィーン世界博物館(2020年2月～)における企画展示の共催、関連国際シンポジウムの開催(2020年3月)等によって、研究成果の国際的発信および日本関係資料の活用(展示・教育)を実践する。さらにこれらを批判・検証するための国際研究集会を国内外で開催し、在外資料の現地における活用方法について議論を深め、海外におけるニーズや日本文化理解の現状に即した新たな日本文化発信を探る。

【総括チーム】

(1) 国際連携展示

- ① ミュンヘン五大陸博物館およびウィーン世界博物館における国際連携展示の開催
- ② プロジェクトによる活用事業の関係者が互いの成果を共有し、検証するために、ミュンヘンおよびウィーンの企画展示の会期が重なる時期(2020年3月)にプロジェクトメンバーによる展示見学会を開催

(2) シンポジウム

- ① ウィーン世界博物館の企画展示に関連した国際シンポジウムの開催
- ② プロジェクトによる活用事業の関係者が互いの成果を共有し、検証するための国際研究集会「海外で《日本展示》をおこなうこと(仮題)」の国内(東京・10月)および海外(3月)における開催

(3) その他

- ① 本プロジェクトの活動内容を掲載する日英バイリンガルのホームページおよび日本語のニューズレターを通じて、国際的かつ恒常的な情報発信をおこなう
- ② 在外資料調査等への若手研究者の参加を推進し、人材育成に努める

【A ウィーン・チーム】

(1) 現地調査

- ① ウィーン世界博物館所蔵のハインリッヒ・フォン・シーボルト収集の「もの資料」の調査・撮影
- ② シーボルトの末裔であるブランデンシュタイン＝ツェッペリン家所蔵のシーボルト父子関連文献資料の調査・撮影
- ③ ドイツ国内の関連資料の調査・撮影

(2) データベース

公開中の「シーボルト父子関係資料データベース」の更新

(3) 展示等

ミュンヘン五大陸博物館およびウィーン世界博物館における国際連携展示の開催

【B イギリス・チーム】

(1) 現地調査

スコットランドにおける日本関連資料の調査

(2) 教育プログラム等

ダラム大学東洋博物館およびスコットランドにおける日本コレクションを活用した教育プログラムの共同開発

(3) 展示等

ダラム大学東洋博物館企画展示およびウェールズ国立博物館の常設展示への支援事業の推進

【C スイス・チーム】

(1) 現地調査

- ① ジュネーヴ市立版画博物館所蔵の俳諧摺物に関する調査研究
- ② ジュネーヴ市立アリアナ美術館所蔵陶磁器に関する調査研究
- ③ ロイトリンゲン大学所蔵ベルツ収集染織資料の調査（チューリッヒ大学との共同）

(2) 教育プログラム等

チューリッヒ大学との共同によるベルツ・コレクション調査実習プログラムの実施

3. 今年度の研究経過

【総括チーム】

(1) 国際連携展示

- ① ミュンヘン五大陸博物館およびウィーン世界博物館における国際連携展示を共同で開催するにあたり、役割や経費分担について相手機関と協議し、協働で準備を進めた。
- ② 上記二つの展覧会における国際連携を批判・検証するため、プロジェクトのメンバーを中心とした関係者による見学会を立案した（新型コロナウイルス感染拡大により中止）。

(2) シンポジウム

- ① 第36回人文機構シンポジウム「海外で《日本》を展示すること—KIZUNA展からその意義を探る—」の開催に協力した。
- ② ミュンヘンにおける国際研究集会International Conference: Exhibiting "Japan" Overseas（邦題：国際研究集会「海外で《日本》を展示すること」）を立案した。
- ③ ウィーンにおける国際シンポジウムInternational Symposium: More Insights into the Heinrich von Siebold Collection（邦題：国際シンポジウム「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション—さらなる洞察」）を世界博物館とともに立案し、予稿集を作成した。

(3) その他

- ① ホームページ、ニュースレターにより情報発信をおこなうとともに、メディアにも働きかけをおこなった。
- ② 在外資料調査や展示準備にあたり、学生や若手研究者等に参画させ、人材育成に努めた。

【A ウィーン・チーム】

(1) 現地調査

- ① ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家において、シーボルト父子関係資料（文献およびもの資料）の調査・撮影を実施し、併せて、ウィーン世界博物館における展示に活用され得るハインリッヒ関係史料の調査・撮影を世界博物館と合同でおこなった（2019年8月）。
- ② ウィーン世界博物館所蔵ハインリッヒ・フォン・シーボルト収集日本関係資料の調査を2回にわたり実施し、楽器・木漆工・染織型紙・金工・彫刻・宗教関係資料・武器武具の調査を進めた（2019年6月および10月）。
- ③ ヴェルツブルクのシーボルト博物館において、シーボルト兄弟が同市に寄贈した資料（甲冑・刀剣・馬具・陶磁器）の調査撮影を実施、合わせて文献資料の収集をおこなった（2019年8月）。

(2) データベース

「データベースれきはく」内の「シーボルト父子関係資料データベース」にウィーン世界博物館所蔵資料（もの資料）の新規データを追加した（金工・彫刻・武器武具・漆工・楽器など）。また、同データベースにブランデンシュタイン＝ツェッペリン家所蔵シーボルト父子関係資料（文献）のドイツ語データを新規に追加して公開、バイリンガル化をおこなった。（2019年3月）。これにより、データベースの内容が劇的に改善され、原資料へのアクセスが容易となるとともに、海外からの利用し易さが向上した。

(3) 展示

- ① ミュンヘン五大陸博物館における企画展示開催に向けて同館と連携して準備を進めた。本展示は、2016～2017年にかけて日本国内5会場を巡回した「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展の凱旋展示に相当する。展示コンセプトや出品資料は、日本側のプロジェクトメンバーの選定をもとに五大陸博物館担当者が決定した。日本側の役割としては、展示場内で映写する動画を公立はこだて未来大学との協力で制作し、また、データベースれきはく「シーボルト父子関係資料データベース」の全データを提供した。あわせて展示ハンドブックの日本語版を刊行した。
- ② ウィーン世界博物館と共同開催した同博物館におけるハインリッヒ・コレクションに関する企画展示において、展示図録（2020年7月刊行、日独語）および展示場内キャプションにおける資料解説の大半を日本側のプロジェクトメンバーが執筆、展示図録掲載の論考10本を日本側が担当した。調査で撮影した資料写真を提供、展示構成において重要な役割を果たす3枚の古写真と現存資料を対照する動画3本を、公立はこだて未来大学と共同で作成し、提供した。

(4) 教育プログラム

ウィーン世界博物館およびブランデンシュタイン城における調査に際して若手研究者等を参加させ、次世代研究者の育成を図った。

【B イギリス・チーム】

(1) 現地調査

グラスゴー博物館機構が所蔵する日本関係資料の調査を行い、同機構が出版を計画している日本コレクションのカタログ作成の支援をおこなった（2018年5月5日、11月2日、11月5～6日、2019年3月15日、3月19・20日）。また、スコットランド・ナショナルトラスト財団との連携により、ポロックハウス（グラスゴー）の室内を飾っている日本資料の調査をおこなった（2018年6月6・7日、11月4・5日、3月20日）。

(2) 展示

- ① ダラム大学東洋博物館との連携による新収蔵の版画コレクションを現地で活用する「Monogatari: the art of storytelling in Japanese woodblock prints」展（2020年5月29日～10月4日開催予定）の開催に向けて準備を進めた。ただし、3月に予定していた調査・打ち合わせ等は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で実施できなかった。
- ② グラスゴー博物館機構およびウェールズ国立博物館において、収蔵常設展示、特別展示（グラスゴー）、常設展示（ウェールズ）に関わる支援事業を継続した。

(3) 教育プログラム

ダラム大学東洋博物館における企画展示「Monogatari」展に関連した教育プログラムの準備をおこなったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、3月に予定していた打ち合わせ等については実施できなかった。

【C スイス・チーム】

(1) 現地調査

ロイトリンゲン工科大学（ドイツ）が所蔵するエルヴィン・フォン・ベルツ収集の染織コレクション調査を同大学、およびチューリッヒ大学との連携により実施し、約210点の詳細な調査をおこなった（2019年11月）。

(2) 展示

- ① ジュネーヴ市立版画美術館が開催を計画している摺物展（共同主催予定）の準備を進行中である。
- ② ジュネーヴ市立アリアナ美術館において開催予定の日本陶磁展（2020年10月～開催予定）の開催に向けて準備を進めた。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、展覧会の開催は延期され、新しい会期は未定。

(3) 教育プログラム

ロイトリンゲン工科大学（ドイツ）が所蔵するエルヴィン・フォン・ベルツ収集の染織コレクション調査を通じて学生の教育をおこなう事業を、同大学およびチューリッヒ大学東洋美術史研究所との連携により2016年度より継続中である。

(4) シンポジウム

ロイトリンゲン工科大学所蔵のエルヴィン・フォン・ベルツ収集染織コレクションの調査・研究を踏まえた国際シンポジウム「Historical Fabrics in a Digital World: The Textile Collection of Reutlingen University」を開催した。(2019年11月14・15日, 会場:ロイトリンゲン大学, 主催:ロイトリンゲン大学, 共催:チューリッヒ大学, ベルン大学, 国立歴史民俗博物館・機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト) 調査に携わってきた歴博, チューリッヒ大, ベルン大等の研究者による研究報告のほか, 日本, アメリカ, ヨーロッパからの報告を加え, 歴史的な染織品コレクションの過去, 現在, 未来を検証した。プロジェクトメンバーのハンス・ビヤーネ・トムセン(チューリッヒ大学), 澤田和人(国立歴史民俗博物館)ほか13名が報告。19世紀から20世紀初頭にかけての染織品コレクションにおけるベルツ・コレクションの意義や, 今後の染織品コレクションの活用のありかたと研究者のネットワーク構築等をめぐって, 活発な意見が交わされた。

4. 今年度の研究成果

【学会・シンポジウム・予稿集】

- ① 第36回人文機構シンポジウム「海外で《日本》を展示すること—KIZUNA展からその意義を探る—」

日時: 2019年10月5日 13:30~16:40
 会場: 東京大学本郷地区キャンパス法文2号館2階一番大教室
 主催: 人間文化研究機構, 後援: 文部科学省・外務省・ウェールズ国立博物館・英国ウェールズ政府・ブリティッシュカウンシル・国際交流基金
 報告者: 日高薫(国立歴史民俗博物館), デビッド・アンダーソン(ウェールズ国立博物館館長), 三木美裕(国立歴史民俗博物館客員教授), 荒川正明(学習院大学教授)
 本シンポジウムは, 国際連携展示という手段による在外日本資料の活用を目指して2018年夏にウェールズ国立博物館において開催した「KIZUNA」展を振り返り, その意義や開催経緯を報告しあうと同時に, 海外において日本関係の展示をおこなうことの困難や課題等について議論することを目的として開催した。アンダーソン氏の特別講演その他の報告をうけて, 会場では活発な質疑や議論が交わされた。本来は, ミュンヘンで開催される国際研究集会と対となる位置づけとして, 国内の研究者を集めて開催する予定であったが, 人文機構シンポジウムの枠内に組み込まれ, 短時間の一般市民を対象とする内容に変更されたため, 十分な議論を尽くすことができなかつたのは残念である。
- ② ミュンヘンにおける国際研究集会(延期)

International Conference: Exhibiting "Japan" Overseas
 (邦題: 国際研究集会「海外で《日本》を展示すること」)
 日時: 2020年3月13日 10:00~16:30(延期)
 会場: Museum Fünf Kontinente(ミュンヘン五大陸博物館)
 主催: 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館, ミュンヘン五大陸博物館
 報告者: 日高薫(国立歴史民俗博物館), ブルーノ・リヒツフェルト(ミュンヘン五大陸博物館), 福岡万里子(国立歴史民俗博物館), ベッティーナ・ツォルン(ウィーン世界博物館), 三木美裕(国立歴史民俗博物館客員教授), ハンス・ビヤーネ・トムセン(チューリッヒ大学)
 本国際研究集会は, 上記①の国内で開催した国際シンポジウムと対をなすものとして計画された。主要参加者は, あらかじめミュンヘンおよびウィーンで開催中のシーボルト父子関連の国際連携企画展示を見学していることを前提とし, 日本・英国ウェールズ・ドイツ・オーストリアにおける国際連携展示を検証し, このような取り組みの意義と課題を議論することを趣旨とする。
 新型コロナウイルス感染拡大により延期を余儀なくされたが, 新たな開催日程は未定である
- ③ ウィーンにおける国際シンポジウム(延期)

International Symposium: More Insights into the Heinrich von Siebold Collection
 (邦題: 国際シンポジウム「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション—さらなる洞察」)
 日時: 2020年3月9日・10日(延期)
 会場: Weltmuseum Wien Forum(ウィーン世界博物館・フォーラム)
 主催: 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館, ウィーン世界博物館
 報告者: 堅田智子(流通科学大学), 脇田美央(ウィーン応用美術博物館), 日高薫(国立歴史民俗博物館), イルゼ・ハイドル, ヨハネス・ヴィーニンガー, ベッティーナ・ツォルン(ウィーン世界博物館), 佐々木守俊(岡山大学), 澤田和人(国立歴史民俗博物館), 山崎孝治(北海道大学 アイヌ・先住民研究セン

ター), シビル・ギルモンド (ヴェルツブルク大学)

本国際シンポジウムは、ウィーン世界博物館で開催中のハインリッヒ・フォン・シーボルトに関する国際連携企画展示に関連して立案された。ウィーンにのこるハインリッヒのコレクションと、その他ヨーロッパ各地に散在するシーボルト・コレクションに関する最新の研究成果を広く共有し、展示への理解を深めることを目的とするもので、研究者のみならず、学生や一般市民も対象とした。

予稿集を刊行したが、新型コロナウイルス感染拡大により延期を余儀なくされ、新たな開催日程は未定である。

【学術論文・口頭発表・その他刊行物等】

- ① 堅田智子「大英博物館所蔵のH. v. シーボルト蒐集日本考古資料について」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』第3号, 107-124頁, 2020年, 近代博物館形成史研究会
- ② (口頭発表) 堅田智子「和独会における日独法学者の交流 —穂積陳重『祖先祭祀と日本法律』の出版をめぐる—」, 上智大学史学会5月例会, 2019年5月, 上智大学
- ③ (口頭発表) デイビッド・アンダーソン「交流史を見つめ直す: ウェールズにおける特別展覧会「KIZUNA」の開催」, 第36回人文機構シンポジウム「海外で《日本》を展示すること—KIZUNA展からその意義を探る—」, 2019年10月5日, 東京大学)
- ④ (口頭発表) 三木美裕「ウェールズ国立博物館, KIZUNA展開催までの道のり」, 第36回人文機構シンポジウム「海外で《日本》を展示すること—KIZUNA展からその意義を探る—」, 2019年10月5日, 東京大学)
- ⑤ (口頭発表) 荒川正明「日本のやきものを飾る —海外美術館における展示事情」, 第36回 人文機構シンポジウム「海外で《日本》を展示すること—KIZUNA展からその意義を探る—」, 2019年10月5日, 東京大学)
- ⑥ (口頭発表) 福岡万里子「初代米国駐日総領事ハリスのアジア諸港における外国人居留地人脈—珠江デルタ地帯・寧波・上海を中心に—」, 東洋史研究会大会, 2019年11月4日, 京都大学
- ⑦ (講演) 三木美裕「Research and actual use of overseas Japanese artefacts and documents」, Daiwa Foundation Seminar 「Can Museums Promote Regional Revitalisation?」, 2019年11月8日, Cornwall Terrace, Outer Cicle, London
- ⑧ (口頭発表) ハンス・トムセン「Fragments of Japan : Western Practices of Collecting Textile Samples」, 国際シンポジウム「Historische Gewebe in einer digitalen Welt」, 2019年11月14日, ロイトリンゲン大学
- ⑨ (口頭発表) 澤田和人「The Baelz Collection of Japan Textiles at Reutlingen University - Outline, Special Features, and Significance」, 国際シンポジウム「Historische Gewebe in einer digitalen Welt」, 2019年11月14日, ロイトリンゲン大学
- ⑩ (口頭発表) 福岡万里子「米使ハリスの1856年対シャム条約交渉—日本開国史との相違と接点を探る」, 歴博基盤研究「近世近代転換期東アジア国際関係史の再検討—日本・中国・シャムの相互比較から」成果論集準備研究会, 2019年12月15日, 大阪大学中之島センター
- ⑪ (講演) 堅田智子「シーボルト父子のみた日本」, 流通科学大学生涯学習の会講演会, 2019年12月21日, 流通科学大学
- ⑫ (講演) 久留島浩「江戸時代から開国へ—「行列」から見た幕末維新期—」, ブダペスト日本文化センター講義・演習企画「Az Edo-kor nyomában (江戸時代探求)」, 2020年2月13日, アラニティーズ文化センター, ブダペスト (ハンガリー)
- ⑬ (講演) 日高薫「特産品としての漆器の輸出」, ブダペスト日本文化センター講義・演習企画「Az Edo-kor nyomában (江戸時代探求)」, 2020年2月13日, アラニティーズ文化センター, ブダペスト (ハンガリー)
- ⑭ (口頭発表) 堅田智子「ハインリッヒ・フォン・シーボルトとヨーロッパ王族」, シンポジウム「幕末維新期の好古家ネットワーク」, 2020年3月, 國學院大學
- ⑮ 久留島浩「歴史から何が学べるか?」『地球システム・倫理学会会報』第14号, 2019年10月, 地球システム・倫理学会
- ⑯ 日高薫「明治の調べ: ウィーン世界博物館所蔵ハインリッヒ・コレクションの楽器から」『ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用 ニューズレター』vol.4, 2020年3月, 国立歴史民俗博物館
- ⑰ 堅田智子「翻訳 男爵アレクサンダー・フォン・シーボルト「公爵伊藤博文に関する個人的回想」」『鳴滝

紀要』第30号, 2020年3月, 長崎シーボルト記念館

- ⑧ 堅田智子「インタビュー『小シーボルト蝦夷見聞記』, シーボルト父子とアイヌ, ウィーン世界博での特別展」, 読賣新聞夕刊「史書を訪ねて」, 2020年3月, 読売新聞社

【展示】

- ① 国際連携企画展示「Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten」
 (邦題:「日本を集める—シーボルトが紹介した遠い東の国」)
 会場: ミュンヘン五大陸博物館
 会期: 2019年10月11日~2020年4月26日予定, 3月14日から臨時休館, 5月12日に再開し9月13日まで延長
 主催: ミュンヘン五大陸博物館, 国立歴史民俗博物館
 プログラム・パートナー: ミュンヘン・フォルクスホッフシユエ, ミュンヘン独日協会
 メディア・パートナー: 歴史雑誌「ゲシヒテ」
 協力: バイエレン州科学芸術省, 五大陸博物館友の会
 ドイツ有数の全国紙, Süddeutsche Zeitung紙(南ドイツ新聞, 2019年11月20日)で大きくとり上げられるなど, 好評を博した。刊行物は以下の通り。
 ・展示ハンドブック『Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten』(ブルーノ・リヒツフェルト編著, Museum Fünf Kontinente発行, 独語版および英語版)
 ・子ども向けブックレット『Mit Konti und Sakura in Japan』(Museum Fünf Kontinente発行)
 ・展示ハンドブック日本語版『日本を集める—シーボルトが紹介した遠い東の国』(青柳正俊訳, 国立歴史民俗博物館発行)
- ② 日墺友好150周年企画Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold展
 (邦題:「明治の日本—ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から」)
 会場: ウィーン世界博物館
 会期: 2020年2月20日~5月12日予定, 3月11日より臨時休館, 7月2日に再開し8月11日まで延長
 主催: ウィーン世界博物館, 国立歴史民俗博物館, 人間文化研究機構機関研究プロジェクト, 公立はこだて未来大学
 協力: 世界博物館友の会
 Kronen Zeitung紙(クローネン・ツァイトゥンク, 2020年2月14日), Der Standard紙(スタンダード, 2020年2月26日, 3月2日)紙, Kurier紙(クーリール, 2020年2月13日), Kleine Zeitung紙(クライネ・ツァイトゥンク, 2020年3月4日), ORF 2(オーストリア放送協会, 2020年2月11日), Rádio DEVÍN(スロヴァキアラジオ局, 2020年5月12日)など現地主要メディアにおいて大きくとりあげられ, 高く評価された。
 るなど, 好評を博した。刊行物は以下の通り。
 ・展示ハンドブック(無料配布)『Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold』(Kunsthistorisches Museum発行, 国立歴史民俗博物館協力, ドイツ語版および英語版)

【メディア取り上げ, その他】

- ① 「グローバル化する日本研究(上) 知られざる交流史を発掘」『日本経済新聞』, 2020年1月6日
 ウェールズ国立博物館における日本展示開催など, イギリス・チームによる活動が取り上げられた。
- ② 「グローバル化する日本研究(下) 海外調査, 展示も現地で」『日本経済新聞』, 2020年1月7日
 プロジェクトの意義や活動状況が取り上げられた。
- ③ ロイトリンゲン大学におけるベルツ・コレクション染織資料調査の記事が, Reutlinger General-Anzeiger紙にとりあげられた(2019年4月30日)
- ④ ウィーン世界博物館におけるアイヌ関係資料の調査がNHK札幌のニュース番組で取り上げられた(「アイヌの工芸品 研究を続けて」, 2020年3月16日)。
- ⑤ 『ヨーロッパ在外プロジェクトNEWSLETTER』vol.4を発行した(2020年3月)。

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)
 (館外)

大場 秀章 東京大学・名誉教授
 小林 淳一 東京都江戸東京博物館・副館長
 齋藤 玲子 国立民族学博物館・助教
 佐々木史郎 国立のアイヌ文化博物館（仮称）設立準備室・主幹
 笹原 亮二 国立民族学博物館・教授
 原田 泰 公立はこだて未来大学・教授
 保谷 徹 東京大学史料編纂所・教授
 松井 洋子 東京大学史料編纂所・教授
 宮坂 正英 長崎純心大学・教授
 宮崎 克則 西南学院大学・教授
 山田 仁史 東北大学・准教授
 ベッティーナ・ツォルン ウィーン世界博物館・学芸員
 ヨハネス・ヴィーニンガー
 レイチェル・パークレイ グラム大学東洋博物館・学芸員
 ジェニファー・メルベル スコットランド・ナショナルトラスト財団・学芸部長
 アンドリュウ・レントン ウェールズ国立博物館・学芸員
 ハンス・トムセン チューリッヒ大学・東洋美術史学科・教授
 アレクシス・シュヴァルツェンバッハ ルツェルン応用科学芸術大学
 クリスチャン・リュメリン ジュネーヴ市立版画キャビネット・学芸員
 ウド・バイライス シーボルト協会・会長
 ヴィルヘルム・グラーフ・アーデルマン ブランデンシュタイン城シーボルトアーカイブ・司書

(館内)

青柳 正俊 本館研究部・プロジェクト研究員
 ○大久保純一 本館研究部・教授
 工藤雄一郎 本館研究部・准教授
 櫻庭 美咲 本館研究部・機関研究員
 澤田 和人 本館研究部・准教授
 齋藤 努 本館研究部・教授
 島津 美子 本館研究部・助教
 鈴木 卓治 本館研究部・准教授
 ◎日高 薫 本館研究部・教授
 福岡万里子 本館研究部・准教授
 松田 陸彦 本館研究部・准教授
 三木 美裕 本館研究部・客員教授
 横山百合子 本館研究部・教授

(5) 北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築— 2016～2021年度 (歴博ブランチ代表者 原山浩介)

1. 目的

本研究では、主として北米に移住した日本人に注目し、言語史・社会史・生活史を基点としながら、新たな資料論の創出を含む資料調査、並びに研究を行う。

北米日系社会の移民資料を整備し活用する必要性は、現地の関連機関においても認識されている。しかしその整備の中心は、マスターナラティブとの関わりにおいて有用とされるものが多く、しかも画像資料や英語資料に傾斜しがちである。

この状況に対し、本研究では、①日系人に関わる音声・映像資料について、データ救出と資料の評価を行う。これら資料は、劣化や廃棄リスクが高まっており、ことに使用言語が日本語の場合は現地での評価が困難であるため、対応の緊急性が高い。これに対し、データ救出・媒体変換と内容分析を、音響学、図書館学の研究者とも連携しな

がら行う。

さらに、②日系社会の歴史のうち、これまでの十分に光が当たってこなかった領域の析出と、これに関わる資料調査・集積を行う。これは、①のインタビューやオーラルヒストリーの内容分析と連動しており、そこでの応答とマスターナラティブの間の緊張関係を踏まえながら、資料調査として補われるべき領域を析出するとともに、移民をめぐる新たな資料論へとつなげる。

なお、データベースを構築し、研究者コミュニティ、現地の日系社会等に提供する。同時に国際シンポジウムや講座、国立歴史民俗博物館等における展示を実施する。これらの活動を通して、日本研究および日本文化理解の促進を図る。

2. 今年度の研究計画

今年度は、これまでのシンポジウムの報告書の作成を行いながら、本プロジェクトの活動の分節化/接合を、相互の統合的な枠組みを同時に意識しながら進める。その際、具体的な活動内容を、大きく次の3つのテーマ設定に再配置することとする。すなわち、(1)日本人移民に関わる音声資料をめぐる言語学的・歴史的調査・研究、(2)日本人移民に関わる文書・写真等の諸資料に関わる調査・研究、(3)アメリカにおける日本研究に関わる調査・分析、の3つである。これら3つのテーマの調査・研究・分析を深化させると同時に、それぞれのテーマが統合された形で取り組まれていることのメリットを活かすことを念頭に置きながら、活動を進める。

(1)日本人移民に関わる音声資料をめぐる言語学的・歴史的調査・研究においては、日系人のオーラルヒストリーが収録された音声・映像資料ならびに関連資料をもとに、言語学・歴史学的・文化人類学的・社会学的な分析を実施する。またこの過程で、大学における教育プログラムにおける、音声・映像資料の活用方法を検討・構築する。

具体的には、バーバラ=カワカミが収集した、ハワイ移民一世(写真花嫁)のオーラルヒストリー音声の分析を継続的に進める。この他には、国立国会図書館憲政資料室所蔵の日系移民録音・音声資料やハワイ大学ウエストオアフ校の録画資料へのメタデータの付与を進める。これらの成果を踏まえ、コレクションの教育への活用の方針を策定する。

(2)日本人移民に関わる文書・写真等の諸資料に関わる調査・研究においては、言語学ならびに歴史学的な立場からの資料の発掘・整理・救出を同時に行う。このなかで発掘された言語学的・歴史学的資料の分析・整理を既に分析・整理に着手している資料も含め、継続的に行う。また、日布時事旧蔵の写真資料については、昨年度までと同様に、スタンフォード大学との協力関係の下で、資料の整理とデータベース化を進める。

(3)アメリカにおける日本研究に関わる調査・分析のテーマは、人文学史と連動する理論的課題と、移民資料とは異なる在外資料であるミシガン大学岡山分室に関わる資料的な課題の二つが関わっている。今年度においては、ミシガン大学図書館における文献調査、調査に関わった研究者の関係者への聞き取り調査を実施するのと同時に研究会を開催する。

今年度は10月29日から12月26日まで国立歴史民俗博物館で企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」を開催する。開催期間中、ギャラリートークや国際研究集会などを実施する。また企画展示の終了後は、巡回展示に着手する。展示を通じた研究成果の公開と、統合的な研究活動および成果の提示を検討する。

この他には、整備の澄んだ資料目録を関連機関から発信してもらうのと同時に、2018年2月に公開した「北米における日本関連在外資料目録」の拡充を図る。また本プロジェクトで収集した資料を活用した研究会を国立国語研究所等で開催するとともに、国際会議(International Conference of Pragmatics等)で研究発表を行う。資料の調査・収蔵・活用をめぐることは、これまで国立国会図書館など国内機関と行ってきた「移民資料コンソーシアム」における議論を継続する。現地機関との関係構築(覚書、協定締結など)を行い、教育プログラムを国内の大学で実施するとともに、その拡充の可能性を探る。

3. 今年度の研究経過

(1)国立歴史民俗博物館での企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」を10月29日から12月26日にかけて開催した。展示期間中に(1)ギャラリートークを7回開催し、来館者(計223人)に対して企画展示に関する説明を行った。(2)UCC上島珈琲株式会社との協力の元で、「ハワイコーヒーセミナー」を11月3日に行い(参加者48人)、ハワイ州観光局による「ハワイ歴史セミナー」の開催(参加者74人)(3)歴博講演会(第420回「ハワイから見直す近現代：移民・戦争・民主主義」)を11月9日を開催した。このほかには、(4)12月21日に国際研究集会「ハワイ移民の「もう一つの歴史」を考える」を開催し、ハワイ大学のデニス=オガワ氏、スタンフォード大学フーヴァー研究所の上田薫氏、元大阪商業大学の飯田耕二郎氏による講演を通じて、参加者とともに

に本展示の持つ学術的な意義について検討を行った。本企画展示には約15,000人の来館者があった。

(展示のURL: <https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/project/old/191029/index.html>)

また、この企画展示に際しては、展示図録(220頁)を作成して頒布した。この展示図録は企画展示の内容と連動したものであり、移民史研究、近代史研究、国際交流史研究、言語学などの諸分野を横断・融合しつつ、同時にハワイにおけるパブリック・ヒストリーの蓄積をも反映させた。展示・図録の双方に渡り、日本からハワイへの移民史について、セトラコロニアリズム、差別、戦争、労働といった、今日の社会が直面する諸課題との連関のなかで捉えられるように構成しており、そのなかに在外資料を配置することで、研究の成果と課題の提示としての意味も持たせた。

さらに、この企画展示では、本プロジェクトで推進している『日布時事』写真アーカイブの構築作業の成果を反映させた。この事業はHawaii Times Photo Archives Foundation、スタンフォード大学フーバー研究所と共同で進めており、来館者向けには、スタンフォード大学の支出によるパンフレットを作成・配付した。この写真群は移民出身地域の関係者にも注目されており、次年度には山口県でのパネル展示の開催を実施し、データベース構築の社会還元を実施する予定である。

これとは別にハワイ生まれの二世である比嘉太郎に関する展示(「比嘉太郎ふるさと展:ハワイ二世のチムグクル」)を沖縄県北中城村との連携で開催した。この展示は北中城村あやかりの杜図書館、北中城小学校、国立国語研究所、沖縄県公文書館、沖縄県立図書館で2019年6月、10月、11月に開催した。またこの展示に関するシンポジウムを沖縄県北中城村との連携で10月6日に北中城村立中央公民館で開催し、約250人に参加者を得た。これらの展示を通してハワイ移民に関する研究成果の普及を行った。またシンポジウムについては沖縄タイムス、琉球新報などで取り上げられた。

(2) これまで収集したハワイならびに北米の日系社会資料(写真・音声資料・映像資料)の整備を行った。スタンフォード大学フーバー研究所との連携で整備を進めている「日布時事」写真データベースの整備を進めたのと同様に、国立国会図書館憲政資料室所蔵の音声資料の整備を進め、同図書館のウェブサイトであるリサーチナビより配信した。

(URL: <https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/ve701-88.php>)

整備の進んだ写真資料については、資料の可視化をデジタル人文学的見地から行うための作業を本格化させ、その成果を人文機構シンポジウム(コンピュータがひもとく歴史の世界:デジタルヒューマニティーズってなに?, 2020年1月25日 於:日比谷文化図書館)で講演した

(URL: <https://www.nihu.jp/ja/event/symposium/38>)。

また、この作業はオーストリア科学アカデミー、デジタル人文学センター(ACDH)との連携で行っているが、学术交流協定を国立国語研究所と同センターとの間で2020年3月に在オーストリア日本大使館の職員を招いて締結した。

(3) 日本人移民に関わる音声・文書・写真等の諸資料に関わる調査を、国立歴史民俗博物館における企画展示で用いた資料の収集調査を行うのと同時に、ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館、ライマン博物館、日本ハワイ移民資料館で開催した。なお、アメリカ公文書館における調査(2020年3月下旬予定)が新型コロナウイルス感染症の関係で中止となった。

(4) 教育プログラムについては、龍谷大学農学部において今年度も継続的に実施したほか、韓国啓明大学校でNINJALチュートリアル「言語資源から導く日本語のすがた」を開催し、日本語学専攻の学生たちにプロジェクトで収集した資料(第二次大戦中にアメリカで作成された日本語教科書)を紹介する講義を行い、大学生への普及を図った。

(5) 「在外資料論」をめぐることは、2016年度より移民資料コンソーシアムをこれまでと同様に継続的に開催させた(2回開催、5月・12月)。また、在外資料論構築を目指したシンポジウムを開催することを決め、登壇者への打診、開催時期等について検討した。

4. 今年度の研究成果

※展示を除き、歴博ブランチャのみ掲載

【刊行物】

国立歴史民俗博物館編『展示図録 企画展示 ハワイ 日本人移民の150年と憧れの島のなりたち』, 2019年10月
原山浩介「ハワイ:日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」(『総合誌「歴博」第216号, 国立歴史民俗博物館, 2019年9月, pp.18-19)

原山浩介「アーカイブズを訪ねる ハワイ州立公文書館から考える(歴史家とアーキビストの対話(第6回))」(『歴

史学研究』987号, 歴史学研究会, 2019年9月, pp.45-49)

原山浩介「『布哇新聞』第76号」(資料解説)(『日本歴史』857号, 吉川弘文館, 2019年10月, 口絵)

原山浩介「太平洋戦争後のハワイにおける民主化過程」(『歴史研究の最前線』Vol.22, 総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館, 2020年3月, pp.32-48)

【口頭発表】

原山浩介「体験のなかの「トランスナショナル」」日本移民学会, 天理大学, 2019年6月

原山浩介「コメント: 移民研究の立場から」日本村落研究学会, 茂庭荘, 2019年11月

【講演会等】

原山浩介「ハワイから見直す近現代: 移民・戦争・民主主義」歴博講演会, 国立歴史民俗博物館, 2019年11月

原山浩介「太平洋戦争後のハワイにおける民主化過程」日本歴史研究専攻大学院公開講演会, 国立歴史民俗博物館, 2019年6月

【国際研究集会】

国立歴史民俗博物館国際研究集会「ハワイ移民「もう一つの歴史」を考える」国立歴史民俗博物館, 2019年12月

【セミナー等】

原山浩介「日本人移民とハワイ」ハワイ州観光局 ハワイアン航空共催FAM 出発日研修, ホテルマイステイズ プレミア成田, 2020年2月

原山浩介「移民博物館をつくる」JICA日系社会研修「博物館における資料と展示技術の有効活用およびネットワーク強化コース」, 国立歴史民俗博物館, 2019年11月

原山浩介「ハワイ移民史をたどり直す」ハワイ州観光局 ハワイ歴史セミナー, 国立歴史民俗博物館, 2019年11月

【展示(国語研担当分を含む)】

「ハワイ: 日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」2019年10月~12月, 国立歴史民俗博物館, 14,616人

「比嘉太郎ふるさと展」2019年6月, 沖縄県北中城村あやかりの杜

「比嘉太郎ふるさと展」2019年10月~11月, 沖縄県立図書館

【データベース】

「日布時事フォト・アーカイブス」(スタンフォード大学フーヴァー研究所と共同)

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

樋浦 郷子 本館研究部・准教授

○松田 陸彦 本館研究部・准教授

吉井 文美 本館研究部・准教授

◎原山 浩介 本館研究部・准教授

(国立国語研究所のランチと連動)

【基幹研究】

(6) 学知と教育から見直す近代日本の歴史像 2018~2020年度 (研究代表者 樋口雄彦)

1. 目的

本研究は、幕末から明治期までを対象に、近代「日本」や国民としての「日本人」が生成される過程を、学知・教育・宗教・文化といった諸側面から総合的に見直すことによって、従来の個別分野毎による位置づけを超え、多様かつ多層なひとびとの生きる姿を描き出すことを目指す。

近世から近代に移行する時期においては、留学・移住など人々の動きのスケールがそれまでに比べ大きく変化し

た。加えて、西洋文化、宗教、「近代的」という概念に包含される学問や医療・衛生などの新しい考え方が日本に入り、人々の日常に大きな変容を迫った。そればかりでなく、「西洋」におけるジャポニズムの勃興や近隣国から日本への使節派遣など、日本と外国を往還する人・モノも飛躍的に増加した。

これらにおいてとくに着目すべきは、歴史事象も人々の日常も同様に、多数派から少数派へ、強者から弱者へと一方向的に流れるものではなく、あくまで双方向性、相互性の中で生成されるものであるという視角である。ときには緊張感に満ちた中での相互の渡り合いのなかで変容のプロセスが進行していった(あるいは進行できなかった)側面を描出し、その具体的な事象から全体像を展望することが必要である。

このような課題の考察は、「幕末から明治」、「近世から近代」のようにこれまで自明と思われる傾向にあった歴史区分や「日本史」像を再検討することにもつながるものといえる。さらに、当該時期のアジアを見渡せば、近世教育機関から近代学校への移行は、儒教の否定、科擧の廃止、手習塾(朝鮮の書堂、台湾の書房)の衰退などさまざまに通底する問題をはらんだものであったことがいっそう浮き彫りになるものと予想される。このように学際的、国際的に広範囲な目配りをした上で研究を実施し、国立歴史民俗博物館が創設以来の理念としてきた生活史の視点を重視して、研究成果として展示の高度化に資するものとする。

本研究は、1800年代半ばから1910年代までを対象に、「情報の伝播と具体的な人々のありかた」(積極的な受容や、消極的な受け止め、あるいは恐怖や拒絶、さらには他者への媒介など)に、以下2つの方法で接近する。第一に、館蔵資料を中心とする既存の文書群を、協働的に読み直し、新たな体系のもとで上記の具体相を示すことである。第二に、フィールドワークをしながら新たな資料を発掘し、これまでは少数であることなどを背景に「日本史」研究としての蓄積が多くはなかった事象(例えば樺太や千島のアイヌにとっての「日本」像や、学校教育や近代医療を受けられないひとびとにとっての「近代」、東北地方にとってのキリスト教(ロシア正教)信仰など)の掘り起こしと共有化を進めることを通じて、「外」から「宗教」や「学校教育」、「衛生」などの概念をもって迫られた信仰や学びのありかた、病や習俗祭祀の変容を浮彫りにすることである。こうした目的を達成すべく、AとB、2つの研究班を設け、両者を有機的に連携させながら共同研究をおこなう。A班は主に幕末から明治期を担当し、上記第一のアプローチから共同研究を実施する。具体的には、これまで歴博が収集してきた木戸孝允関係資料・平田篤胤関係資料・大久保利通関係資料・砲術関係資料・自由民権関係資料や館外の諸資料を、新たな見方で複眼的に読み直す作業が中心となる。上記第二の方法を主に担当するB班は、明治の「国民形成」期から大正期に及ぶ「帝国主義」時代までを展望し、フィールドワーク/新資料発掘とその共有化の作業を中心とする。

2. 今年度の研究計画

A班では、幕末・明治における西洋起源の新しい学問・技術を主たる対象に、歴博所蔵の大久保利通関係資料・砲術関係資料・自由民権関係資料を見直すことなどによって、幕府や明治政府の勸業政策・官僚養成・法制整備・軍制改革等に与えた西洋の人文科学や科学技術の影響について検討を加える。B班では、前年度に引き続き教育・教化及び宗教の近代化に関わる資料から、関東・中部などに焦点を移して検討する。

前年度と同様に、研究班ごとに引き続き調査・研究を継続する一方、研究成果の公表として、年度末をめぐりに国際研究集会を開催する。同時に研究会の総括と活動報告を兼ねた総合研究会を実施する。

3. 今年度の研究経過

第1回研究会 2019年4月9日(国立台湾歴史博物館)

「柯家」寄贈の学校関係文書群の実見、企画展「上学去(TIME FOR SCHOOL/学校へ行こう)」の観覧、および本共同研究および歴博展示の方向性について、参加者による意見交換。参加人数6名(他に共同研究関係者以外の参加者8名)

第2回研究会 2019年6月30日(国立歴史民俗博物館)

2021年度開催予定の企画展示「〈教え〉と〈学び〉の日本近代史(仮称)」の展示プロジェクト委員会も兼ね、共同研究の成果をどのように可視化するかについて検討。展示において各人が担当するコーナーの構成を考えると、使用する資料のリストアップ、解説文やキャプションの執筆など、これから必要となる具体的な作業に関しても質疑を行った。参加人数4名

第3回研究会 2019年7月8日(国立歴史民俗博物館)

第2回研究会と同様の内容。参加人数9名

第4回研究会 2019年8月27日～28日(松本市・国宝旧開智学校/諏訪市・諏訪教育会館)

27日は松本市の旧開智学校の収蔵資料を調査し、教科書・教材・生徒作品・公文書などの近世・明治初期以来の豊富な教育史資料を実見した。28日は諏訪市の諏訪教育会館において、諏訪教育会が所蔵する諏訪郡史編纂資料

や高島藩士の旧蔵文書などの調査を実施した。参加人数7名

第5回研究会 2020年2月3日（国立歴史民俗博物館）

2021年度開催予定の企画展示「〈教え〉と〈学び〉の日本近代史（仮称）」の展示プロジェクト委員会も兼ね、研究・展示に関する現状と見通しについて発表し、意見交換を行った。途中、第1調査室にてアイヌ文献集（越崎宗一製本旧蔵）を閲覧。研究・調査の領域と班分けを以下の通りに定めた。1 幕末外交（保谷・木村・福岡）、2 明治の旧幕臣（樋口）、3 アイヌ（谷本・小川）、4 博覧会（塩原・落合）、5 医療衛生（石居）、6 学校教育（高木・北原・樋浦）。参加人数8名

※下記の日程・内容で予定していた第6回研究会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で次年度に延期

2020年3月21日（東京大学駒場キャンパス）

歴博国際シンポジウム「近現代東アジアの文化基盤」朝鮮史研究会・東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構韓国学研究中心との共催。趣旨説明樋浦郷子、発表1 丁世紘（国立慶尚大学慶南文化研究院）「日本植民地期における韓国の漢文教育の変化」、コメント禹龍濟（国立ソウル大学）、発表2 呉成哲（国立ソウル教育大学校）「近代以後韓国書堂教育の社会的意味」、コメント八嶽友広（東北大学）、発表3 陳培豊（国立中央研究院台湾史研究所）「『同文異夢』の台湾、中国、日本—台湾における漢字漢文の戦前戦後」、コメント三ツ井崇（東京大学）、ファシリテーター木村直也（立教大学）

個別調査

石居・塩原・樋浦 資料調査・打ち合わせ（東京大学健康と医学の博物館） 2019年6月23日

谷本 館蔵資料の調査（歴博） 2019年7月9日～10日

樋口 館蔵資料の調査（歴博） 2019年7月10日、22日～23日、8月1日、9月4日～5日、12日、2020年1月15日

落合 館蔵資料の調査（歴博） 2019年8月14日～16日

木村・保谷・福岡 資料調査・打ち合わせ（東京大学史料編纂所） 2020年2月2日

樋浦 資料調査（沖縄県立博物館、石垣市立八重山博物館、石垣市立図書館） 2020年3月23～27日

4. 今年度の研究成果

第1回研究会（2019年4月9日 国立台湾歴史博物館）では、午前中、台南地域の元校長の家族である「柯家」から最近寄贈された学校関係文書群について、解説を受けながら実見。柯家は清朝時代の書房より教育者を輩出し、教案類や試験答案など教育関係の史料を多数伝えており、手稿類は台湾における「戦後」がどのように受け止められていたのかをうかがわせる貴重な手がかりとなる。午後は企画展「上学去（TIME FOR SCHOOL／学校へ行こう）」を展示担当責任者張瀛之氏（展示組リーダー）の案内で見学。横断歩道を渡り校門をくぐるまでをモチーフにした展示室入り口、実際に使用されていた制服や学生証など、興味をひきつける工夫がこらされていた。以上をふまえ、本共同研究および歴博展示の方向性について、参加者による意見交換を行った。包括協定を結んでいる台湾歴史博物館との交流を、本共同研究と研究目的を共有できる企画展を通じて実施できた。

第4回研究会（2019年8月27日～28日 松本市・国宝旧開智学校／諏訪市・諏訪教育会館）では、国宝となった旧開智学校校舎とともに、「重要文化財級開智学校資料」を実見し、明治期から大正期の唱歌や歴史、修身の指導案だけでなく、児童の答案の保存状態の良さを確認できた。また、学校日誌には、関東大震災が地方にどのように伝播し、対応を迫られたのかという点が克明に記録されていることが判明した。これは、すでに一部翻刻が刊行されているものの、肉筆のままどこかの機会をみつけて公開すべき貴重資料という意見で一致した。諏訪教育会館では、高島藩士小沢家文書・高島藩家老千野家文書など、諏訪教育会が郡史編纂のため収集・保管している原文書類を手に取り、幕末から明治初期にかけての藩校関連の史料を中心に閲覧し、国学の影響が少なくなかった同藩の教育事情を確認することができた。

2021年度開催予定の企画展示「〈教え〉と〈学び〉の日本近代史（仮称）」の展示プロジェクト委員会も兼ねた、第2回、第3回、第5回研究会では、本共同研究を展示につなげるべく、展示全体の趣旨や各人が担当するテーマと内容について検討を行い、展示候補となる資料レベルにまで具体化をはかるべく展望した。

個別の調査では、歴博の館蔵資料、特に産業史・産業教育史・博覧会関係、アイヌ・北海道関係、旧幕臣関係については集中して対象資料の洗い出しを行った。それにより、研究・展示に活用できるものを見極めるとともに、その中から展示を想定できるものを峻別し、リスト化することができた。

研究および企画展示のための資料収集としては、幕臣により幕末に刊行されたアイヌ語辞書、明治初期の神道国教化に関わる資料、お雇い外国人関係資料、明治期の癩病治療関係資料、明治前期東京の書画人名録、青年団関係資料、植民地教育関係資料などを入手することができた。

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

- 石居 人也 一橋大学大学院社会学研究科・教授
 小川 正人 北海道博物館・学芸副館長
 落合 功 青山学院大学経済学部・教授
 木村 直也 立教大学・特任教授
 北原かな子 青森中央学院大学・教授
 塩原 佳典 畿央大学教育学部・准教授
 高木 博志 京都大学人文科学研究所・教授
 谷本 晃久 北海道大学大学院文学研究科・教授
 保谷 徹 東京大学史料編纂所・教授
 福岡万里子 本館研究部・准教授
 ○樋浦 郷子 本館研究部・准教授
 ◎樋口 雄彦 本館研究部・教授

【基幹研究】

(7) 近代日本における産業・労働の展開とジェンダー
 2019～2021年度
 (研究代表者 横山百合子)

1. 目的

近代日本は、明治維新以降、新たに成立した国家体制と国際環境のもとで急速に近代化を遂げてきた。同時に、明治維新に続く産業革命、20世紀の重工業化にいたる過程は、産業および労働分野でのジェンダーの構築を不可避的に伴うものであった。本研究は、このような産業と労働という経済的側面から近代日本におけるジェンダーの構築と変容の過程を明らかにすることを目的とする。研究にあたっては、近世からの移行、および現代社会への接続を意識し、対象とする時期を19世紀中葉から高度成長期までと比較的長く設定し、産業化にともなう男女の労働の変容をジェンダーの視点から捉え直し、新たな歴史像の構築を目指す。

2. 今年度の研究計画

研究にあたり、①Aチーム「産業とジェンダー」、Bチーム「労働政策とジェンダー」の二つのグループ編成をおこない、Aチームでは、北九州を中心とした炭坑労働の研究状況把握と現地調査、史料収集、Bチームでは、戦前期公務員労働におけるジェンダーの変容、戦後占領期の労働省・GHQ/SCAPの動向を中心に史料収集、分析を開始する。②2020年度企画展示「性差の日本史」における研究成果の反映のため、調査、交渉などをすすめる。

3. 今年度の研究経過

2019年3月4日(月)(於:国立歴史民俗博物館) 準備研究会を開催、第4展示室民俗展示のうち産業分野を中心に見学し今後の研究の方向性について問題意識を共有した。

- ①青木隆浩(歴博)「4室民俗展示における産業分野の展示の特徴」
- ②野依智子(北九州市立福岡女子大) 話題提供:石炭業研究にかかわって
- ③廣川和花・横山百合子「2020年歴博企画展示「ジェンダーからみた日本の歴史(仮)」近代チームの現況」

2019年9月14日第1回研究会(於:国立歴史民俗博物館)を開催した。概要は以下の通り(参加者11名)。

- ①柴崎茂光(歴博)「林業労働における女性の役割―屋久島などを事例に―」
- ②松沢裕作(慶応大)「通信省における女性雇員の判任官任用1906～1918―貯金関係部局を中心に―」

2019年9月5日～11日 長志珠絵、廣川和花、横山百合子の3名で、米国メリーランド大学付属図書館所蔵プランゲ文庫資料調査(戦後占領期のGHQ/SCAPおよび労働省の女性労働政策資料)。アメリカ議会図書館展示「サフラジェット100年」等を調査・見学し、2020年度企画展示近代部分に資する資料を収集した。

12月8日第2回研究会(於:国立歴史民俗博物館)

- ①原山浩介「ハワイ―日本人移民の150年と憧れの島の成り立ち」展をめぐって
- ②青木隆浩氏「第5展示室産業展示の現状報告」

③満菌勇氏「戦後日本の小売業とジェンダー—女性自営業主の位置づけに注目して—」
年度末に計画した第3回研究会はコロナ流行のため延期

4. 今年度の研究成果

Aチーム「産業とジェンダー」については、基礎的資料調査の段階にあるが、鉱山労働について、第4展示室民俗展示の準備に伴って行われた石炭産業における労務政策のジェンダー視点からの見直しが提起され、林業については、労働実態をジェンダーの視点から総合的に把握する方法について考察を深めた。

一方、2019年度には、B「労働とジェンダー」チームの調査により、メリーランド大附属図書館所蔵プランゲ文庫資料の重要性が明らかになった。具体的には、①戦後占領期の労働省婦人少年局長山川菊栄等をはじめとする女性官僚たちが、女性労働者の自立、団結促進を図ったこと、②婦人少年局の女性官僚、府県レベルの女性職員、GHQ/SCAP経済科学局マリア・ミード・スミス・カラスらとの連携と現場の女性労働者の意識の変化、③紙芝居の利用にみる戦中・戦後の連続の重要性、などの論点を見出した。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

谷本 雅之 東京大学大学院・経済学研究科・教授
長志 珠絵 神戸大学大学院国際文化学研究科・教授
松沢 裕作 慶應義塾大学経済学部・准教授
廣川 和花 専修大学文学部・准教授
野依 智子 福岡女子大学国際文理学部・教授
倉敷 伸子 四国学院大学文学部・教授
満菌 勇 北海道大学経済学研究院・准教授
青木 隆浩 本館研究部・准教授
柴崎 茂光 本館研究部・准教授
原山 浩介 本館研究部・准教授
○吉井 文美 本館研究部・准教授
◎横山百合子 本館研究部・教授

【基幹研究】

（8）水をめぐる認知と技術と社会の連環からみた日本列島の歴史過程と文化形成 2019～2021年度 （研究代表者 松木武彦）

1. 目的

水稻農耕が始まった弥生時代以降、日本列島各地の人びとが「水」をどのように認知し、制御し、活用することによって、再生産が可能な社会を織りなしていったのか、その歴史的なプロセスとメカニズムを解明することを目的とする。

「水」を主軸とした日本史の叙述はこれまでも試みられているが、本研究の特色は、水と社会との関係史を、単に技術的・経済的側面の発展プロセスだけではなく、認知・儀礼・世界観という心的・文化的側面の変容プロセスを重視し、前者と後者との相互作用に光を当てて日本の社会と文化の形成過程を叙述するところにある。

このような特色を発揮するために、本研究は、考古学と民俗学を両輪とし、それに歴史学・地理学・分析科学などの分野が加わって、どの分野からも接近可能な「水」を共通の土俵に、各分野対等の学際研究を進める。具体的には、それぞれの時代と地域について、（1）人々は水をどう認知してどういう要請からどのような土木技術を実現し、（2）その土木技術が水をめぐる社会関係をどのように作り上げ、（3）その社会関係がどのような儀礼を媒介にどのような世界観として演出されたか、という3点を明示することを、各分野が共有する分析視角とする。

さらに具体的には、上記（1）〈土木技術〉について、先史・古代の村落と都城における用・排・防水システム（考古学・地理学）、村落・都市の用・排・防水のシステムと運営（民俗学）などを明らかにする。（2）〈水をめぐる社会関係〉については、水利の争奪・掌握と先史～古代の社会統合（考古学・歴史学）、水争い・水利慣行と中～近世の村落組織（民俗学・歴史学）などを検討する。（3）〈水の儀礼と世界観〉については、水に関連する祭祀

遺跡（考古学）、村落における水と祭祀（民俗学）、国家祭祀と水（歴史学）、絵地図の水表現（地理学・分析科学）などを分析する。

まとめとして、各時代・地域で明らかになった、水をめぐる「認知と技術→技術と社会→社会と儀礼・世界観」の関係を敷衍・一般化することによって、日本列島の歴史と文化の特性を抽出する。

2. 今年度の研究計画

国立歴史民俗博物館において、研究年度の初期と後半に1回ずつの研究会を行う。これとは別に秋季と年初にそれぞれ1回ずつの巡検を、大阪と岡山で予定する。大阪は淀川水系の治水や河内平野における弥生時代～近世の開発過程に関わる関連遺跡や出土資料の見学、および調査研究に携わった共同研究者及び地元の研究者の研究発表を実施する。岡山では弥生時代初期の水田形成と、岡山城下町と旭川の治水等々について、関連遺跡や出土資料の見学、および調査研究に携わった共同研究者及び地元の研究者の研究発表を実施する。これらと並行し、共同研究者は必要に応じ調査旅行も交えながら各自資料の充実を行う。

3. 今年度の研究経過

第1回研究会を、2019年7月14日に国立歴史民俗博物館で行い、メンバーの相互紹介、研究方針の確認のあと、3年間の研究計画などを協議した。

第2回研究会は、2019年11月2日・3日に大阪で行った。11月2日に淀川デルタ地帯の地理学的巡検を行い、午後は大阪歴史博物館にて下記の研究報告とそれに関するディスカッションを行った。

南 秀雄（大阪市文化財協会、研究協力者）「難波堀江の学際的再検討」

伊藤廣之（元大阪歴史博物館、研究協力者）「淀川の環境と河川漁撈」

11月3日には、大阪市深江、東大阪市池島遺跡、および八尾市服部川周辺の溜池を巡検し、大阪平野における水田開発。治水および水に関する産業史についての資料を収集した。

なお、第3回研究会を2020年3月14・15日に岡山で、さらに年度末には第4回研究会を国立歴史民俗博物館でそれぞれ行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、2020年3月25日付の当館館長の通達「3月末までに予定されている館主催の講演会、研究会等については原則として中止にします」に従って中止のやむなきに至った。

4. 今年度の研究成果

青山宏夫「筑後川の治水と利水—『筑後川図』と『筑後川改修図』—」『歴博』215号、pp.16-17、2019年7月

青山宏夫「東北地方のカリヤドという地名—中世の道と渡河—」『史林』102巻5号、2019年9月

渡辺浩一「文書実践と神話—松江漁師仲間の文書編集と歴史叙述」『歴史学研究』984、2019年6月、pp.2-12、査読有

渡辺浩一『江戸水没—寛政改革の水害対策』平凡社、p.82、2019年12月

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

井上 智博（公財）大阪府文化財センター

菅 豊 東京大学大学院

坂 靖 奈良県地域振興部

藤井 弘章 近畿大学

別所 秀高（公財）東大阪市文化振興協会

村上 忠喜 京都産業大学

山口 雄治 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

渡 浩一 国文学資料館、3月より

青山 宏夫 本館研究部・教授

島津 美子 本館研究部・准教授

○関沢まゆみ 本館研究部・教授

仁藤 敦史 本館研究部・教授

◎松木 武彦 本館研究部・教授

林部 均 本館研究部・教授

【基盤研究】

(9) 高精度同位体比分析法を用いた古代青銅原料の産地と採鉱に関する研究

2018～2020年度

(研究代表者 齋藤努)

1. 目的

わが国は、古墳時代後期から古代にかけて、海外の関与を受けつつも日本独自の国家体制が成立し、変容していく。その影響は青銅器原料の産地や採鉱技術にも及んでいる。

青銅器原料の産地推定は、これまで主に、表面電離型質量分析装置(TI-MS: MAT262)による鉛の同位体比分析で行われてきた。しかし、同装置は分析精度が比較的低く($^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ で0.2%程度)、銅とスズの同位体比分析ができなかった。歴博は、2015年度に銅・スズ・鉛のいずれも同位体比分析できる、高精度($^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ で<0.02%)の高分解能マルチコレクタICP質量分析装置(MC-ICP-MS: NEPTUNE PLUS)を導入した。また、2016年度から山口大学: 山口学研究センターと包括協定を結んでおり、それに基づき、同県内を主なフィールドとして、科研費による共同研究を開始している。本研究ではこれらをふまえ、以下の3課題、特に「課題2」に重点をおいて取り組んでいく。

課題1) 日本産原料の使用開始時期とその地域の解明

古墳時代後期以降、日本産原料があらわれ、鉛同位体比分析によって、6世紀後半～7世紀初めまで遡る可能性が指摘された。近年の精密分析の成果に基づき、鉛とスズの同位体比から、原料が海外産か日本産かの識別を試みる。また、使用開始の時期と地域は研究分野によって見解が異なり、日本産原料を産出した鉱山がどこだったのかも未解明のままなので、各分野の成果を総合し、その実情を明らかにしていく。

課題2) 古代において青銅器原料を供給した鉱山の特定とその推移の明確化

古代(8～10世紀)の青銅器の鉛同位体比は、山口県産に収斂しており、出土考古遺物や文献史学の研究結果と併せて、特に長登鉱山や蔵目喜鉱山がそれらの産地として有力とみられていたが、数値には広がりがあり、他鉱山の関与も考えられていた。本研究では、山口県とその周辺地域にある古代の遺跡を、考古学と炭素14年代測定を併用して年代を定め、出土青銅関係資料の鉛同位体比を高精度分析する。同様に精密分析した山口県内各鉱山のデータと比較し、時期による青銅器原料の産地の変遷を解明する。

課題3) 古代に採掘された銅の鉱石種別の判定と日本における採鉱状況の究明

銅鉱床内には硫化銅と酸化銅があり、青銅原料は酸化銅鉱から始まって硫化銅鉱へと移っていったと考えられているが、それがどの時期であったのか、まだはっきりとしていない。先行研究によって、硫化銅と酸化銅は銅同位体比に顕著な相違があることがわかっている。本研究では、各時期に作られた青銅器を選択し、鉛と銅の同位体比から、原料鉱石の種別判定を試みる。時期や青銅器の器種によって原料鉱石の種別に相違がある場合は、考古学と文献史学の成果も併せて考察することによって、当時の採鉱の状況を明らかにし、技術史的背景を究明する。

2. 今年度の研究計画

これまでの鉛同位体比研究から、古代の青銅製品には、山口県内から採取された原料が主として使用されていたことがわかっている。古代にさかのぼる複数の鉱山から採掘される鉱石の鉛同位体比は、歴博が2014年以前に所有していた比較的低精度の装置では識別が困難であったが、現有の高精度の分析装置によってみ分けられるようになり、長登鉱山産の原料が主に使われていると推定された。

山口県の周防鑄銭司跡から、羽口・るつぼのほか、長年大宝5点が出土したので、その鉛同位体比を分析し、原料の産地を推定する。経験上、羽口やるつぼの付着熔融物は鉛の濃度が低いので、歴博が従来行ってきた高周波加熱分離法では鉛同位体比分析ができなかった。しかし、抽出クロマトグラフィー用レジンを使用することで、多量の試料を効率よく前処理できるようになったので、これらの資料にも適用することにした。

周防鑄銭司跡からは、承和昌宝の破片も出土したため、X線CT撮影と鉛同位体比分析を実施する。周防鑄銭司以前に銭貨を鑄造し、和同開珎の破片や羽口・るつぼなどが出土している長門鑄銭所の新規資料も分析を開始する。

3. 今年度の研究経過

2019年8月24日に歴博で研究会を開催した。山口大学学術研究員の齋藤大輔氏から近年における周防鑄銭司跡の発掘状況について、5点の長年大宝、羽口・るつぼのほかに、炉跡や井戸とみられる遺構が見つかったとの報告が

あった。研究分担者の澤田秀実准教授からは、福山市出土銅製品について鉛同位体比分析の考察が提示された。昨年度試料採取した周防鑄銭司跡出土長年大宝については、齋藤努が鉛同位体比分析を行った結果を報告した。2020年度で研究期間が終了となるため、全体の総括方法として、山口大学・山口学研究センターが取りまとめる周防鑄銭司跡関連の報告書と、歴博の国立歴史民俗博物館研究報告の両方に、各自が原稿を執筆することで合意した。

このほか、研究分担者の今岡照喜名誉教授が、2019年9月2日～8日と2019年12月16日～22日に歴博に滞在し、周防鑄銭司跡出土資料と長登鉾山周辺地質資料の鉛・ストロンチウム同位体比実験を行った。

4. 今年度の研究成果

昨年度中に試料採取した、周防鑄銭司跡出土の羽口・るつぼ付着熔融物と長年大宝について、鉛同位体比分析を行った。同県内鉾山の鉾石の数値と比較し、長登鉾山産原料が使用されていると推定された。また、X線CTの観察結果や銭貨の数値に誤差の範囲を超えるばらつきがみられることから、5点の長年大宝は、同時に鑄造されたのではなく、完形にならずに取り置いていたものが、重なった状態で出土したものと推測された。

長登鉾山出土木簡から墨書文字を読み取った結果、古代の銅生産は、資材面でも人材面でも官民の共存を前提として成立していたと結論づけられた。

長登鉾山産の鉾石と、周防鑄銭司跡出土の羽口・るつぼ付着熔融物とでは、鉛同位体比にわずかな差異があり、鉾床の中での数値のばらつきや、鉾石以外の要因が加わっている可能性が考えられた。これを検証するため、同鉾山の周辺地質資料や羽口・るつぼなどのストロンチウム同位体比測定を行った。

周防鑄銭司跡出土承和昌宝と長門鑄銭所出土資料の分析については、新型コロナウイルスの影響により、研究会や資料の受け渡しができなくなったため、年度内の実施には至らなかった。また、2020年3月中旬に、もう一度の研究會と、今岡名誉教授が歴博に滞在して実験を実施することを予定していたが、それらも中止となった。

5. 研究組織 (◎は研究代表者、○は研究副代表者)

成瀬 正和 東北芸術工科大学文化財保存修復センター・客員教授
 田中 晋作 山口大学文学部・教授
 今岡 照喜 山口大学理学部・名誉教授
 亀田 修一 岡山理科大学生物地球学部・教授
 高橋 照彦 大阪大学文学部・教授
 古尾谷知浩 名古屋大学文学研究科・教授
 澤田 秀実 くらしき作陽大学音楽学部・准教授
 竹内 亮 花園大学文学部・専任講師
 坂本 稔 本館研究部・教授
 高田 貫太 本館研究部・准教授
 荒木 和憲 本館研究部・准教授
 ○林部 均 本館研究部・教授
 ◎齋藤 努 本館研究部・教授

(10) 高度経済成長と食生活の変化 2018～2020年度

(研究代表者 宮内貴久 副代表者 関沢まゆみ)

1. 目的

民俗学における食の研究については、しばらく研究の停滞が指摘されてきた(宮内貴久「衣食住一生活感なき衣食住研究」『日本民俗学』262, 2010年ほか)。また、ハレとケの食、アワやヒエを常食としていた頃の食生活史、神饌や正月の餅などの儀礼食とその信仰の意味・象徴性などが中心で、現代社会における変化をとらえる視点が十分でないとの指摘もなされてきた(田中宣一・松崎憲三編『食の昭和 cultural 史』おうふう, 1995年)。このような研究の現状を認識し、本研究では高度経済成長期(1955～73年)とその前後から現在に至る食の分野の研究資料情報の収集調査と分析によって研究の活性化をはかることを目的とする。

高度経済成長期における冷蔵庫や電気炊飯器等々の普及は、食品の冷蔵保存や調理の簡便化と新しい料理の普及にもつながるものであった。生活の変化に関して、生活改善普及事業に着目する研究があるが、家電製品の普及や生活様式の洋風化は生活改善運動の結果というよりもNHK「きょうの料理」に代表される料理番組や各種婦人雑

誌などメディア、それに加えてアメリカのホームドラマなどの影響のほうが大きかったのではないかと推測される。1960年版の『厚生白書』も指摘しているように、都市部と農村部との生活変化の差が大きかったのも特徴の一つである。それが高度経済成長期を経て平準化されてきたといわれるが、実際には地域差の視点も重要である。また1954年の学校給食法の公布で「パン・肉食・牛乳」への適応が図られたが、その後の給食に関する政策・制度の変遷をみていくことも必要である。以上、本研究では、この時代に特徴的な食生活の変化について、(1) 冷蔵庫や電気炊飯器などの台所用品の普及とそれによる食の変化、(2) インスタント食品の利用や外食、中食の購入など食の外部化、日常食から儀礼食まで手作りから購入へという変化、(3) 学校給食と子供の食の実態、(4) 資料蓄積の観点から、1963～65年以降に現文化庁文化財部によって各都道府県を対象に実施された「民俗資料緊急調査」の記述内容の精査、(5) 「家計調査」(総務省)等のデータ分析と聞き取り調査とを併せ、食の平準化、消費の地域差についての検討などを行う。

2. 今年度の研究計画

- ・研究会の開催と共同研究員各位による研究発表。
- ・民俗資料緊急調査資料の所在の確認と、食に関する資料情報の分析と調査。

3. 今年度の研究経過

第5回研究会 2019年6月22日 於：お茶の水女子大学

宮内貴久「昭和30年代の広島県における干し柿—藤本淳一撮影写真—」

寺岡伸悟(奈良女子大学研究院・人文科学系・教授)「奈良の食文化とその変化」

武井基晃「清明の墓参りと食—尚本家と梁氏門中の事例・2019年—」

「奈良の食文化とその変化」において、『毛吹草』(1645年)にも記された御所柿の産地であった奈良県御所市で行われている「御所柿復興プロジェクト」が紹介された。庭に植えられている70本の御所柿を確認し、「一家に一本」とか「先祖が子孫に残すために植えた柿」などの言い伝え、柿の葉寿司ほか柿の果実だけでなく葉も含めた食の利用の現在の動向について理解を深めることができた。

第6回研究会 2019年11月9日 於：佛教大学二条キャンパス

竹内幸絵(同志社大学・教授)「広告研究雑誌『プレスアルト』の広告群から見る高度成長期」

菅谷富夫(大阪中之島美術館・準備室長)「IDAPと大阪中之島美術館の万平社コレクション」

竹内氏による1937年に京都で始まったプレスアルト研究会による広告印刷物の現物収集とその解説、批評からなる小冊子(1977年まで継続)の紹介と解説、菅谷氏によるIndustrial Design Archives Project(家電を中心とした工業デザイン製品の記録とオーラルヒストリーの集積)の成果より、家電製品開発について「生活をつくってきた『かたち』」という視点からの発表が行われた。プレスアルト関連の資料調査の成果と課題について現場で調査されている方々からの報告をいただき、特に広告の萌芽期や1951年以降の家電製品のデザインへの注目と展開などについて理解を深めることができた。

第7回研究会 2020年1月25日 於：お茶の水女子大学

カタジーナ・チフェルトカ(ライデン大学・教授)「食品包装と食文化の関係についての一考察」

1月26日は、木内酒造(茨城県那珂市鴻巣)および木内額田醸造所の見学を行った。

カタジーナ氏の発表とその後の討論から、(1) 高度経済成長期に展開した食品包装のデザインへの注目、(2) 和食がユネスコ無形文化遺産に登録された、その経緯、フランスの美食の場合とのメディア対応の比較など、「外」からの眼からみた日本の食文化についての理解を深めることができた。

4. 今年度の研究成果

第1に、資料収集を進めることができた。

- ・平準化と地域差についての調査から

総務省による「家計調査」の数値と生活実態の分析について、出汁、購入する魚の種類などテーマを決めて聞き取り調査を併せて行うことを福岡県で試みながら、統計的な数値分析と実態調査で得られる情報とをどのように併せ分析していくのが効果的かという問題の検討を継続している。今年度は、高度経済成長期には、冷凍技術の進展や全国的なコールドチェーンの確立などによって魚介類や精肉の全国的な流通が可能となったが、福岡市内での調査及び『福岡市統計書』(1961年～)の分析などから、マグロやだしなどの事例で味の好みの地域差について具体的に提示することができた。

- ・高度経済成長期の学校給食に関する調査

高度経済成長期に東京都で学校給食を喫食していた者を対象に、当時の学校給食に対する記憶や食べ残しの状況を把握することを目的に、質問紙調査を実施した（株式会社マクロミルによるWEB調査）。解析対象者は206人、平均年齢62.9歳、男性70.4%、女性29.6%であった。当時の学校給食について、「楽しかった」と回答した者が最も多く、42.7%であった。脱脂粉乳については、「苦手な味だったが、がんばって飲んでいた」と回答した者が多かった（38.3%）。また、給食の喫食状況（脱脂粉乳を除く）は、「食べ残しもおかわりもあまりせず、配膳された分を食べていた」と回答した者が半数（66.5%）を超えていた。このデータの分析は継続中である。これによって高度経済成長期の学校給食についての資料収集ができた。

第2に、ゲストスピーカーによる、電子ジャーや魔法瓶などの工業デザインや多様な広告、包装紙などの観点からの発表により、高度経済成長期の食をめぐる文化を理解するためには、この時代の技術開発と情報発信についても視野に入れる必要性が指摘され共有された。

第3に、共同研究員の関連の主な論著等は以下の通りである。

- 赤松利恵「食環境の変遷と子どもの体格・食生活」『子どもと発育発達』17（1）、pp.9-13、2019年
 戸邊優美「緊急民俗調査票」の活用と埼玉の食文化」『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要』（14）、pp.51-74、2020年
 関沢まゆみ「食—食生活の変化と民俗学—」『日本民俗学』pp.17-30、2019年
 同「米と餅の歴史的重層性」『日本の食文化2 米と餅』吉川弘文館、pp.1-19、2019年
 同「しとぎと団子—神仏への供物—」前掲書、pp.199-218
 同「甘味の魅力と食の文化」『日本の食文化6 菓子と果物』吉川弘文館、pp.1-18、2019年
 同「カステラと菓子パン—オープンで焼く菓子—」前掲書、pp.199-232
 新谷尚紀「白米への憧れ—米とは何か—」関沢まゆみ編『日本の食文化2 米と餅』吉川弘文館、pp.21-47、2019年
 同「新米と美酒」『月刊みんぱく』44巻1号、国立民族学博物館、p.1、2020年
 渡邊紗矢、赤松利恵、藤崎香帆里「高度経済成長期の学校給食の献立作成に関する研究—当時の栄養士に対するインタビュー調査より—」第66回日本栄養改善学会（富山）2019年9月（口頭発表）

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- 赤松 利恵 お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系・教授
 小椋 純一 京都精華大学人文学部・教授
 新谷 尚紀 國學院大学大学院・客員教授
 武井 基晃 筑波大学人文社会系・准教授
 戸邊 優美 埼玉県立歴史と民俗の博物館・学芸員
 東四柳祥子 梅花女子大学食文化学部食文化学科・准教授
 村瀬 敬子 佛教大学社会学部・准教授
 ◎宮内 貴久 お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系・教授
 ○関沢まゆみ 本館研究部・教授
 横田 慶一 本館RA・筑波大学大学院

(11) 近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会 2019～2021年度 (研究代表者 若林邦彦)

1. 目的

弥生時代にはBC4世紀中頃以後、青銅器文化がみられ、鉄器の存在と使用も論じられている。青銅器は主に祭祀具として、鉄器は利器として発達するが、古墳時代になって石製利器を用いない完全なる金属期社会になるまでのプロセスは、祭祀による集団統合や輸入金属素材の流通の広域管理・統制の有無や質をめぐって重要である。個々の金属器の生産目的・共有システムの展開そのものが、列島規模の中心-周縁関係の形成つまり古墳時代や初期国家形成過程上重要な要素となる。国家形成過程における、金属器生産の展開と社会変容の相互作用について、その中核的狄役割を担った近畿地方に焦点を絞り検討することを研究の目的とする。

金属器の受容を生産という視点で評価することは、近年つとに注目されているところである。北部九州における武器形青銅器や近畿地方の銅鐸鑄造が弥生時代中期前葉にさかのぼることが明確となり、鉄器に関しても中期前半の朝鮮半島製鑄造品関連品や発達した鉄器が、北部九州だけでなく北陸地方（石川県八日市地方遺跡出土中期前半例）にまでみられることが確認されている。鉄器化が列島規模で達成される古墳時代初頭以前の金属器生産の実態

については多くの発言があり、広域におよぶ完全鉄器化が古墳時代への変化の動因として有力視もされている。ただ、そのプロセスについては明確ではない。弥生時代における青銅器と鉄器生産の双方の痕跡が明確な北部九州においては詳細な議論も進んでいるが、それ以外の地域では十分ではない。

こうした現状をふまえ、青銅器の型式学的な検討と理化学的分析、遺構論を含めた解析をおこない、弥生時代の青銅器生産の技術的・型式学的・生産論的研究を統合することと、古墳時代中期以前の鉄器生産体制を遺構論・集落論から検討することに取組み、弥生時代～古墳時代の金属器生産と社会の変化の各段階を定義づけることを目指す。

2. 今年度の研究計画

●弥生時代～古墳時代初期の青銅器製造関連土製品（鋳型・送風管・埴埴など）出土例および小型青銅器の集成（近畿地方～中部日本）を行う。八尾市亀井遺跡などで銅鐸鋳型が出土しており、それに関する鋳造関連品が出土の有無を調査するなどして、すでにその分析が進んでいる茨木市東奈良遺跡・田原本町唐古・鍵遺跡に加えて良好な比較品がないか確認する。それに加えて、小型青銅器についての鉛同位体分析などの理化学的分析が可能な資料の抽出も行う。いずれも、共同研究員らとともに出土品を前にしての検討会が必要となる。それを行うことによって、次年度以後本格的に行う理化学的分析の対象をしぼり、所蔵先に分析可否の打診を行う。

●弥生時代～古墳時代初期の鉄器製作関連資料（鉄滓・粒状滓など）の集成（近畿地方～中部日本）を行う。それに加えて、これらの資料のうち、鉄滓については生産工程の諸段階を示す炭素含有量や肉眼で粒状滓や微細剥片と考えられる鍛冶関連資料が金属成分や鉄器生産にかかわる元素成分を含有するかについての分析が必要である。また、これについては代表者が所属する同志社大学歴史資料館所蔵の田辺天神山遺跡などで抽出済みであり、その試験的な分析を行う。また、集成した出土例のうち、共同研究員らとともに出土品を前にしての研究会・検討会が必要となる。それにより、次年度以後本格的に行う理化学的分析の対象をしぼり、所蔵先に分析可否の打診を行う。この際、どういった分析が有効かについて齋藤努氏などから文化財科学研究の観点から検討と助言を得て作業をすすめる。また、弥生鉄器技術研究を進める研究者にも研究協力者などとして助言を求めたい。

3. 今年度の研究経過

●茨木市東奈良遺跡出土弥生青銅器製作関連資料の調査と検討会

（2019年8月17日 於：茨木市立文化財資料館）

鋳造鋳型・送風管の実見・資料調査と検討

「小型青銅器集成作業の状況報告と問題点」（若林邦彦）と討議

●京都市西京極遺跡・京田辺市田辺天神山遺跡出土鉄器鍛冶関連遺物資料調査と検討会

（2019年9月26日 於：京都市深草文化財収蔵庫・同志社大学歴史資料館）

京都市西京極遺跡弥生石器・鉄片の資料調査と検討

京田辺市田辺天神山遺跡出土鉄器製作関連磁着遺物・砥石類の資料調査と検討

「弥生鉄器復元製作実験の方法の提案」（真鍋成史）と討議

●低温鍛冶による鉄器製作実験と検討

（2019年11月10日 於：山下浩郎氏工房（千葉県鎌ヶ谷市））（準備実験・予察）

（2019年11月22・23・24日 於：山下浩郎氏工房（千葉県鎌ヶ谷市））

弥生鉄器復元製作実験（成形技術：切削・鍛打・穿孔をもとにした鉄鎌・鉄刀・鉄鋤先の作成）

●低温鍛冶鉄器製作の検討

（2019年12月15日 於：同志社大学歴史資料館）

収集情報・記録および製品・生成品等の整理・検討

●九州福岡平野における金属規生産（鉄器・青銅器）体制の検討

（2020年3月28・29日 於：福岡市埋蔵文化財センター／福岡市博物館）

博多遺跡及び比恵那珂遺跡出土の青銅器鋳造、鉄器鍛冶関係資料の検討

●京田辺市田辺天神山遺跡出土鉄器の理科学的分析

4. 今年度の研究成果

大阪府東奈良遺跡出土資料をもとにした弥生時代青銅器鋳造具の検討により、送風管の製作技法と土器製作技法の間に異なる部分があり、鋳造用土製品の製作技術体系の復元研究を試みる必要性が明らかになった。近畿地方の青銅器生産技術・生産体制を比較の視点から検討すべく、東大阪市鬼虎川遺跡出土資料の検討にも着手した。

弥生時代小型青銅器の集成作業については、滋賀県域についてはほぼ完成できた。ただ、年代を絞り込める出土資料が少ないことと、小型かつ粗製のため想定していたよりも分類できるような属性が安定しない、といった問題点が浮上している。

鉄器製作に関しては、弥生後期住居址出土の磁着遺物の分析によると、従来確認されていた鍛造剥片やそれに伴う微細遺物とは異なる形状の生成物と観察できることが、理化学分析をふまえて中間的に報告された。それをふまえて、低温鍛冶の復元実験をおこない、弥生低温鍛冶の実態を技術と資料のエビデンスを対照させて理解する枠組みを立ち上げた。

また、近畿地方の青銅器・鉄器生産技術と生産体制をより広域の視点で比較すべく、博多遺跡や比恵・那珂遺跡の出土資料を検討し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての近畿地方の位相について確認をおこなった。

共同研究員がともに実際の出土資料を実見することによって、研究となる対象資料の分析の問題点について具体的な問題意識が共有された。上記のように、鑄造関連具についてはその制作技法の位置づけとそれを青銅器生産遺跡や地域ごとに比較することの有効性・必要性が認識できた。

一方、小形青銅器の集成と成分分析についての作業は、予定通り進んでいない。この点について2019年度後半と2020年度に作業の進展を図る必要がある。そして2019年度中に滋賀県域出土品のいくつかについて所蔵機関と協議し、理化学分析について見通しを早急につけることが必要とされている。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）（50音順）

- 上野 祥史 本館研究部・准教授
- 齋藤 努 本館研究部・教授
- 清水 邦彦 茨木市教育委員会
- 真鍋 成史 交野市教育委員会
- 森岡 秀人 関西大学文学部
- 吉田 広 愛媛大学ミュージアム
- ◎若林 邦彦 同志社大学歴史資料館

(12) 古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究 2019～2021年度 (研究代表者 高田貫太)

1. 目的

本共同研究は、古墳時代における日朝関係史像を、当時の交渉経路や寄港地（交渉拠点）の実態という観点から再構築することを目的とする。

これまでの研究によって、古墳時代（≒朝鮮半島の三国時代）は、倭の社会が朝鮮半島から先進文化を盛んに受容した時代と評価されている。また、朝鮮半島の諸勢力（百済、新羅、加耶、栄山江流域）も当時の緊迫した政治情勢の中で、時には厳しい対立をふくみつつも、基本的には倭との友好的な関係を模索したことが明らかとなりつつある。特に近年の研究の進展によって「任那支配論」や「朝鮮出兵論」を震源とした倭の軍事的活動が日朝関係の基本とする見方を相対化し、王権、地域社会、集団のより基層的で多面的な交互交渉の様態が想定されるようになってきている。申請者もこの研究動向を積極的に評価する一人である。

ただ、これまでの研究では倭、百済、新羅、加耶など政治勢力（王権）を単位として、その間の交渉様態を分析する形式が大部分であり、王権に属しながら対渉活動を実際に担った地域社会や集団の連繋性に主眼を置く研究はまだ数少ない。また、実際の航路についても、例えば加耶と倭の交渉の場合、抽象的に釜山・金海—沓岐・対馬—北部九州—瀬戸内—近畿というような概括的な提示がなされているにすぎない。

すなわち当時の多様で錯綜した日朝関係史を、より具体的かつ実証的に描いていくためには、実際にどのような航路や寄港地を用いて行われていたのか、その航路や寄港地がどのような形で管理・運営されていたのか、それが時空間的にどのように変動したのか、という課題について、考古資料に即した検討を深めていくことが不可欠である。ここに本共同研究の目的と意義がある。

このような立場から、本共同研究では具体的な課題を大きく2つ設定する。ひとつめは、朝鮮半島中南部と西日本地域を対象とし、朝鮮半島西・南海岸、瀬戸内海沿岸、日本海沿岸をつたう交渉経路とその経路に沿って点在した（と推定される）寄港地の具体的な復元である。そのために、沿岸地域や島嶼部、河口に位置し（臨海性が高

く)、朝鮮半島系資料(倭系資料)が確認される集落遺跡や古墳の基礎的整理(遺跡の性格、時期、分布)を行い、その動態を分析する。日本考古学の側には資料の蓄積は十分にあり、韓国においても、臨海性の高い遺跡の調査、研究が急速に進展している。

この基礎的な分析を土台として、当時の日朝関係の動向の中で、交渉経路や寄港地がどのように王権や地域社会に管理・運営されていたのか、という課題について検討する。これまでの研究によって、おおむね6世紀前半頃には、倭、百濟、新羅の各王権によってそれぞれの圏域の対外交渉権が掌握されたと推定されている。その動きをより具体的に把握するためにも、交渉経路や寄港地の管理・運営の主体やその変動を考察する。

以上の研究を通して、王権間の力学関係に重きが置かれてきた古墳時代の日朝関係史像を再構築していく。

2. 今年度の研究計画

朝鮮半島の西・南海岸(百濟・榮山江流域)と日本列島の瀬戸内海沿岸の墓制や生活遺跡の検討に基づき、主要な航路の推定と寄港地と想定される遺跡や地域を明らかにする。

- ①共同調査：大韓文化財研究院の調査・研究に主要なメンバーが参加し、その成果について討論を行う。
- ②研究会と遺跡踏査：上記の目的に沿った全体参加の研究会を2回行う(李暎澈、高田)。①と連動させて1回は韓国で開催し、2回目は瀬戸内海地域において研究会と遺跡踏査を行う(中久保、鄭一)。
- ③資料分析と研究史の整理：基本的には研究員がそれぞれの研究分担にそって行う。特に半島西・南海岸の臨海性の高い遺跡や集落(鄭一)、倭系古墳(金洛中、林智娜)、そして瀬戸内沿岸の朝鮮半島系資料(中久保、高田)の分析を重点的に行う。先史・古代の航路や寄港地についての研究史を整理する(高田、権五榮)。

3. 今年度の研究経過

2019年6月5日～9日 第1回共同研究会(参加者7名)

- ・高田貫太・李暎澈「共同研究の進め方と役割分担について」(6月6日午後)
- ・全羅南道咸平新徳1号墳の資料調査(6月7・8日午前中)
- ・全羅南道海南地域の遺跡踏査(6月6日午前：事前踏査 6月8日午後)

2019年10月9日～14日 第2回共同研究会(参加者7名 外部3名)

- ・鄭一「海南半島一帯の集落の様相について」
- ・全羅道高敞・靈光地域の遺跡踏査
- ・咸平新徳1号墳出土副葬品の調査

2019年12月27日・28日 第3回共同研究会(参加者5名 外部(大韓文化財研究院)6名)

- ・李暎澈「歴博と大韓文化財研究院の交流のあゆみについて」
- ・歴博総合展示第1室における日朝関係史をテーマとした展示内容についての調査(韓国人研究者8名に展示内容の評価を依頼)

4. 今年度の研究成果

- ・咸平新徳1号墳の副葬品の調査成果に基づいて、国立光州博物館において、大韓文化財研究院・国立光州博物館・歴博の共催で、国際シンポジウムを2019年11月8日に行った。
- ・歴博と大韓文化財研究院との学術交流の意義を改めて認識するための研究集会を2019年12月27日に行った。
- ・朝鮮半島西南部の寄港地と交渉経路の実態を叙述した書籍を代表の高田が刊行した。(高田貫太2019『異形の古墳—朝鮮半島の前方後円墳』角川選書)

5. 自己評価

当初の計画との変更点 当初、2回の共同研究を予定していたが、国立光州博物館との協力関係の中で、榮山江流域の前方後円墳のひとつ、咸平新徳1号墳出土副葬品の資料調査が可能となったため、共同研究会を1回増やすことにした。その成果は今年度刊行される調査報告書に反映される予定である。

また、もともとは2020年2月に予定していた近畿地域の踏査については、韓国側の事情により実現がかなわなかった。その代替案として、2019年12月に、歴博総合展示第1室のなかで、本共同研究の課題に該当する展示内容について調査を行った。

自己評価 第1回研究会については、国立光州博物館の協力によって咸平新徳1号墳の副葬品調査が実現したこ

とにより、当初の予想以上の成果を挙げることができたと考えている。副葬品調査の結果、これまで一部公開されてきた図面のもとで想定されていた、多様な系譜（百濟，倭，加耶，在地など）の副葬品構成であることが、より一層明確なものとなった。このような副葬品を入手するためには、海を介した対外的な活動が不可欠であり、その活動は、おそらく朝鮮半島の西海岸地域の航路と榮山江流域の地域ネットワークが連繋するような交渉経路のもとで、積み重ねられていたと考えられる。その状況を実証的に明示する貴重な考古資料として、新徳1号墳の副葬品を評価できる。

10月には、西海岸地域の航路、寄港地を考える際にきわめて重要な高敞・靈光地域の遺跡踏査を行った、その調査内容（李暎澈氏が報告を担当する地域）と新徳1号墳の多様な副葬品の状況をつなぎ合わせていくことができれば、と考えている。

さらに、国際的な共同研究の意義を再確認するため、第3回研究会の際に、歴博と大韓文化財研究院の学術交流のあゆみをふりかえる研究集会を開催できた。

以上のように、2019年度の共同研究会は順調に進捗していると考えている。ただし、共同研究の進め方に関連して、日韓双方の共同研究員の方々がきわめて多忙であるために、日程調整が非常に難しい。あるいは半数程度の（日韓の）研究員の日程が合うところで研究会を開催し、その回数を1, 2回程度増やすような工夫が必要ではないかと考えている。

6. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

李 暎澈	大韓文化財研究院・院長
鄭 一	大韓文化財研究院・調査課長
林 智娜	大韓文化財研究院・調査課長
権 五栄	ソウル大学校・教授
金 洛中	全北大学校・教授
洪 漣植	公州大学校・教授
李 釩起	全南文化財研究所・所長
中久保辰夫	京都橘大学・准教授
諫早 直人	京都府立大学・准教授
廣瀬 覚	奈良文化財研究所・主任研究員
金 宇大	滋賀県立大学人間文化学部・准教授
土屋 隆史	宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査室・室員
◎高田 貫太	本館研究部・准教授
○上野 祥史	本館研究部・准教授

(13) 『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究 2017～2019年度 (研究代表者 藤原重雄)

1. 目的

『聆涛閣集古帖』（以下、『集古帖』）は、摂津国菟原郡住吉村呉田（現在の兵庫県神戸市の東部）の江戸時代の豪商・吉田家により編纂された古器物類聚の模写図譜である。豊かな財力を背景に、江戸時代の後期（18世紀後半）から明治初年（19世紀後半）にかけて、三代・約100年間にわたって、当時の学者や貴族たちとの交流を通じ、多くの古文書や古物を収集して、この『集古帖』は編集された。

『集古帖』は、さまざまな古い器物を「天地・尺量・升量・扁額・文房・肖像・書・碑銘・墓誌・鐘銘・雑銘・甲冑軍営・弓矢・刀剣・鋒・馬具・楽器・印章・鏡・織紋・乗輿・玉・食器・食品・葬具・調度・囊匣・瓦・鈴鐸・戯器・仏具・雑」の分類の下、全46帖に総計約2,400件を収録し、他に20点ほどの肖像画・絵図の未表装模写が付属する。物質資料や文献資料の精巧な模写・拓本、古印の模写・模刻、あるいは古い絵画からの抜き描きに、簡単な注記・解説を記す体裁である。写された対象は、人間の過去の痕跡、すなわち歴史に関する広い領域に及び、『集古帖』をめぐる「集め、写し、伝える」活動は歴史系博物館の基本的な構成要素を備え、さながら前近代における「総合資料学」の様相を呈している。

『集古帖』に写し取られた対象には、モノとして現存する場合も多数含まれ、現存資料との同定が基礎作業として必須である。また、同種の集古図譜が近世から近代にかけて各地で制作されており、それら集古図譜そのものの

比較を通して、近世の学術ネットワークの実態解明も課題となる。また吉田家では、古文書原本を貼った手鑑『聆濤閣帖』も編集していたが、1940年代後半に解体・売却されており、吉田家の歴史の解明と併せて、散逸古文書の追跡も、『集古帖』の世界を補完的に理解することになる。

本研究では、館蔵資料『集古帖』を、さまざまな専門分野の研究者により、現在の研究水準からあらためて総合的に調査・検討し、基礎的な情報を蓄積するとともに、近世から近代に地域社会が育んだ知のネットワークを解明し、その文化史的な背景を把握して、現代の歴史研究を顧みる機会ともする。

2. 今年度の研究計画

『集古帖』に描かれたアイテム単位で、解題の作成を試作したが、その結果、『集古帖』に収録される図の多数が、先行する好古図譜類の影響下に制作されたことが判明しつつある。特にWEB上で誰もが閲覧できる図譜については網羅的に情報蒐集し、悉皆的な比較を試みて、「総合資料学」の活動の展開と協調してゆく。そして、そうした図譜類の解題的な記述を蓄積する。

藤貞幹『集古図』・松平定信『集古十種』については、比較の軸となる対象であり、諸本研究をフォローするとともに、新出本についての検討を深める。

IIIFによるデータの公開については、引き続きシステムの構築につとめる。

『集古帖』実物の分析をふまえた「集古帖統合版目録データ（スプレッドシート）」による加筆・修正を継続しておこなう。

資料の熟覧と研究発表を合わせた研究会を、年に数回実施する。また、『集古帖』にかかわる好古図譜や描かれた実物の資料調査をおこなう。

3. 今年度の研究経過

第9回研究会（国立歴史民俗博物館）開催日：2019年6月29日（土）参加人数14名

【研究発表】（第一会議室）

釘屋奈都子 「聆濤閣集古帖—刀剣の部—について」

村野 正景 「集古帖所収の瓦について」

一戸 渉 「刊本『聆濤閣帖』小考」

落合 里麻 「輿に関する調査報告」

【資料熟覧】（第二修復室）

「聆濤閣集古帖」にかかわる資料熟覧

第10回研究会（兵庫県神戸市・白鶴酒造本社5階会議室）開催日：2019年12月1日（日）参加人数100名余

三上 喜孝（国立歴史民俗博物館）『聆濤閣集古帖』が拓く世界

内田 雅夫（住吉歴史資料館）吉田家と住吉

一戸 渉（慶應義塾大学ス道文庫）吉田家三代と学芸活動

徳田 誠志（宮内庁書陵部）吉田家旧蔵の考古遺物

藤原 重雄（東京大学史料編纂所）吉田家収集の古代中世文書

加藤 明恵（神戸大学大学院人文学研究科）吉田道可「道具帳」の紹介

古市 晃（同）新発見の吉田家関連資料群

第11回研究会（2020年3月20日、21日に開催予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため中止）

3月20日

岩橋 清美氏（国文学研究資料館）「近世地誌類にみる古物と聆濤閣集古帖（仮）」

藤原 重雄（東京大学史料編纂所）「秋田県本覚寺蔵『拓本帖』調査報告（仮）」

一戸 渉（慶應義塾大学ス道文庫）「九州大学附属博物館蔵『聆濤閣帖』調査報告（仮）」

3月21日

『聆濤閣集古帖』の熟覧

4. 今年度の研究成果

(1) 2019年4月14日と16日に京都市の醍醐寺にて乗輿の調査を行った（調査者：藤原、三上、落合、島津）。『聆濤閣集古帖』「乗輿一・二」には「醍醐の古輿」を参考にしたとの記述があることから、現物の輿における銘の有

無や、つくり・素材等について調査した。同15日に京都市の聖護院門跡にて調査を行った（調査者：藤原，落合，島津，清水，長村）。聖護院では『聆涛閣集古帖』に描かれる輿と共通点が多く見られる網代輿を所蔵しており、現物とその付属品について観察、実測、照合を行った。

(2) 2019年5月14日に京都市の聖護院門跡にて、網代輿の調査を行った。4月15日の調査に引き続き、記録写真の撮影と実測が中心となった。翌15日は、年に一度『聆涛閣集古帖』に描かれる御腰輿（京都御所所蔵）が葵祭りに使用される日であり、斎王代が実際に御腰輿（およよ）に乗り、京都市内をねり歩く様子を観察・記録した（調査者：落合）。

(3) 2019年6月12日に関西大学博物館において、同博物館所蔵の古瓦資料の観察調査をおこなった。約150点の資料について撮影・記録化を実施し、『聆涛閣集古帖』所収の瓦との比較検討をおこなった（調査者：村野）。関西大学博物館所蔵の古瓦資料は『聆涛閣集古帖』所収の瓦と同范品はあるものの、『聆涛閣集古帖』と別の経緯で収集されたものであることがわかった。

(4) 2019年6月29日に行った第9回の研究会では、『聆涛閣集古帖』のうち、刀剣部と瓦部について、これまでの調査成果が発表されたほか、集古帖と関わり深いと思われる輿についての実物調査報告や、版本の『聆涛閣帖』の調査報告など、分野を超えた多岐にわたる研究発表が行われた。合わせて、「聆涛閣集古帖」ならびにそれに関連する館蔵資料の熟覧を行った。

(5) 2019年7月31日に、秋田県美郷町の本覚寺所蔵の「拓本帳」の調査ならびに写真撮影をおこなった（調査者：藤原）。この中には、吉田家蔵の考古遺物の拓本も含まれ、聆涛閣コレクションの広がりを示す資料として貴重である。

(6) 2019年12月1日に、兵庫県神戸市の白鶴酒造株式会社本社において、「住吉の豪商・吉田家のお宝一まぼろしの聆涛閣コレクション」と題する共同研究の成果報告会（共催：神戸大学大学院人文学研究科，住吉歴史資料館）を実施した。最終年度にあたる今年度、その成果を地元の方々に広く発信するため、かつて吉田家が屋敷を構えていたという白鶴酒造の本社を会場に、共同研究員による研究成果を報告した。地元の方々を中心に、100名以上の参加を得て、研究成果を地元還元するよい機会となった。

(7) 2020年1月20日～21日に、九州大学附属図書館において、版本『聆涛閣帖』の資料調査を行った（調査者：一戸）。

(8) 2020年3月16日に、関西大学博物館において、『聆涛閣集古帖』記載の考古遺物に対応する所蔵資料の調査と意見交換を行った（調査者：徳田，三上）。

(9) 2020年3月20日～21日に、最後の研究会を実施してこれまでの研究のとりまとめを行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、やむなく中止することとした。

(10) 2020年3月25日、『聆涛閣集古帖』と関わる館蔵資料の調査を行った（調査者：藤原，三上）。調査の結果、藤原貞幹の『集古図』や『聆涛閣集古帖』に描かれている題箋軸（往来軸）の現品が、館蔵の水木資料の中にあることが判明した。

(11) 『聆涛閣集古帖』「葬具」に「缶」として描かれた「樽形はそう」の須恵器と同一の須恵器が神戸の吉田家に現存していることがわかり、複製を制作した。この須恵器は、清野謙次『日本考古学・人類学史』（岩波書店）にも「『聆涛閣帖』には缶として俵形で文様ある優品が示されて居る」（上巻301頁）と、図入りで紹介され、学史上においてもよく知られたものであった。

5. 全期間の研究成果

本研究の全体的な成果は、おもに以下の3点にまとめられる。

第一に、多方面にわたる吉田家蒐集の資料群の輪郭と、そのなかでの『聆涛閣集古帖』の基本的性格を押さえることができた点である。

『聆涛閣集古帖』に描かれた考古学的な資料については、現在ではその多くが散逸しているため、全体像を把握することは困難であったが、代表的な遺品のいくつかは、関西大学博物館や吉田家に現存することを確認できた。なかでも「葬具」の部に収められている「缶」は、6世紀頃のものと思われる「樽形はそう」の須恵器で、版本『聆涛閣帖』に模写図が収められて以降、事例として紹介される考古学史的にも重要な遺品である。本研究の過程で、この土器が現在も吉田家が所蔵していることがわかり、レプリカの制作が実現したことは大きな成果である。また、その「缶」と同じ頁に描かれている馬形埴輪は、関西大学博物館に所蔵されていることがわかり、木村兼葎堂→神戸の吉田家（聆涛閣）→神田孝平→本山彦一→関西大学博物館と、所蔵の変遷をたどることができた（徳田誠志「関西大学博物館所蔵 木村兼葎堂旧蔵の馬形埴輪について」『阡陔』79，関西大学博物館，2019年9月）。

古文書類については、散逸以前の各種調査による複製等を組み合わせることで、古筆・古文書手鑑である『聆涛

閣帖』、好古図譜である版本『聆涛閣帖』、そして『聆涛閣集古帖』の三者の関係が整理できた。手鑑『聆涛閣帖』に貼られていた古文書の半数程度は散在する現所蔵先を特定し、単独伝来の古文書を含めると、歴博にも5点は収蔵されていることを確認した。さらに版本『聆涛閣帖』には複数のバージョンがあることがわかり、その書誌的な調査を進め、これまで漠然と混同されてきた三者の関係を明確にすることができた。

これらの調査をふまえると、古器物模写図集成たる『聆涛閣集古帖』とは、吉田家蒐集の古器物を写し集めたアルバムというより、それを一部に含みつつ、基本的な性格としては、藤原貞幹「集古図」の増補版というべきものであったことがわかる。そして松平定信『集古十種』がいわば官のものとするれば、『聆涛閣集古帖』は民間における好古図譜として最大規模のものであると評価することができよう。

第二に、『聆涛閣集古帖』に描かれた種々の物品の原物の同定・分析を進めたことである。上記の基本的性格の把握には、一点一点の内容を確認するなかで、貞幹「集古図」写本からの切り貼りが多数存在し、分類体系も基本的に踏襲していることが基礎となった。原物との同定の事例としては、藤原貞幹「集古図」に写され、さらに『聆涛閣集古帖』にも貼られている題箋（往来軸）1点が、歴博にも所蔵されていることが確認できた（水木家資料）。

ジャンルごとの検討では、「印章」については、歴博のこれまでの研究蓄積（国立歴史民俗博物館編『日本古代印集成 非文献資料の基礎的研究—古印—』報告書、1996年）と接続させて、印影を採取した原文書の比定・推定を含む、詳細な目録を作成した。金石文関係では、銘文の翻刻を作成している（『聆涛閣集古帖』全体でもおおむね積文は作成済）。

「乗輿」・「扁額」といった、近代において学術的な研究に乏しい対象では、分野を異にするメンバーが共同して検討を加え、新発見が得られている。いくつかの原物調査による発見もあり、所蔵者との十分な調整を経て、成果の公表に結び付けたい。

しかしながら、全体の目録としては、内容の精粗と統一とにおいて、冊子体およびIIIF公開画像とのリンクに適したデータと、ブラッシュアップが今後も必要となるだろう。『研究報告』に研究成果を発表するのにあわせて、利用可能なものとして学界に呈したい。

第三に、吉田家の文芸活動や地域文化の様相を明らかにし、『聆涛閣集古帖』の成立背景をより具体的に把握することを進めたことである。吉田家への訪問記録を網羅して、当家を近世好古のネットワークのなかに位置づけることができた。近世の好古趣味から近代学問・博物館の成立への流れは、近年も研究が盛んで関心も高く、それ自体は新規性のあるものではないが、重要なケーススタディとなる基盤を固めることができたといえる。

一方で本共同研究の遂行自体が、研究上のネットワーク作りにも寄与した。本共同研究では、対象の多分野性ともあいまって、もともと相互に接点が多くはない研究者に参加を請うて新しく組織を立ち上げたが、幹事側の人的な能力と予算規模のなかで、十分な学術的交流もできたように思う。さらに、吉田家ゆかりの地である神戸市の住吉歴史資料館と共同研究会を毎年開催し、最終年度には、かつて吉田家の聆涛閣が所在した地である神戸市の白鶴酒造本社において、市民を対象にした研究成果報告会も開催できた。今後も神戸大学と歴博との学術交流協定等を基礎に、活動を継続する道を模索したい。

総じて多くの課題を残し、最終段階では新型コロナウイルス感染拡大の影響によりとりまとめの研究会が中止になったりしたが、『聆涛閣集古帖』から広がる世界に実際に鉤を入れ、漠然と可能性を語る段階から、研究の実践を蓄積する段階へと移行したことに、本共同研究の意義があると考えたい。

なお本共同研究の成果をもとに、2022年度に歴博で企画展示「集める・写す・伝える—蒐集と好古の文化史—」(仮)を開催する予定である。

6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

一戸 渉	慶應義塾大学ス道文庫・准教授
稲田奈津子	東京大学史料編纂所・准教授
落合 里麻	東北生活文化大学家政学部・講師
佐藤 洋一	福島県立博物館・専門員
徳田 誠志	宮内庁書陵部陵墓課・陵墓調査官
清水 健	奈良国立博物館・工芸考古室長
◎藤原 重雄	東京大学史料編纂所・准教授
古市 晃	神戸大学大学院人文学研究科・教授
吉田 広	愛媛大学ミュージアム・准教授
村野 正景	京都文化博物館・学芸員
小倉 慈司	本館研究部・准教授

後藤 真 本館研究部・准教授
 島津 美子 本館研究部・准教授
 ○三上 喜孝 本館研究部・教授

(14) 直良コレクションを構成する更新統産動植物化石の分類学的再検討と現代的評価 2017～2019年度 (研究代表者 甲能直樹)

1. 目的

直良信夫コレクションに含まれている日本産哺乳類化石には、日本列島からは絶滅してしまったネコ科食肉類やこれまで日本列島からは知られていない中型の偶蹄類が含まれている。とくに、後者についてはそれが古く大正年間に東北帝国大学の松本彦七郎によって中国四川省の更新統から記載された哺乳類化石であることが明らかとなり、現在では2度と得ることのできない国内外の貴重な標本群を多数含んでいる。コレクションを構成する更新統産動植物化石をそれぞれの分野で先頭に立つ研究者が共同で研究を行って、個別の研究成果を統合してその全体像を明らかにすることができれば、日本の更新世の動植物群集の知識を充実させる上で極めて意義深い寄与を導き出せる。

本研究の目的は直良コレクションの中でもとくに更新統産の動植物化石を現在の知識で総合的に詳査し、個々の標本の概要把握を行った上でそれぞれの分類群を再検討してコレクションの持つ学術的価値を再評価し、日本および東アジア各地の更新世動植物群集の種構成に新たな情報を付け加えることで、広く東アジアの更新世の動植物群集変遷史の理解に寄与することである。これらの課題を通して、日本の古生物学の黎明期を代表するにもかかわらずその古生物学史に必ずしも正確に反映されているとは言えない直良信夫の業績とコレクションの古生物学史的再評価も視野に入れて研究の充実を図る。

2. 今年度の研究計画

今年度は、日本列島の更新世オオカミの実体を明らかにするため、直良コレクション中の頭蓋と歯牙について甲能純子が、大陸のハイロオオカミについて茂原信生が、それぞれ検討を深める。また、これらを同じ更新世の大陸亜種と比較するため、ベルギー王立自然科学研究所とオランダ国立自然史博物館において標本調査を行う。さらに、直良コレクション中で未検討だった偶蹄類化石について西岡佑一郎が、奇蹄類化石について半田直樹が、長鼻類化石について高橋啓一が、それぞれ再調査を行う。これら化石の正確な地質年代を知るため、坂本稔と工藤雄一郎、甲能(純)、甲能直樹が放射性炭素年代法用の試料の抽出と前処理を行い、門叶冬樹がAMSを用いて絶対年代を測定する。また、明石市文化博物館と佐野市葛生化石館に所蔵されている直良の関連資料の位置づけを図る。生体復元を計画している更新世オオカミについては、茂原信生が粘土原型からFRP復元模型に至る過程の最終的な監修を行う。東京江古田産の植物化石については、百原新がさらに標本調査を行い、その位置づけを定める。甲能(直)と工藤、坂本はすべてに関わって調査の進捗に応じて計画の調整を行い、これらの作業内容と進捗状況を全体で共有するため、8月と11月および3月に研究会を執り行う。

3. 今年度の研究経過

【研究会】

第7回研究会(2019年8月17～18日:栃木県葛生地方の採石場及び栃木県立葛生化石館, 参加人数:13名)

歴博の直良コレクションには栃木県葛生地方から採集された哺乳類化石が多数含まれていることから、春成秀爾名誉教授(歴博)と奥村よほ子学芸員(葛生化石館)を案内者に招き、2日間の日程で旧葛生町内5カ所の採石場と葛生化石館の展示と所蔵標本を見学した。初日の現地案内においては、佐野市郷土館の茂木克美主幹にも同行いただき、また現地では吉澤石灰工業の縫田邦彦社長室長と片柳石灰工業の片柳岳巳社長らにご協力いただいた。2日目は葛生化石館にて研究会を開催し、今後の研究とりまとめについて議論した。また、春成名誉教授と上奈穂美研究員より発表いただいた。研究会には共同研究員7名とオブザーバー3名、協力者3名が参集した。

第8回研究会(2019年11月24日:明石市分化博物館, 参加人数:12名)

直良コレクションには、直良が兵庫県明石市に在住していた際に採集された化石標本が多数含まれていることから、直良信夫の明石時代をよく知る春成秀爾名誉教授の案内の下、午前中に明石市内各地に残される直良の足跡を辿った。また、明石市文化博物館の稲原昭嘉学芸員の案内で館の旧石器時代の展示を見学した。午後の研究会では、共同研究員の高橋啓一(滋賀県立琵琶湖博物館長)に、直良コレクションの長鼻類化石についてご発表いただ

いた。研究会には共同研究員7名とオブザーバー4名、協力者1名が参集した。

第9回研究会（2020年3月24日：国立歴史民俗博物館，参加人数：11名）

直良プロジェクトを締めくくる最終の研究会を開催し、今後の出版計画とフォーラムの計画を議論した。研究会には共同研究員9名とオブザーバー2名が参集した。

【個別の国内調査】

共同研究員の役割分担に応じて、以下の国内調査を実施した。

- ・2019年7月30日 栃木県佐野市葛生採石場と葛生化石館における事前調査（工藤雄一郎・春成秀爾）
- ・2019年9月2日 群馬県立自然史博物館所蔵オオカミの調査と年代測定用試料の採取（甲能純子・甲能直樹）
- ・2019年11月20日 国立極地研究所にて葛生産オオカミからDNA試料の採取（甲能直・坂本稔・工藤）
- ・2019年12月4日 群馬県立自然史博物館所蔵オオカミの調査と年代測定用試料の採取（甲能純）
- ・2019年12月19日 大阪市立自然史博物館所蔵の遺跡産オオカミの調査（甲能純）
- ・2019年12月20日 北九州市立自然史・歴史博物館所蔵の洞窟産オオカミの調査（甲能純・甲能直）
- ・2019年12月25日 早稲田大学教育学部総合化学学術院所蔵の長鼻類化石の調査（高橋啓一）
- ・2020年3月10日 東北大学総合学術博物館所蔵の葛生産シカ類化石の調査（西岡佑一郎）

【個別の国外調査】

共同研究員の役割分担に応じて、以下の国外調査を実施した。

- ・2019年10月27日～10月29日 オランダ国立多様性センター所蔵のニホンオオカミタイプ標本の調査（甲能純）
- ・2019年10月30日～11月2日 ベルギー王立自然科学研究所所蔵の更新世オオカミ化石の調査（甲能純）

【化学分析】

共同研究員の役割分担に応じて、以下の試料採取を実施した。

- ・日本列島の更新世オオカミおよびニホンオオカミの系統を解明するため、昨年度の葛生産更新世オオカミの頭蓋に引き続いて縄文時代オオカミの頭蓋骨からもDNA分析用のサンプルを採取する必要があると判断し、山梨大学の瀬川高弘助教、東京工業大学の西原秀典助教、国立遺伝研究所の森宙史研究員、国立極地研究所の秋好歩美技術専門員の協力を得て、2019年11月20日に国立極地研究所無菌室においてDNA分析用の微量試料を採取した。
- ・静岡県産更新世オオカミの追加標本ならびに大分県及び熊本県の洞窟から産出したニホンオオカミほかについて、2019年9月2日と12月4日に群馬県立自然史博物館にて長谷川善和名誉館長のご許可と協力の下で微量試料の採取を行い、門叶冬樹により放射性炭素年代測定を実施した。

【更新世オオカミの生体復元】

本プロジェクトの柱の一つをなす、直良コレクション中の葛生産更新世オオカミに基づいた生体復元の最終段階として、2019年度は茂原信生によって頭蓋化石から比例計算によって算出された体サイズの推定値に基づいて全身復元模型を作成し、生体復元を完了させた。完成した生体復元模型は、国立歴史民俗博物館の第1展示室において、2020年度に後期更新世の自然環境の一部をなす展示として公開される予定である。最終年度である2019年度は、以下の作業を実施した。

- ・2019年4月22日 国立歴史民俗博物館にてスチロール原型確認（茂原・工藤・甲能純・甲能直）
- ・2019年8月19日 サンク・アール工房にて粘土原型の確認（茂原・工藤・甲能純・甲能直）
- ・2019年11月15日 サンク・アール工房にて粘土原型の最終確認（工藤）
- ・2019年11月19日 サンク・アール工房にてFRP模型の彩色の確認（茂原・甲能純・甲能直）
- ・2020年1月6日 国立歴史民俗博物館にてFRP模型の仮設置と姿勢確認（茂原・甲能純・坂本・工藤・甲能直）
- ・2020年2月26日 サンク・アール工房にてFRP模型の彩色の最終確認と修正（茂原・工藤）
- ・2020年3月23日 国立歴史民俗博物館にてFRP模型の展示室への設置（茂原・坂本・工藤・甲能直）

4. 今年度の研究成果

直良コレクション中の福岡県松ヶ枝産のサイ科奇蹄類の臼歯化石4点が、半田直人により詳細に検討された結果、これらが中期更新世のアジアに広く分布した絶滅属の*Stephanorhinus*の1種であることが明らかとなった（Handa et al., 2019）。また、更新世オオカミと完新世以降のニホンオオカミについて、甲能純子と門叶冬樹により放射性炭素年代値の蓄積と年代論の議論が深められ、とくに下顎第1臼歯を指標とした大きさの経時的な変遷が甲能（純）ほかにより精査された。また、その結果についてはチェコ共和国で開催された国際会議にて発表された（Kohno, A. et al., 2019）。これらの成果を踏まえて、更新世オオカミの生体復元については茂原がこれまでに精査したハイイロオオカミの生体情報を整理統合し、本プロジェクトの目標の一つに掲げた生体復元模型を完成させた。なお、直良コレクション中のオオカミの化石については甲能（純）が、中国吉林省顧郷屯のサイの化石について

は半田が、葛生のシカ類の化石については西岡が、ゾウの化石については高橋が、またそれらの放射性炭素年代については甲能(純)と門叶がそれぞれ中心となって、現在論文として公表する準備を進めている。なお、甲能直樹、坂本稔、工藤雄一郎の3名は、上記の作業を協同研究者と共有し、研究全体の調整を図った。

【公表論文】

Handa, N., Kohno, N. and Kudo, Y. 2019. Reappraisal of a middle Pleistocene rhinocerotid (Mammalia, Perissodactyla) from the Matsugae Cave, Fukuoka Prefecture, southwestern Japan. *Historical Biology*. 10.1080/08912963.2019.1604699

【研究発表】

Kohno, A., Shigehara, N., Tokanai, F., Uno, H., Kudo, Y. and Kohno, N. (2019) Did the cheek tooth size of Japanese wolves change during 40,000 years? 12th International Congress of Vertebrate Morphology (第12回国際脊椎動物形態学会議). チェコ共和国プラハ. 2019年7月20日~27日

5. 全期間の研究成果（研究最終年度につき、新規記載）

本プロジェクトは、大きく5つの柱からなる。一つめは直良信夫コレクションに含まれている日本産哺乳類化石の分類の再検討と再評価、二つめは直良コレクションに含まれている日本産哺乳類化石および植物化石の放射性炭素年代測定、三つめは葛生産更新世オオカミ~完新世以降のニホンオオカミの経時的変遷史の解明、四つめは葛生産更新世オオカミの頭蓋の3次元復元とそれに基づいた生体復元、そして五つめは展示、刊行物、シンポジウム等による成果の還元である。

一つめのコレクションの再分類については、栃木県葛生産のシカ類化石の分類が再検討され、これまで直良(1969)によりジャコウジカとされていたものがシカ科の小型種に改められた(西岡, 準備中)。また、Matsumoto (1915)により中国四川省からウシ科のニルガイの仲間として新種記載された頭蓋化石についても、これがシカ科であることが明らかとなり、生物地理的な不調和が解消された(西岡ほか, 2018)。

二つめの放射性炭素年代測定については、これまで年代不明だった青森県尻労産のオオヤマネコが縄文時代後期、また古墳時代のものでされていた葛生産ニホンオオカミが縄文時代中期、葛生産更新世オオカミがおよそ36,000年前、中国黒竜江省哈爾濱郊外顧郷屯の哺乳類化石がおよそ35,000年前のものであることなどが明らかとなった(甲能純ほか, 2018a, b; 甲能純ほか, 準備中)。また、東京江古田から知られ氷期の植物とされてきた植物遺骸についても年代測定がなされ、これがまさに最終氷期極相期のものであることが明らかとなった(百原ほか, 準備中)。

三つめの直良コレクションに含まれている日本産のオオカミについては、放射性炭素年代測定により時間軸上で下顎第1臼歯の大きさを指標として経時的な体サイズの変遷を検討したところ、更新世と完新世の集団には大きさの不連続があること、またそれぞれの集団は経時的な小型化の傾向などは認められず、それぞれ一定の変異幅で大きさが安定していたことが明らかとなった(Kohno, A. et al., 2019)。

四つめの葛生産更新世オオカミの生体復元については、葛生産更新世オオカミの頭蓋をCTスキャナーで断層撮影して画像ソフトで3次元立体復元し、復元された頭蓋に基づいて現生のハイイロオオカミの生体と葛生産の体骨格を参照して、世界で初めて日本列島の更新世オオカミの生体(全身)を復元した。この生体復元模型については、成果の社会還元として国立歴史民俗博物館の第1展示室に新たな復元模型として設置した。本プロジェクトにより、直良信夫の残したコレクションは、アジア地域の動植物相に関する最新の知識と絶対年代を決定する化学的手法を用いることで、その多くが後期更新世から現在へと繋がる地質時代の細かな動植物相変遷史の証拠として重要な資料をなすことが明らかとなった。また、江古田の最終氷期植物群など、直良の当時の主張を新たに検証できた。このように、本プロジェクトにより日本の古生物学史に必ずしも正しく位置づけられていたとは言えなかった直良信夫の業績とコレクションが、現代の科学の粋をつくすことで再評価できたことは大きな成果である。

最後に、五つめとしてこのプロジェクトを通じて10回の研究会、41日の国内標本調査(各地の博物館等)、13日の国外標本調査(中国、ベルギー、オランダ)、8日の分析試料の採取(歴博、極地研等)、2日の三次元立体復元作業(科博)、11日間の生体復元作業(歴博、サンク・アール工房等)を共同作業として遂行し、4回の国内学会、1回の実験学会での研究発表と1編の原著論文を出版した。また、これらの成果を広く社会還元すべく、生体復元された更新世オオカミは2020年度より国立歴史民俗博物館第1展示室にて一般公開される。また、現在このプロジェクトの成果報告書の刊行と広く一般に知らせるためのシンポジウムの開催の検討を進めている。

6. 研究組織 (◎は研究代表者、○は研究副代表者)

- 半田 直人 大阪大学総合博物館・研究支援推進員
 甲能 純子 国立科学博物館地学研究部・協力研究員（元日本大学松戸歯学部・助教）
 百原 新 千葉大学大学院園芸学研究所・教授
 西岡佑一郎 静岡県立ふじのくに地球環境史ミュージアム・主任研究員
 茂原 信生 奈良国立文化財研究所・客員研究員
 高橋 啓一 滋賀県立琵琶湖博物館・館長
 門叶 冬樹 山形大学理学部・教授
 ○工藤雄一郎 学習院女子大学国際文化交流学部・准教授
 ○坂本 稔 本館研究部・教授
 ◎甲能 直樹 国立科学博物館地学研究部・グループ長

(15) 奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成 2018～2020年度 （研究代表者 梅田千尋）

1. 目的

本研究では、奈良暦師吉川家文書を中心に、近世の頒暦と陰陽道に関わる史料について研究を進め、資料活用の基盤を整備すると同時に、これまでほとんど活用されてこなかったこれらの資料群を通して、古代以降の暦制の展開をふまえた頒暦の通史的理解を深化させることを目的とする。なお、その際、頒暦が陰陽道の実践とも深く関わっていたことを重視し、陰陽道史料との関連もふまえて民俗文化・生活文化における暦の位置づけを探る。

陰陽道は好事家的関心や安倍晴明ブームなどといった学問的な裏付けが稀薄なかたちでの注目が20年以上続いている。本研究は確実に前近代における陰陽道の一部を成していた暦を切り口に、これまでの陰陽道研究の状況を克服し、新しい段階へと押し上げるための試みである。近年は研究者の任意団体である「陰陽道史研究会」が組織され、学術的に陰陽道を正面から取りあげようとする機運も高まっている。そのなかで吉川家文書の分析および位置づけに対する期待は大きなものがあるといえる。

主たる対象である奈良暦師吉川家文書は、近世奈良町の暦師・陰陽師であった吉川家に旧蔵された文書・典籍の一括資料である。内容は奈良暦およびその原本になった写本暦、さらに暦師・陰陽師としての活動を示すもの、陰陽道関係の諸典籍類、祭文、祝詞、次第書などが大半を占める、総点数900点をこえる史料群である。最大の特色は、地方暦の刊行と陰陽師としての活動に関わる史料がともに残存し、双方の密接な関連を解明しうる点にある。とくに、陰陽道祭祀に関わる祭文のなかには、中世祭祀文書の形式を残す物も見られ、中近世移行期の陰陽道を解明する手がかりとなろう。また暦師として近世近代の移行期にどのような対応をし、暦と陰陽道の社会的な位置づけが変化していく過程を解明することも可能と思われる。

各時代の暦と陰陽道に関する歴史学的な理解に民俗学・生活文化からの視点を加えて、吉川家文書をはじめとする陰陽道史料群を解析することで陰陽道の社会史的な様相を実証的に明らかにすることが可能となる。さらに陰陽師組織や暦の製作・流布の過程にも目配りすることで、日本列島における時間感覚やその表象システムについての検討へと展開することもできよう。

2. 今年度の研究計画

昨年度に決定した分担に沿って吉川家文書の分析を行う。またその成果に沿って、各自の研究テーマを設定し、年2回程度の研究会を開催する。必要に応じて、複数のメンバーが共同して史資料調査を実施し、史資料に即した議論を行う。また成果発信（学会等における共同発表）についても準備を進める。

また昨年度に引き続きゲストスピーカーを積極的に招聘し、暦・陰陽道に関する多様な分野からの視点を取り入れ、研究の総合化への取り組みを行う。

3. 今年度の研究経過

第1回研究会 奈良市ならまちセンターほか 2019年8月23日～24日

8月23日（金）日本宗教学会準備報告

細井 浩志「古代陰陽道の展開」

赤澤 春彦「吉川家文書「十二星占写」について」

松山由布子「吉川家所蔵「土公神祭文」について」

梅田 千尋「近世陰陽道祭祀の伝播—土御門家伝来陰陽道祭祀史料との比較を中心に—」
8月24日（土）
・奈良県内の陰陽道・暦関係の旧蹟の踏査および関係する施設での史料調査

第2回研究会 日本宗教学会での研究報告 帝京科学大学 2019年9月14日～15日
9月14日（土）

日本宗教学会にて、近代暦関係パネル報告（「近代における暦・国家・宗教」）等に参加。

9月15日（日）

日本宗教学会にて、パネル発表「陰陽道祭祀の形成と展開」

細井 浩志「古代陰陽道の展開—吉川家文書『平産之符』の紹介—」

赤澤 春彦「中世陰陽道と占—吉川家文書「十二星占写」の紹介を通して—」

松山由布子「吉川家伝来「土公神祭文」—その信仰および文芸的特徴—」

梅田 千尋「近世陰陽道祭祀の伝播—土御門家伝来陰陽道祭祀史料との比較を中心に—」

第3回研究会 京都府立京都学・歴史館、京都女子大学 2020年1月12日～13日

1月12日（日）京都府立京都学・歴史館

・京都府立京都学・歴史館にて若杉家文書の史料熟覧および調査

1月13日（月）京都女子大学文学部

小田島梨乃（ゲストスピーカー・東京大学大学院総合文化研究科修士課程）「大小暦の流行と暦出版の統制」

・「陰陽道資料集（奥三河編）」の企画案検討

・吉川家文書翻刻作業についての検討

第4回研究会 コモンズ南池袋会議室、大東文化大学大東文化会館 2020年2月29日～3月1日

2月29日（土）コモンズ南池袋会議室

「新・陰陽道叢書」（仮称）に関する出版打ち合わせおよび次年度方針検討

3月1日（日）「陰陽道史研究会」と合同開催

大東文化大学大東文化会館にて、第9回陰陽道史研究会への参加

4. 今年度の研究成果

第1回研究会では、吉川家文書の伝来や周辺の宗教社会史的な環境を知るために、奈良県下の陰陽道関係資料の閲覧と関係各地の巡見を行なった。これにより、奈良における暦師・陰陽師の歴史的な諸形態についての知見をふまえての資料分析が可能となった。

また第1回、第2回の研究会は日本宗教学会でのパネル発表のためにあてられた。宗教学会ではパネル全体を「陰陽道祭祀の形成と展開」として、4名の報告とコメントが行われた。その内容は日本宗教学会の『宗教研究』第93巻別冊・第78回学術大会紀要号（2020年3月30日発行）<http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2020/01/vol93.pdf>の115～122頁に報告されている。このなかでも指摘されているように、祭祀の観点から見た場合、陰陽道を、神道・仏教等の他の宗教と比較し、相互の影響関係を意識して分析を進める必要が明らかとなった。この学会発表の準備過程で吉川家文書のうち「十二星占写」に紙背文書があることが確認され、その撮影と修復とを行なうことができたのも、重要な成果であった。

第3回研究会では、吉川家文書と並んで陰陽道関係文書として著名な京都の若杉家文書の調査を行なった。京都土御門家に連続している若杉家と奈良の吉川家文書との性質の違いに関する知見をこれにより得ることができた。

本共同研究には陰陽道・暦に関する最前線の研究者が集合している。研究史をふまえ、陰陽道研究のさらなる発展を期するために論文集（研究書）を刊行する必要性が確認され、一般商業出版の可能性を模索することになった。第4回の研究会ではその基礎的な事項の確認と出版形態に関する議論が行われた。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎梅田 千尋 京都女子大学文学部・教授

林 淳 愛知学院大学文学部・教授

細井 浩志 活水女子大学国際文化学部・教授

赤澤 春彦 摂南大学外国語学部・准教授

- 遠藤 珠紀 東京大学史料編さん所・助教
 吉田栄治郎 天理大学総合教育センター・講師
 小田 真裕 船橋市立郷土博物館・学芸員
 下村 育世 東洋大学人間科学総合研究所・研究員
 松山由布子 日本学術振興会特別研究員
 横山百合子 本館研究部・教授
 田中 大喜 本館研究部・准教授
 ○小池 淳一 本館研究部・教授

(16) 番方旗本家に関する総合的研究—大番士・儒者杉原家文書を中心に— 2019～2021年度 (研究代表者 三野行徳)

1. 目的

本研究は、旗本杉原家を対象に、近世の番方旗本家の存立状況を復元的に検討することを目的とする。

国立歴史民俗博物館所蔵幕府儒学者杉原平助関係史料(杉原家文書)は、江戸幕府旗本杉原家に伝来した史料群である。史料群名に「儒学者」とあるが、杉原家は江戸開幕以来、代々「大番士」を勤めて幕末を迎える。史料群名に「儒学者」とあるのは、幕末期に当主となった杉原平助が儒者として登用され、幕末外交の登場人物となったこと、および、本史料群には平助関係の史料が多く残されていることによる。すなわち、杉原家文書には、幕府官僚制の伝統(軍団組織の身分制的編制と継承)と革新(身分制を超えた登用)が併存するわけである。ひとつの家に両側面が存在する、極めて興味深い家である。これまでの調査の結果、杉原家文書の重要な特徴は①番方旗本として類例のない大規模史料群であること、②旗本のなかで最も人数の多い階層(200俵)の旗本家であること、③大番士の日常業務や生活に関わる日記類が多数残されていること、④昌平黌儒者となって幕末外交に携わる杉原平助を輩出し、平助の学問や職務に関わる史料が多く残されていること、⑤明治維新期・維新後の史料が残されており近代士族の研究が可能であること、⑥初等教育や絵画、屋敷に関する史料など、旗本家を復元的に研究できる史料が残されていることとまとめることができる。一般的に残存状況の厳しい旗本家資料にあつて、特筆すべき特徴といえることができる。本研究の目的は、このような価値・魅力を持つ杉原家文書をあますことなく分析し、近世の旗本家について、総合的・復元的に検討することである。

以上の点を踏まえ、本共同研究では、以下の4つの研究課題を設定して研究を進める。

- ①旗本・士族杉原「家」の研究：旗本の中核を占める階層である杉原家を素材に、家の継承・教育資本の形成・屋敷地の活用など、「家」に即した近世初期から明治期までの研究。
- ②杉原家の職務に関する研究：大番士の職務に関する史料を中心に、江戸幕府の官僚制・軍団の構成員の日常を復元的に検討し、幕藩官僚制の基礎的研究を行う。
- ③儒学者・外交官杉原平助の研究：杉原平助による儒学研究・教育・著述と、儒者・外交官としての職務を検討し、近世後期の儒学者の存立状況を研究する。
- ④アーカイブズ学的研究と研究資源化：2000点を超える杉原家文書の構造についてアーカイブズ学的に分析するとともに、主要史料の翻刻やデジタル化など研究資源化を行う。

以上の4つの視角から、本共同研究を終えた後も、杉原家文書がさまざまに活用される途を模索し、併せて、国内で既に確認されているいくつかの旗本家資料について実地調査を行い、「旗本家資料」研究の可能性を展望したい。

2. 今年度の研究計画

共同研究初年度となる本年度の課題は、①杉原家についての基礎情報②杉原家文書の文書群の概要や特徴、の2点をメンバーで共有することが課題となる。杉原家文書は2,000点を超える大部な史料群であり、まずは、杉原家及び杉原家文書の基礎情報を、予備調査を進めてきた三野(家)・野本(大番)が分担して研究を進め、研究会を通じて共有する。研究会は3度開催するが、併せて史料調査会を実施し、各自の分担課題の調査を進める。また、鳥取市(池田家文書)、武蔵村山市(井上家文書)、仙台市(新見家)の3家の旗本家資料調査を行う。

3. 今年度の研究経過

【研究会】

- ①第1回研究会 2019年5月1日～2日 於：国立歴史民俗博物館

第1回研究会となる本研究会では、主たる研究対象となる旗本杉原家および杉原家文書について、基礎認識を共有するため、以下の内容で研究会・調査を行った。

5月1日は、三野氏が、共同研究の趣旨、全体計画、テーマごとの班分けなどについて報告し、野本氏が、杉原家および杉原家文書の特徴について報告した。

5月2日は、杉原家文書のデジタル化およびデータ共有について、実際に史料を見ながら協議を行い、班ごとの優先検討史料の選定を行った。

第1回研究会として、共同研究員が杉原家および杉原家文書の概要について理解することができた。また、各班のテーマ・課題についても十分に検討することができた。

②第2回研究会 2019年9月14日 於：東北大学川北合同研究棟4階436会議室

第2回研究会として、家班の三野氏・中谷氏が、開幕・杉原家の発祥以来、明治維新までの杉原家の基礎的な歴史について分析し、報告した。併せて、大番班の高久氏が、近世後期の役職補任のありかたについて分析し報告した。そののち、班ごとにミーティングを行い、今後の研究課題について議論した。

第2回研究会として、研究会全体の基盤となる「杉原家」の歴史について理解し、問題の所在を知ることができた。また、各ブランチのテーマ・課題についても十分に検討することができた。

併せて、9月11日から13日、東北大学附属図書館が所蔵する旗本新見家文書の調査を行った。

③第3回研究会 2020年2月21日～2月22日 於：国立歴史民俗博物館

初年度最終回となる本研究会では、各分担者の研究状況を確認するべく、以下の内容で研究報告を行った。

2月21日は、平助班の小川氏が、寛政期以降の幕府儒学を論じる上での論点を提示し、儒学者杉原平助を理解する前提を報告した。

2月22日は、平助班の福岡氏が杉原家文書中の外交関係史料について報告し、浦木氏が杉原家文書中の狩野派の絵画について報告した。続けて、家班の小粥氏が杉原家の屋敷の変遷について、高橋氏が杉原家の家譜について報告した。次に、大番班の小池氏が、杉原家文書中の大番士の職務に関わる史料について報告した。最後に班ごとにミーティングを行い、全体打ち合わせで、次年度の計画、全体の計画、2020年5月に開催予定のシンポジウムなどについて議論し、2日間にわたる研究会を終えた。

初年度最終の研究会として、各班のなかで各担当者が取り組むテーマについて、報告・議論することができた。研究は2年目に本格化するが、各自が取り組んでいるテーマについて、共同研究全体として相互に関連するものであるとの理解を共有・実感することができた意義深い研究会になった。

併せて、21日午後、国立歴史民俗博物館所蔵のもう一つの旗本家史料である本多家文書について、高久氏が解説し、各自、資料を熟覧した。

【史料調査】

①東北大学附属図書館所蔵新見家文書

本史料群は、旗本新見家に伝来した史料群で、現在、東北大学附属図書館狩野文庫のなかに収蔵されている。詳しい伝来過程は不明であるが、役職関係を中心とした約500点の史料が残されており、近世後期の旗本家の職務を知る上で極めて重要な史料群である。共同研究員で同大学助教の野本氏の協力により、2019年9月12日～13日に、新見家文書の調査を行うことができた。

②鳥取市歴史博物館・やまびこ館所蔵福本池田家資料・備中後月旗本池田家資料

両史料群は、鳥取藩池田家に関する資料収集の一環として、鳥取藩に由縁のある旗本家の資料群が鳥取市歴史博物館・やまびこ館によって収集されたものである。福本池田家は鳥取藩分家で、交代寄合の旗本家である。江戸初期と明治初期に福本藩として立藩していた時期もある、興味深い旗本家である。備中後月旗本池田家は鳥取藩に由縁のある400石の旗本である。両史料群とも、量は多くないが、親類書・遠類書や系図などの基礎資料を備えている。両史料群からは、旗本の存立基盤としての、同族集団の存在を検討することができる。旗本が將軍との主従関係によって存立していると同時に、武家社会における横のつながりとしての本分家関係・分知などの諸関係に基づく集団が形成されており、それにとまう資料群の残存状況を見て取ることができた。

③武蔵村山市歴史民俗資料館所蔵井上清直関係資料（渡辺善一郎家文書）

本史料群は、幕末期に下田奉行、外国奉行などを勤めた旗本井上清直に関する約200点の史料群である。これらは中藤村（武蔵村山市）渡辺善一郎家に伝来した史料群のなかに残されている。それは、渡辺家が木炭などを扱う在郷商人であり、井上家にも炭を納入していたことによるという。本史料群は、幕末外交と密接な関わりのある旗本の史料であること、井上清直も特異な出世を遂げた旗本であることなど、杉原平助を研究するうえでも重要な関連史料ということができる。同史料群は既にマイクロ撮影がされており、本年度は基礎調査を行い、マイクロフイ

ルムのデジタル化に関する相談を同資料館担当者で行った。

④その他

以上の史料群のほか、各担当者の研究に関する史料として、a.国立国会図書館憲政資料室所蔵大木喬任文書、b.国立歴史民俗博物館所蔵本多家文書、c.国立公文書館所蔵内閣文庫多門櫓文書を調査した。aは、大木が明治初年に東京府の知事を務めていたことから、明治初年の東京府における旧旗本家の管理・処分に関わる史料が多く残されている。bは杉原家文書と同様に国立歴史民俗博物館が所蔵する大部の旗本家史料である。これまで共同研究員の高久氏によって研究が進められているほか、「武士とはなにか」展など国立歴史民俗博物館の展示でも多く紹介されてきた。本共同研究でも、杉原家と併せて調査研究を進めるとともに、共同研究終了後の研究資源化も視野に入れて、基礎調査を行った。cは国立公文書館内閣文庫に含まれている旗本家の由緒・履歴・親類関係史料群で、杉原家を中心に、関係者の縁戚関係や履歴などについての調査を行った。

【資源化】

①デジタル化

杉原家文書のデジタルカメラによる撮影を進め、約2,500件のデジタル化を終えた。

②筆耕

杉原家文書中、親類書や諸種日記など主要史料19点の筆耕を行った。

4. 今年度の研究成果

共同研究初年度の本年は、①杉原家・杉原家文書の概要・特徴を共同研究全体で共有する、②各分担者の専門分野に即して杉原家文書の分析を開始する、③共同研究終了後の史料群の利用のための資源化・活用の方法を検討する、の3点を主な課題として設定した。この課題のもと、研究会を3回、合計12本の研究報告を行うことができた。研究報告と議論を通じて、江戸開幕から明治期にいたる杉原家の歴史を、共同研究全体で共有できたことが、重要な成果である。家の継承と関わっては、縁戚関係のありようについて理解し、問題の所在についても共有できた。また、屋敷の分析も進み、空間としての旗本家の再生産環境の解明が進んだ。家班の今後の大きな課題は、初代から明治期に至るまでの家の経歴をまとめあげたうえで、当主だけでなく女性や子ども、縁戚も含めた各代の再生産のありようを明らかにすることにある。大番班では、杉原家歴代の基礎的な役職就任のありよう、大番士としての職務のありようについて重要な史料が残されていることが判明した。大番は江戸幕府の中核軍事組織である一方で、実態の解明は進んでいない。本共同研究は、大番研究において重要な意味を持つはずである。一方で、本史料群には、平助や季七郎など、大番士ではない当主の日記も多く残されている。旗本の日記自体がそれほど多く残されていない状況にあって、それら役職日記類は重要な価値を持つ。今後、大番班から役職班へと視野を広げ、分析を進めることが大番班の課題である。平助班では、幕末外交に関わる平助の経歴及び関連史料の分析がなされ、また、平助を輩出した寛政期以降の幕府を取り巻く儒学環境に関わる諸問題が共有された。また、杉原家の文化資本を理解するために、同史料群に残された絵画資料の分析が為された。平助に関しては残された史料も多く、日記類に加えて、原稿類や儒者としての職務に関わる様々な史料も残されている。これらを用いて平助の全貌を明らかにしていくことが平助班の今後の課題である。資源化という点では、おおよそ全体の7割のデジタル化を終え、また主要史料の筆耕も進んでいる。

以上のように、各班、各分担者とも、史料群の分析から固有の課題を発見するに至っており、初年度の課題は達せられたと考えられる。こうした分析が共有され、多様な視点から旗本家の様相を浮かび上がらせる途をまずは獲得したと考える。

また、他の旗本資料群との比較に関しても、とくに新見家・井上家という、杉原家とも関わりのある家の資料調査が順調に進んでいる。本共同研究では、共同研究終了後に展示を予定しており、そのための予備調査という意味でも、他の旗本資料群の調査は、残された資料群で旗本をどう表現するか、という点で重要な意味を持つはずである。なお、埼玉県立歴史と民俗の博物館にて2020年3月から開催予定の企画展示「武蔵国の旗本」展は、県立博物館で開催される旗本展として極めて希な展示であるが、本共同研究代表の三野氏と共同研究員の野本氏は、同展示に協力する機会を得ることができた。同展示と本共同研究の共同企画として、2020年5月2日にシンポジウムを開催する予定であったが、同企画展示が新型コロナウイルスの影響で中止となってしまう、実現しなかったことを追記しておく。

【論文等】

三野行徳「明治維新と旗本家—武蔵国の旗本のその後—」埼玉県立歴史と民俗の博物館特別展「武蔵国の旗本」図

録, 2020年3月

野本禎司「旗本と知行所—武蔵国を中心に—」埼玉県立歴史と民俗の博物館特別展「武蔵国の旗本」図録, 2020年3月

【学会報告】

三野行徳「維新时期, 京都における旗本・御家人再編についての検討」地方史研究協議会 第70回(京都)大会, 2019年10月19日

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

- ◎三野 行徳 国文学研究資料館・プロジェクト研究員(総括・家班代表・維新时期～明治期)
 小川 和也 中京大学・教授(杉原平助班代表・儒学)
 工藤 航平 東京都公文書館・専門員(資源化班代表・アーカイブズ学的研究)
 野本 禎司 東北大学・助教(大番班代表・季七郎)
 浦木 賢治 静嘉堂文庫美術館・学芸員(杉原平助班・絵画資料)
 小粥 祐子 東京都公文書館・専門員(家班・屋敷)
 小池 駿介 千葉県立文書館・県史・古文書課(資源化班・日記資料)
 高木まどか 成城大学・院(RA)(資源化班・デジタル化)
 高久 智広 神戸市立博物館・学芸員(大番班・幕末期)
 高橋 喜子 国立公文書館・調査員(家班・近世後期)
 中谷 正克 日本銀行金融研究所アーカイブ・アーキビスト(家班・近世前中期)
 ○福岡万里子 本館研究部・准教授(杉原平助班・幕末外交)
 久留島 浩 本館・館長(大番班・官僚制全般)

(17) 歴博研究映像の制作・保存・活用—苧麻文化の映像記録化を中心に 2019～2021年度 (研究代表者 春日聡)

1. 目的

本研究では、「歴博研究映像」の制作を、日本列島の歴史・民俗を記録・分析・研究する手段として位置づけ、歴博が制作してきた過去の研究映像の蓄積を活用し、新たな課題設定のもとに調査・撮影を実施して、新規の研究映像を作成するほか、それらの利活用をとおして、歴博の研究映像の成果全体の発信力を高めていくことを目的とする。

2. 今年度の研究計画

- ①共同研究「歴史・民俗研究の資源としての映像の制作・保存・共有と歴博型プラットフォームの構築」(2016～2018年度, 代表: 内田順子)において実施した福島県昭和村における苧麻文化を対象とした調査研究と映像制作の成果をふまえ、現代日本のもうひとつの苧麻の生産地である宮古島において新たな調査・撮影を実施する。初年度は、現地における関連資料の調査及び関係者との関係構築に重点をおく。
- ②前共同研究において実施した「歴博映像祭2: 民俗研究映像の30年」の成果をふまえ、過去に制作した歴博研究映像の活用の計画を進める。

3. 今年度の研究経過

【研究会】

- 2019年5月26日(日) 13:00～17:00, 参加人数7名, 於: 国立歴史民俗博物館第3研修室
 ・須田雅子(ゲストスピーカー)「奥会津昭和村と宮古・八重山の苧麻文化」
 ・宮古上布についてこれまでに制作された記録映画(「青が織り成すひと文様」「伝統工芸のわざ第20巻 宮古上布」「日本の名匠 宮古上布 砂川玄垣」)を視聴し, 今後制作する研究映像の方向性を検討した。
- 2019年10月19日(土) 13:00～16:30, 参加人数6人, 於: 国立歴史民俗博物館講堂
 ・歴博映像フォーラム14「からむしのこえ—福島県昭和村のものづくり—」への参加
- 2020年1月26日(日) 13:00～17:00, 参加人数4人, 於: 国立歴史民俗博物館第3会議室

- ・春日聡「これまでの宮古での調査状況について」
- ・島立理子『『カラーライド集 手わざ 10 宮古上布』(源流社)のスライド情報」
- ・そのほか(次年度の計画について)

【調査】

2019年7月4日(水)～5日(金), 参加人数4名

宮古島市総合博物館にて苧麻関係資料(主に衣類)の調査を実施したほか, 「宮古島苧麻績み保存会」の指導のもと, 苧麻の収穫・繊維取り・糸づくりの過程を体験しながら, 聞き取り・情報交換をおこなった。

2019年7月20日(土)～21日(日), 参加人数1名

新里地域の豊年祭行事を調査し, 苧麻織物の制作者であり同地区の神役でもあるかたの聞き取りをおこなった。

2019年10月11日(金)～14日(月), 参加人数2名

来間島で開催された「宮古島の神と森を考える会」のシンポジウムに参加し, 来間島の伝統祭祀の現状を調査したほか, 伝統行事に使用される苧麻に着目しながら, 伊良部島のユークイ行事を調査した。

2019年11月29日(金)～12月2日(月), 参加人数3名

宮古島市総合博物館にて苧麻関係資料(共同体祭祀関係者の寄贈資料)の調査を実施したほか, 宮古島市伝統工芸品センター及び真屋御嶽にて宮古上布の祖とされる稲石を祀る稲石祭の調査をおこない, さらに宮古伝承文化研究センターにて新里地域の機織り関係の民話・歌謡についての聞き取り調査をおこなった。

2020年1月22日(水)～1月24日(金), 参加人数3人

宮古島市上野野原の「サティパロウ」の調査を実施したほか, 「宮古島苧麻績み保存会」事務局との今後の調査研究についての打ち合わせ, 苧麻績み関係者からの聞き取り調査, 宮古島市立図書館にて資料調査を実施した。

2020年2月28日(金)～3月2日(月), 参加人数3人

第10回苧麻糸展示会(宮古島市伝統工芸品センター)において, 同会の様子を撮影するとともに, 苧麻関係者へのインタビューなどを実施した。また, 宮古伝承文化研究センターにて新里地域の今後の調査計画を相談したほか, 「宮古島苧麻績み保存会」事務局と, 今後の調査・撮影の打ち合わせをおこなった。

2020年3月24日(火)～3月27日(金), 参加人数3人

新里地区の共同体行事である前サニツ(旧暦3月2日)行事を調査したほか, 大浦地区で苧麻関係者が個人で行うことがサニツ行事を調査した。また, 藍染関係者, 苧麻績み関係者へのインタビューを実施した。

4. 今年度の研究成果

研究会・調査とも, 順調に計画を進めることができ, とくに, 「宮古島苧麻績み保存会」に正式に調査・撮影・映像制作の協力を依頼し, 了承されたことで, 次年度の調査・撮影の計画を具体化することができた。また, 過去に制作した研究映像の活用として, 2020年度開催の歴博映像フォーラムの実施計画を作成することができた。

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

- ◎春日 聡 多摩美術大学・非常勤講師
- 島立 理子 千葉県立中央博物館・主任上席研究員
- 分藤 大翼 信州大学全学教育機構・准教授
- 青木 隆浩 本館研究部・准教授
- 内田 順子 本館研究部・准教授
- 川村 清志 本館研究部・准教授
- 澤田 和人 本館研究部・准教授

【開発型共同研究】

(18) 歴史災害研究のオープンサイエンス化に向けた研究

2018～2020年度

(研究代表者 橋本雄太)

1. 目的

本研究の目的は、前近代に発生した暴風、豪雨、洪水、地震、津波、火山噴火などについての歴史災害研究に、オープンサイエンスの手法を導入し、これによって歴史災害研究の情報基盤を刷新することである。オープンサイエンスとは、実験データのオープンデータ公開や、市民参加プロジェクトの実施など、科学研究に関わる様々なデータや手続きの「オープン」化をはかる運動である。情報共有による研究効率の向上や、市民参加による大規模データ収集・解析の実現といった効用があり、医学、生物学、天文学、気象学などの分野で、オープンサイエンスの手法は急速に普及しつつある。

歴史災害研究の分野における主要な研究資源は、過去に編纂された史料集や、古文書・古記録など未翻刻の原史料であるが、これらの文献史料には、しばしば高いアクセス障壁が存在し、識別子も付与されていない。また非構造化データであるため機械処理も困難である。さらに、史料そのものを解読できる研究者の数も限られている。

そこで本研究では、オープンサイエンスの標準手法を導入し、災害史料にオープンかつ機械可読な形式でアクセスするための情報基盤を構築する。また、市民参加型のプラットフォームを開発し、少数の研究者の手では不可能な災害史料の大規模データ化を遂行する。これにより、歴史災害研究の情報基盤を最適化し、史料データの高度な利活用を促進する。具体的な研究課題として次の3項目を設定する：

- ① **災害史料の構造化記述モデルの構築** 地震学・歴史学・地理学・情報学の各専門家の検討の下、災害史料に含まれる時空間情報や被害状況を、機械処理可能な構造化データとして記述するためのモデルを構築する。構造化データのLinked Open Data化や、史料へのDOI (Digital Object Identifier) 付与、データ可視化、原史料画像のIIIF公開、歴史GIS技術との連携など、データの永続的管理や活用手法についても併せて検討する。
- ② **市民参加による大規模データ構築** 膨大な量が残されている災害史料から、①の構造化モデルに基づくデータを生成するために、多数の市民の参画を実現するクラウドソーシング・プラットフォームを開発する。その土台として、研究代表者らがすでに開発公開している『みんなで翻刻』を拡張する。このプラットフォーム上で、デジタル化した災害史料を公開し、市民の協力のもと災害研究に有用な各種データを構造化して抽出する。特に、史料からの時空間情報と被害情報の抽出に重点を置く。
- ③ **歴博館蔵史料の調査とオープンサイエンス手法の適用** 歴博内の災害史料、特に近世の災害記録史料について、災害研究者と歴史研究者の協働のもと、系統的な調査を実施する。また館蔵の災害史料の一部を必要な手続きを経た上でデジタル化し、実験的に課題①②で開発した構造化記述と市民参画の手法を適用する。

2. 今年度の研究計画

研究目的に述べた研究課題のうち、①の災害史料の構造化記述モデルの構築に集中的に取り組む。また、②の市民参加型プラットフォームの開発を開始する。

3. 今年度の研究経過

研究課題①の災害史料構造化記述については、ライフサイエンス分野で実績のあるPubAnnotationを利用して、翻刻テキストを構造化する作業を進めている。また時空間データや災害情報DBとの連携については、人間文化研究機構が公開する歴史地名データや、防災科研の公開する災害事例データベースと連携する目処が立った。NIIの北本氏の主導する「歴史ビッグデータ」プロジェクトとの連携を進めている。

研究課題②の市民参加プラットフォーム構築については、2019年7月にシステムが完成し、一般公開を実施した(研究成果3)。同プラットフォームでは2020年3月時点で地震史料翻刻プロジェクトを含む8件の翻刻プロジェクトが運営されており、1,100名あまりの参加者により510万文字の近世史料が翻刻されている。

研究課題③の館蔵災害史料調査については、共同研究員の加納氏を中心に館蔵『旧公爵木戸家資料』『伊能家資料』の災害記述についての調査を開始した。

4. 今年度の研究成果

【口頭発表】

1. “Digital Humanities Research in National Museum of Japanese History” International Conference for Museums of Language & Writing 2019, 2019年9月17日, 韓国(招待有り)
2. 「市民参加とAI—「みんなで翻刻」開発者の立場から」日本文化とAIシンポジウム2019, 2019年11月11日(招待有り)
3. 「市民参加で解読するくずし字資料」デジタルアーカイブ学会第1回実践賞受賞記念発表, デジタルアーカイブ学会 第6回定例研究会, 2019年4月20日

【査読付き国際学会発表】

3. “Yuta Hashimoto, Honkoku 2: Towards a Large-scale Transcription of Pre-modern Japanese Manuscripts” The 9th Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2019), 2019年8月29日(査読有)
4. 「歴史地震研究における市民科学」国際シンポジウム「デジタル化する歴史災害研究」, 2019年7月20日
5. 「市民参加型翻刻の現状と将来」シンポジウム「マシンと読むくずし字—デジタル翻刻の未来像」, 2020年2月8日

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

- 山田 太造 東京大学史料編纂所・助教
 中西 一郎 京都大学大学院理学研究科・名誉教授
 加納 靖之 東京大学地震研究所・准教授
 大邑 潤三 東京大学地震研究所・特任研究員
 堀川 晴央 産業技術総合研究所・主任研究員
 北本 朝展 国立情報学研究所・准教授
 市野 美夏 情報システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設・特任研究員
 鈴木比奈子 国立研究開発法人防災科学技術研究所・特別技術員
 鈴木 卓治 本館研究部・教授
 後藤 真 本館研究部・准教授
 天野 真志 本館研究部・特任准教授
 ◎橋本 雄太 本館研究部・テニュアトラック助教

【共同利用型共同研究】

館蔵資料利用型

(19) 港湾政策をめぐる制度設計の行政史「石川準吉関連文書」に着目して
 2019年度
 (研究代表者 山田健)

1. 目的

戦後日本では、港湾政策は運輸省港湾局によって所管された。港湾局が運輸省の一部局であったことは、旧内務省の大半の土木行政組織が建設省へ編入されたことに鑑みれば、決して自然ではない。なぜ、港湾局ないし同局の所管する港湾政策は、独自の位置付けを維持するに至ったのか。本研究は、この問いに対して、行政管理庁の視点からの接近を試みる。

具体的には、行政管理庁高官という立場で制度設計に関わった石川準吉に着目し、その所蔵資料群を調査する。技術官僚は港湾局の移管要請運動を展開し、行政管理庁は断続的に機構改革を検討していた。実際には港湾局は運輸省の一部局として存続し、建設省に合流するには至らなかったのだが、行政管理庁が運輸省港湾局の在り方を定期的に確認し、継続的に統制していた過程を明らかにする。このことは、港湾政策をめぐる制度設計の全体像を解明する糸口になると考えられる。

2. 今年度の研究計画

本研究では、3回にわたり「石川準吉関連文書」を調査する。その際、主に1950年代の石川準吉のメモ、社会資本整備事業に関する文書、また特に災害に関する調査記録を中心に検討する。また同時に、「石川準吉関連文書」に含まれる周辺資料にも目配りし、本資料の意義についても若干の検討を行う。

3. 今年度の研究経過

第一回は、2019年7月16日から同19日にかけて、社会資本整備事業に関する行政文書・会議録と石川準吉の草稿やメモを中心に調査した。この調査によって、終戦直後の行政管理庁が運輸省による港湾行政の所管を評価したため、港湾政策が運輸省によって所管されたことが明らかになった（『行政機構年報』（1）、行政管理庁管理部、1950年）。また、行政管理庁がその後の行政監察において、その評価視点を基準に港湾行政を監察し、運輸省の港湾行政を統制していたことも併せて明らかになった（「港湾行政監察資料」H-1899-105-39）。加えて、石川が彼の官僚人生における「命題」を①文教問題・②行政改革・③災害対策の三点としている論稿にも接し、石川準吉の人間理解にも踏み込んだ（「草稿」H-1899-4-19）。

第二回は、2019年12月11日から同14日にかけて、災害についての監察記録を中心に調査した。具体的には、第一回調査の結果に鑑みて、行政管理庁の社会資本整備観を映し出す素材・石川にとっての「命題」であった素材として、狩野川台風や伊勢湾台風に関する監察記録を調査した。その結果、石川が伊勢湾台風発生以前より防災に対応する組織体の不備を課題と捉え、政策領域をこえた防災体制の設立を構想していたことが読み取れた（「台風等災害対策に対する総合監察結果報告書」H-1899-2-14）。また、伊勢湾台風後の地方監察では、行政機構の効率性を求めて中央省庁出先機関の統廃合を検討する行政管理庁にあって、権限の分散を「非効率」と捉える議論や出先機関の権限強化を志向する議論が提示されていたことも明らかになった（「業務概況報告」H-1899-2-15、「愛知県における水防計画並に水防活動に関する実態調査結果報告書」H-1899-5-13）。このような記録からは、単に伊勢湾台風の影響として論じられがちな災害対策基本法の漸進的な構想過程に加えて、行政改革における行政管理庁の出先機関観を見出すことが可能である。

第三回は、2020年1月27日から同31日にかけて、行政管理庁に関する会議録のうち、これまでの調査で十分に確認しえなかったものを調査した。特に、行政管理庁の論理が行政改革で実践された例として、第1次臨時行政調査会（第1次臨調）の会議録を調査した。この調査では、第1回会議の池田首相の発言を皮切りに、この会議体が「能率」を重視して改革案を議論していたことが明らかになった（一例として、「臨時行政調査会第1回会議要旨」H-1899-128-20）。また、行政管理庁の論理の実践が行政改革の場に限られず、日常的な行政監察などにおいても展開されていたことも確認しえた（「行政監査の沿革と監査基準の変遷」H-1899-137-39）。

4. 今年度の研究成果

本研究の成果は、中央省庁の制度設計における行政管理庁の役割を解明する手がかりを得た点にある。先行研究では、行政改革の文脈で行政管理庁の動向が一定程度論じられたほか（牧原出『行政改革と調整のシステム』東京大学出版会、2009年）、行政監察について俯瞰的な分析が為されてきた（白智立『日本の行政監察・監査』法政大学出版局、2001年）。しかし、先行研究は、行政改革や監察における行政管理庁の行動原理を明らかにするには至っていない。この点を把握しない限り、中央省庁の在り方やそれに対する統制を十分に理解しえない。これに対して、本研究は行政改革・監察における行政管理庁の論理を析出し、その点を解消する手がかりを見出した。

また、筆者は「石川準吉関連文書」の調査と並行して、港湾法の制定過程を分析し、運輸省港湾局の論理を析出した。その論理は、国が特定の大港に集中的に関与する一方で、それ以外の港について地方自治体の港湾管理を求めるというものであった（山田健「中央—地方関係における出先機関の活動」日本政治学会2019年度研究大会報告論文）。それは、能率的な行政に加えて、地方自治および地方自治体による民主的統制を求める行政管理庁の論理に適合したものであった。この成果と本研究の成果を突き合わせれば、「能率と民主的統制」のもとに成立した高度成長期の港湾行政、あるいは港湾政策に限られない地方行政のシステムを見出すことが可能である。

このような高度成長期の港湾行政像は、現代行政にとっても示唆的である。近年、政治の質に対する問題提起が跡を絶たない。本研究の観点からすれば、この現象は、①行政管理庁の影響力低下、②行政改革による出先官僚制の弱体化、③民意に依拠した地方自治体首長の相対的な強化として理解しうる。その意味で、行政管理庁の動向をふまえた各省行政の史的分析は、現代行政を考える上でも有益となるだろう。

なお、副次的な成果として、本研究は「石川準吉関連文書」の資料的価値を見出した。行政監察は、行政組織の動向を監視するとともに、その活動を改善するための情報を提供する活動である。そのため、行政監察に関する資料は、当時の行政が直面していた社会問題とその対応を映し出す。本研究の対象資料では、森永ヒ素ミルク事件や朝日訴訟に関する情報が掲載されていた（「岡山地方局関係資料」H-1899-110-25）。したがって、本研究は「石川準吉関連文書」に秘められた可能性も明らかにしたと言えよう。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎山田 健 北海道大学大学院法学研究科・博士後期課程

○原山 浩介 本館研究部・准教授

(20) 葬列における輿に関する日韓比較研究 2019年度 (研究代表者 金セッピョル)

1. 目的

本研究の目的は、現代の日本と韓国における「葬列に使う輿」の位置づけの相違とその背景を明らかにし、両国の葬儀と死生観の変化様相の考察に寄与することである。そこでまず韓国の輿を中心とした伝統葬儀保存運動の現状を把握するための調査を実施し、輿が忘れ去られている日本の状況と比較的に検討する。

両国の輿の位置づけの差には様々な背景があると考えられるが、今回は輿の物質的な側面、つまり形態や使用方法などの特徴から輿の位置づけの相違点を探る。具体的には、国立歴史民俗博物館と韓国・慶尚北道慶山市に所在する社団法人ナラオル研究所に所蔵されている輿（喪輿(サンヨ)）、葬列に関する写真や絵巻などを中心に調査を実施する

2. 今年度の研究計画

本研究では、まず物質文化調査として、①国立歴史民俗博物館に所蔵されている輿、輿が登場する絵巻・写真資料、文献資料など分析し、輿の構造や象徴、使用・管理状況を明らかにする。②韓国・慶尚北道地域に残っている輿、輿が登場する写真資料、文献資料などを収集・分析し、輿の構造や象徴、使用・管理状況を明らかにする。また現地調査として、③日本の葬儀業者と利用者、周辺住民に対して霊柩車の使用状況の変遷や認識に関するインタビュー及び参与観察調査を行う。④喪輿、喪輿の保管小屋、喪輿関連民俗などの保存運動に関してインタビュー及び参与観察調査を行う。

3. 今年度の研究経過

まず、日本の輿に関する物質文化調査として、国立歴史民俗博物館の収蔵資料である輿（F-322-39, 40, 41, F-322-88-2）、棺車（F-423）に関する調査を行った。これらは、長柄の長さや重さから判断して、この輿は2人から4人で運ぶ構造になっていた。また、明誉真月大姉葬儀写真帖（F-322-1-3）ほか葬送儀礼資料（F-322）、功道居士葬送図（H-1383）からはその事実を確認できたとともに、輿の前後に大人数で列を組むことが華麗な葬儀として捉えられていたことが推測される。

それに対して韓国で調査した輿は、重さは日本の輿とほとんど変わらないものの、少なくとも12人以上の人が運ぶような構造になっていた。さらに長柄の交換により、24人、36人と、4倍数で担ぐ人数を増やす仕組みになっている。また、調査した輿を実際に使用していた地域での聞き取り調査では、過去の葬儀を回想する際、葬儀の規模に関して輿を担いだ人数で表現しており、韓国では輿を担ぐ人数によって華麗な葬儀であると判断していると推測される。

また、韓国で行われている、喪輿を中心とした伝統葬儀保存運動に関する聞き取り調査を実施した。これを通して、喪輿が近現代化で失われた美しい伝統として再発見され、保存されようとしている現状が明らかになった。

4. 今年度の研究成果

日本と韓国の葬儀において、葬列はこの世からあの世への移行を意味する重要な儀式であった。なかでも、遺体を乗せる輿は、葬列の中で中心的な存在であったと言える。ところが、土葬から火葬への移行や葬儀の場所の変化などを背景に、現在においてはほとんど姿を消している。

近年、韓国では伝統葬儀保存運動が展開されている。今回の調査によると、その狙いは、喪輿、喪輿を保管する小屋を有形文化財に、かつての葬儀習俗を無形文化財に指定し、現代の葬儀では失われたとされる共同性や「生命尊重思想」を回復しようというものであり、韓国の伝統文化保全に主眼を置いている。喪輿と喪輿小屋は、地域エリート層によって、かつては死をめぐる「我々の美しき伝統」として存在していたが、近現代化の中でその存続が危うくなってしまおうという道筋を辿ったものとして認識されている。そこで保存すべき文化財としての喪輿が再発見されることになる。

両国の輿の位置づけの差には様々な背景があると考えられるが、今回は輿の物質的な側面、つまり形態や使用方法などの特徴から輿の位置づけの相違点を探ってみた。その結果、韓国での葬列では「輿を担ぐ」ことが比較的に

重要であり、日本では「列を組むこと」に重点が置かれているのではないかという推察に至った。このような韓国の葬列における輿の重要度の高さが、喪輿を中心とした伝統葬儀保存運動を呼び起こしたのかもしれない。追加調査が必要な部分であるが、比較検討を通して新しい見方を得ることができた。なお、本研究成果については、「令和元年度共同利用型共同研究成果報告書」にて報告した。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎金セツピョル 総合地球環境学研究所・特任助教

○山田 慎也 本館研究部・教授

(21) 御屋根方「棟梁鈴木家資料」所収図面群の特性について 2019年度

(研究代表者 小粥祐子)

1. 目的

本研究は、「棟梁鈴木家資料」のうち図面47枚を対象としている。同資料は、江戸時代、幕府の「御屋根方棟梁」を勤めた鈴木市兵衛が所有していた文書と図面からなる。

幕府による建築工事は、作事方と小普請方の二役所によって行われた。一方、鈴木市兵衛が担っていた「御屋根方棟梁」については、この二役所に直属しておらず、幕府の大名や役人、用達の名前を記した『武鑑』に職名が挙げられているものの、その職掌は未だ明かではない。

そこで、本研究は、「棟梁鈴木家資料」に収められた図面を建物ごとに整理・分類することで、鈴木家が担当した建物を特定し、その担当年代を把握するために図面の年代比定を試みることにし、「棟梁鈴木家」の職掌を明らかにすることを目的としている。

2. 今年度の研究計画

2019年4月は、予備調査によりデジタル撮影した図面の画像データを整理し、原史料を調査するための下準備をする。5月から10月ころまでに図面を建物ごとに分類し年代比定をおこなう。これらの研究と並行して、江戸東京博物館、東京国立博物館、国立公文書館、国立国会図書館などにおいて関連史資料を調査する。また、9月に、図面群のうちの1枚『浜殿延遠館絵図 鈴木控』について、日本建築学会学術講演会（於：金沢工業大学）において発表する。次に、11月から2月にかけては、本研究のまとめをおこない、3月には歴博において研究チーム内で成果発表をおこなう。

3. 今年度の研究経過

今年度は、「棟梁鈴木家資料」に収められた図面群を建物ごとに整理し、年代比定することで、鈴木家が担当した工事を推定した。

先述のように「棟梁鈴木家文書」は文書・図面群からなるが、文書群については、工藤航平氏を代表とする「棟梁鈴木家文書」にみる幕府小普請方支配御屋根方の職務」において研究が進められている。そこで、2019年7月に工藤氏と合同で原史料調査をおこなった。さらに、9月の日本建築学会学術講演会（於：金沢工業大学）において、図面群のうちの1枚『浜殿延遠館絵図 鈴木控』に関して発表した。まとめとして、3月に歴博内において当研究チームおよび工藤氏の研究チームと合同で研究成果発表をおこなった。

4. 今年度の研究成果

研究の結果、図面群は「江戸時代（幕末期）」と「明治時代」の建物とからなることが明らかとなった。「江戸時代（幕末期）」の図面は、幕府に関する建物とその他の建物とがあった。幕府に関する建物は、幕末期の江戸城内に建てられた本丸・西丸・二丸御殿大奥の平面図と将軍の霊廟に建てられた石塔の図面であることが分かった。つまり、鈴木家は幕府「屋根方棟梁」以外の仕事も行っていただことになる。明治時代の図面は、政府外国事務局管轄下の浜御殿や築地外国人居留地周辺に関する図面であることが分かった。さらに、各図面を概観した結果、建築工事に関するものだけでなく、土木工事に関する図面もみられた。

以上の研究結果から、棟梁鈴木家は、その職名である御屋根方の仕事に留まらず、江戸時代（幕末期）から明治時代へと時代を跨ぎ、建築・土木工事に幅広く関わっていた可能性があることを推測することができた。

また、工藤氏の研究報告によって、鈴木家は、小普請方の仕事を請負ったこと、幕末期に鉄砲洲周辺の整備工事

を行ったことが指摘された。鉄砲洲周辺は、後に明治政府外国事務局管轄下となる。このことは、図面群による鈴木家が担当した工事の把握、つまり、鈴木家が江戸時代から明治時代へと時代を跨ぎ公共的な工事に拘わっていた点と整合する。

今後も、工藤氏による文書群の研究成果を参照し、関連史資料を渉猟しながら、棟梁鈴木家の職掌を把握するとともに、図面の具体的な用途について明らかにしていきたい。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎小粥 祐子 東京都公文書館・専門員

○大久保純一 本館研究部・教授

(22) 「棟梁鈴木家文書」にみる幕府小普請方支配御屋根方の職務 2019年度 (研究代表者 工藤航平)

1. 目的

「棟梁鈴木家資料」とは、幕府と明治政府の公共建築の普請を取り仕切った幕府小普請方支配御屋根方棟梁の鈴木市兵衛家に伝来した資料群で、絵図面、文書、設計用木組みで構成される。

徳川幕府の建築工事を担当した作事方と小普請方のうち、主に表向きを管轄した作事方に関する資料に比して、奥向きを管轄した小普請方に関する資料は少なく、江戸城大奥の絵図が知られる程度である。また、分析対象となるのは大棟梁や大工棟梁といえる。

さらに、建築史など従来の研究では、主に絵図類の分析が行われ、文書類の利用は補助的な利用に留まっているという課題がある。本資料群についても、これまで絵図の全点写真撮影が行われ、館蔵資料データベースでの公開が行われている一方、文書類の調査はほとんどなされていない。

こうした中で、「棟梁鈴木家資料」が、研究蓄積のない瓦師や壁方の職人を管掌した屋根方棟梁の資料群であることは重要である。「御用日記」「御用留」といった職務の実相を把握することができる史料が残されていることから、これらを用いて職務や職人統制、上部機関との関係などを解明することで、徳川幕府の建築工事を担当した職制の新たな側面を描き出すことが可能となる。

そのため、史料情報・データを公開することのみをもっても研究の上での意義は大きく、研究基盤の構築となる基礎データの整備は重要なテーマである。

2. 今年度の研究計画

共同研究では、作事の日記など文書史料を研究素材に設定し、御屋根方という特殊な役職の実態と存立状況の解明を可能とする本資料群の研究基盤構築を目的に、i 利用・研究促進に活用できるよう「データベースれきはく」等での公開を目的とした文書史料の全点デジタル撮影、ii 多角的な分析と共同研究での活用を目的とした御用留帳の全文翻刻、iii 幕府小普請方支配御屋根方棟梁の職務内容や職人統制、上部機関との関係などの解明を目的とした御用留帳収録記事細目の作成、について作業を進めた。

3. 今年度の研究経過

本資料群の研究基盤構築を目的に、i 利用・研究促進に活用することを目的とした文書史料の全点デジタル撮影、ii 多角的な分析と共同研究での活用を目的とした御用留帳の全文翻刻、iii 幕府小普請方支配御屋根方棟梁の職務内容や職人統制、上部機関との関係などの解明を目的とした御用留帳収録記事細目の作成、について作業を進めた。また、研究を進める上での参考情報として、大名家の大工職関連資料の調査もおこった。さらに、2020年3月に歴博内において小粥祐子氏を代表とする「屋根方「棟梁鈴木家資料」所収図面群の特性について」の研究チームと合同で両チーム内の成果発表を開催した。

4. 今年度の研究成果

文書史料は全て、日常的に職務に携行してその都度記録する手控えで、私的なものは存在しない。また、安政大地震の復旧工事を中心に、元治・安政期に作成されたものである。史料学的分析からは、幕末期、鈴木家が関与した職務実態を復元的に把握することができることが判明した。

御用日記からは、「屋根方」でイメージされがちな限定的な職務ではなく、江戸城内外の多岐にわたる対象施設や特徴的な職務といった新たな姿を明らかにすることができた。特徴な職務として、i 最も多い職務が「壁方」に関するもの、ii 職人賃銀や資材価格など見積もり金額の算定といった経費の管理に関する情報が多いこと、iii 職人の確保や日々の管理を担っていたこと、iv 石垣修復普請も従事していたことなどがある。また、職人や資材の調達という面で江戸町人社会との接点も持ち、身分制社会や町人世界と職人統制など幕末期特有の事情とのせめぎ合いを窺うことができる。ただし、日常的な職務内容なのか、震災復興期の臨時的なものなのかは慎重に判断する必要がある。

本研究ではこれまで認知されていない特徴的な職務が明らかになった一方で、支配構造のなかでの位置づけなど不明確な部分の解明は過大として残された。

また、絵図群を分析した共同研究と成果を共有するとともに、歴史学、建築学、都市史研究など学際的研究を踏まえた、さらなる研究の深化が可能となる。

5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

◎工藤 浩平 東京都公文書館・専門員

○大久保純一 本館研究部・教授

(23) 歴博所蔵地震関連資料の調査研究 2019年度 (研究代表者 加納靖之)

1. 目的

国立歴史民俗博物館の館蔵資料には、地震に関係すると思われる資料が多数存在する。たとえば、館蔵資料データベースのフリーワード検索で「地震」をキーワードにして検索すると、279件が見つかる。これらの資料の熟覧・撮影・翻刻により、過去に発生した地震に関する情報を抽出し、過去に発生した地震の理解の一助とする。

歴史時代に発生した地震について調べるのが歴史地震研究である。歴史地震研究は明治以来の歴史をもち、多くの地震関連資料が収集・翻刻され、データとして活用されてきた。しかしながら、地震資料は時間的空間的には不十分であり、現在も資料収集が続けられている。新たな地震関連資料の発見から、過去の地震に関する新たな見方が提出される可能性がある。

本研究では館蔵資料のうち地震に関連する可能性があるものを抽出し、個別に翻刻し、整理する。その際、いつ、どの地域で記録されたものかに注意し、また被害の程度のわかる記述を抜粋する。また、可能であればその被害等をもたらした地震（発生日月日および震源地）を推定する。これらを資料名等の書誌情報とともに目録化する。

2. 今年度の研究計画

本研究では館蔵資料のうち地震に関連する可能性があるものを抽出し、個別に翻刻し、整理する。その際、いつ、どの地域で記録されたものかに注意し、また被害の程度のわかる記述を抜粋する。また、可能であればその被害等をもたらした地震（発生日月日および震源地）を推定する。これらを資料名等の書誌情報とともに目録化する。

3. 今年度の研究経過

対象とした資料（表1）の熟覧により災害記述を確認し、既知の災害との対応づけを試みた。また、即日閲覧が可能な資料についても、同様の調査を行った。

コレクション名称	資料番号	資料名称	
伊能家資料	H-61-2-2064	乍恐以書附奉願上候（地震その他災難につき地代半減につき）	地震
伊能家資料	H-61-2-3081	[書簡]（六月廿五日大地震、洪水等により両領はずでに又々飢饉に相成可申由につき）	地震
旧侯爵木戸家資料	H-62-13-2-33-1	（日本へはずい分大きな地震でしたように報道され云々エアメール・康也書簡・新聞切抜同封）	地震
旧侯爵木戸家資料	H-62-9-17-1-12	（遠見番所地震にて破損の件に付老中・勘定所・大目付等への御届け取計い方に関する件）	地震
江戸通油町質商加藤家文書	H-1706-4-4	（天保十一年頃～安政五年九月の公私日記）	地震

水木家資料	H-1242-2-3-9	日記（安政期の公家日記写カ）	地震
伊能家資料	H-61-2-2016	乍恐以書付奉願上候（風水害につき入海蒲立運上米年延願）	水害
伊能家資料	H-61-2-2095	御拝借金連名（当辰大洪水にて困堤切込困窮につき）	水害
伊能家資料	H-61-2-2451	千葉県香取郡佐原町水災及救護概況	水害
伊能家資料	H-61-2-2524	陳情書（水害による被害状況）	水害
伊能家資料	H-61-2-3072	[書簡]（当年大雨風烈にて田畑損毛有之候につき）	水害
伊能家資料	H-61-2-3556	[写真] 明治四拾三戌年八月佐原大洪水光景	水害
伊能家資料	H-61-2-3557	[写真] 千葉県佐原町水災避難所実況・病室	水害
伊能家資料	H-61-2-3558	[写真] 千葉県佐原町水災避難所実況・内外患者治療室	水害
伊能家資料	H-61-2-3559	[写真] 千葉県佐原町水災避難所実況・炊事場	水害
伊能家資料	H-61-2-3560	[写真] 明治四拾三戌年八月佐原大洪水光景	水害
伊能家資料	H-61-2-3561	[写真] 明治四拾三戌年八月佐原大洪水光景	水害
伊能家資料	H-61-2-3562	[写真] 明治四拾三戌年八月佐原大洪水光景	水害
伊能家資料	H-61-2-3563	[写真] 明治四拾三戌年八月佐原大洪水光景（旅館金田楼）	水害
伊能家資料	H-61-2-3564	[写真] 明治四拾三戌年八月佐原大洪水光景（利根川付近カ）	水害
伊能家資料	H-61-2-3565	[写真] 明治四拾三戌年八月佐原大洪水光景	水害
伊能家資料	H-61-2-3566	[写真] 千葉県佐原町水災避難所実況・避難民慰安	水害
伊能家資料	H-61-2-3567	[写真] 明治四拾三戌年八月佐原大洪水光景（香取街道沿町並カ）	水害
伊能家資料	H-61-2-3568	[写真] 千葉県佐原町水災避難所実況・眼科歯科治療室	水害
伊能家資料	H-61-2-3569	[写真]（千葉県佐原町水災避難所実況・教室にて）	水害
伊能家資料	H-61-2-4084-4	（野州上州の大雨により出水，利根川両縁村々耕地水冠につき届下書き断簡）	水害
石見国迩摩郡福光下村福富家文書	H-657-3-688	過ル廿九日夜大雨洪水ニ付半潰家書上帳 迩摩郡福光下村	水害
石見国迩摩郡福光下村福富家文書	H-657-4-2264	大雨洪水につき書状	水害
石見国迩摩郡福光下村福富家文書	H-657-4-3126	洪水道橋不通通知書状	水害
石見国迩摩郡福光下村福富家文書	H-657-4-623	乍恐以書付御届奉申上候 福光下村洪水損地届書稿外一点	水害

4. 今年度の研究成果

「伊能家資料」の「乍恐以書附奉願上候（地震その他災難につき地代半減につき）」（資料番号H-61-2-2064）が、1855年江戸地震の記録、「[書簡]（六月廿五日大地震，洪水等により両領はずでに又々飢饉に相成可申由につき）」（資料番号H-61-2-3081）が、1835年に東北地方で発生した地震に関する記録であることを確認した。「旧侯爵水戸家資料」や即日閲覧できる資料群についても、地震記事の有無の確認を進めている。また、地震だけでなく水害に関する資料もあることが判明した。資料の翻刻を行い、一部の資料については災害が発生した場所の特定なども進めた。

5. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

◎加納 靖之 東京大学地震研究所

○橋本 雄太 本館研究部・助教

(24) 「豊後若林家文書」の伝来検討と関連水軍史料との比較 2019年度 (研究代表者 鹿毛敏夫)

1. 目的

九州豊後の戦国大名大友氏の水軍組織に関しては、16世紀後半の永禄期に水軍「大将」に任じられた若林鎮興を擁する「若林氏」が注目されてきた。すなわち、若林氏は、古代の海部の歴史と伝統を有する豊後国海部郡を舞台に成長を遂げた海の領主であり、佐賀関半島南部で臼杵湾に面した海部郡佐賀郷一尺屋に本貫を有す。一方、多く

の水軍衆によって構成されていたと推測される大友水軍であるが、近年新たに、古代以来、豊後国随一の港町であった佐賀関を本拠とする水軍衆「上野氏」の存在も明らかになってきた。

同じ海部郡の一尺屋と佐賀関という隣接する港町を本拠とする若林氏と上野氏は、中世から近世にかけていかなる相互関係にあり、また大名大友氏とはどのような関係性を構築していたのであろうか。

本共同研究では、第1に、若林家に伝わった中世文書群全体が近世以降において3つに分割されて伝来していくことになるその伝来系統を考察する。そして第2に、同様の水軍史料として近年その存在が確認された上野家に伝わる中世文書群の原本調査を実施し、その内容を分析して若林家文書と比較する。

2つの家に伝わる文書群の伝来と主家大友氏を介した相互の関係を比較考察することにより、中世九州の海の武士衆の活動実態を浮き彫りにし、また、15世紀段階に上野氏が掌握していた「佐賀郷関宮御神領御代官職」が16世紀末に若林氏の差配に転換される経緯等についても検討していく。

2. 今年度の研究計画

「若林家文書」は、①国立歴史民俗博物館蔵「豊後若林家文書」、②佐賀関町の若林ヤスエ氏蔵「若林文書」、③大分市の合澤康就氏蔵「若林文書」の3系統に分かれて伝わっており、その中世部分の熟覧調査と修正翻刻については、2018年度の共同利用型共同研究において実施済みである。

一方、「上野家文書」については、④26点の中世文書と系図類が名称を「下田文書」として対馬の厳原に移動し、⑤もう一つのまとまりが3点の中世文書と写し・家譜・近世文書類で、大分市佐賀関の末裔に伝来する。これらの文書群はいずれも未翻刻であり、特に④は所在を移動したうえに名称が変わり、⑤は公開されることがなかったため、これまで研究者から注目されることがなかった。

そこで、本研究計画では、「若林家文書」については未考察の近世部分を、「上野家文書」については2カ所に分割所蔵されている文書群の原本調査を実施する。その後、2019年9月から翌年1月にかけて、各文書群の伝来系統の検討と内容の分析・相互比較を行い、2月の成果集約会議でその結果を総検討する。

3. 今年度の研究経過

2019年6月：対馬に移動したとされる「下田文書」原本の所在追跡

2019年7月：「下田文書」がすでに散逸したとの情報入手

2019年9月：「下田文書」の旧蔵者に電話調査

2019年10月：「下田文書」旧蔵者自宅を訪問・残存資料を確認→残存資料中から中世文書26点を含む「下田文書」原本を発見

2019年11月：「下田文書」を研究借用、内容調査・分析

2020年1月：引き続き「下田文書」の内容調査・分析、「下田文書」と「若林家文書」の比較調査、および豊後国海部郡内の伝「上野氏館跡」等の現地調査（大分市）

2020年2月：「下田文書」撮影、研究借用終了・返却、本研究成果の集約

4. 今年度の研究成果

「若林家文書」からは、15・16世紀の同氏が「鯛」「塩鯛」「いか」等の海産物を大友家当主へ贈答し、逆に大名側が「しきあみのいと」（敷網の糸）を催促した事例が明らかなほか、若林一族のなかで陸上で占有する土地や屋敷と並んで船が重要な相続財産であった実態や、「水居船」と呼称する水上生活船を経営していた状況等、海を基盤とした在地領主制の展開を指摘することができた。

一方、「上野家文書」に見える上野氏と歴代大友氏当主との関わりは、14世紀後半南北朝期の10代大友親世から始まり、15世紀後半の16代政親と18代親治、そして16世紀の義鑑・義鎮（宗麟）・義統（20～22代）におよんでいる。特に、戦国後期に義鎮との主従関係を強めたようで、相続と官途の「領掌」「存知」を受けた書状も残されている。「若林家文書」「上野家文書」の双方を比較すると、15世紀段階に上野氏が掌握していた「佐賀郷関宮御神領御代官職」が、その後の経緯を経て、16世紀末に若林氏の差配に転換されたことも明らかになった。

さらに、若林氏・上野氏双方の存在形態の相違点に着目すると、特に上野氏が、大友氏の水軍組織の一員として豊後国海部郡近海を守備するのみならず、大名水軍の「軍船司」や「軍船惣頭」として、来航明使を護送し、自らも明に渡航する等の、中国大陸におよぶ遣明船活動を担っているところに特徴を有している。すなわち、同家「家譜」には、15世紀の上野義実と孫の政忠、16世紀半ばの上野統知とその叔父親俊に関して以下の記述がある。

まず、応永32（1425）年生まれの上野政忠については、「同三未年五月十五日、遺跡ヲ継、海部郡番頭兼東海ノ軍船司」との記録が注目される。政忠27歳の宝徳3（1451）年に父惟栄の跡を継ぎ、「海部郡番頭兼東海ノ軍船司」

になったと言う。このうち、宝徳3年の「東海ノ軍船司」とは、同年に日本から中国に渡った9艘の宝徳度遣明船団のなかで大友親繁が経営した「六号船」の船頭職に他ならない。『笑雲入明記』によると、大友親繁のこの6号船は、享徳2（1453）年4月23日に中国浙江省の港町寧波に入港している。その後、使節団は、6月2日に9万200斤もの硫黄をはじめとした進貢物を陸揚げし、8月12日に杭州に移動して、10月8日に北京に到着、同10日に皇帝拝謁を遂げた。

また、政忠の祖父で至徳3（1386）年生まれの上野義実についても、「宝徳之度、佐伯ヨリ軍船之事」との一文があり、宝徳度遣明船団に豊後国佐伯から軍船参加したことがわかる。すなわち、宝徳3年に大友親繁が仕立てて中国に派遣した遣明「六号船」において、上野家の家督を継いだ27歳の政忠が「軍船司」を務め、祖父で66歳の義実も軍船に乗り込む等、上野氏が渡航船操船の中心的役割を担っていたのである。

大友氏の遣明船派遣における上野氏のこうした機能は、その後の16世紀にも伝統として引き継がれる。まず、上野統知に関しては、「大内義隆ニ頼、天文十六未年義隆明ニ公使ノ時、十一歳ニテ随兵」との記述がある。16世紀前半の西日本で富強を誇った周防の大内義隆が、対抗する細川氏を排除して天文年間の遣明船派遣を独占したことは周知の事実であり、その内実に関しては、天龍寺の塔頭妙智院の住職として入明した策彦周良による『策彦入明記』（「初渡集」「再渡集」）の記録がある。同史料により、策彦周良が副使の立場で入明した天文7（1538）年度と、正使として入明した天文16（1547）年度の遣明使節の、中国側との折衝や寧波での日本船団員の行動、運河北上中の見聞、そして北京での皇帝謁見の様子等の全貌が判明する。残念ながらその記録中に上野統知の名は見当たらないが、統知が11歳の時に、天文16年度の遣明使節の一員として寧波に「随兵」したのである。11歳という若年での渡明を可能たらしめたのは、その前世紀から続く「軍船司」としての上野家の高い操船技術であろう。その後、大内氏滅亡とともに統知は豊後に戻り、天正年間の合戦では「海辺ヲ固」める軍功を挙げ、主家大友氏没落後の慶長5（1600）年に64歳で没している。

一方、統知の叔父の上野親俊については、「同二年、明朝ノ使来着、軍船惣頭ニ命セラレ、小倉二年番、船ハ白杵ヨリ出ス」との記録がある。この弘治2（1556）年の「明朝ノ使」とは、明朝の浙直総督の胡宗憲が、倭寇禁制宣諭のために同年9月に日本に派遣した蔣洲と陳可願を指す。

このように、上野氏にまつわる「下田文書」や「上野家文書」、「家譜」類は、中世後期大友氏の水軍家臣団の海上活動を視野に入れた在地領主制の展開を記すのみでなく、西国の守護大名や戦国大名による遣明船派遣や来航明人の受け入れ等の対明外交政策を船で支えた家臣団の活動を証する貴重な文献史料群と言えよう。これらは、これまで主に福川一徳氏や宇田川武久氏によって描かれてきた豊後の各水軍衆の姿とは全く異なる存在形態である。

今回の共同研究において、2つの文書群を総合比較することで、中世九州の海の武士衆の国内および国外での活動の実態を浮き彫りにすることができた。特に、上野家に関わる文書類は未翻刻であり、今後何らかの形で史料紹介を行い、本研究の成果として学界に還元していきたい。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- ◎鹿毛 敏夫 名古屋学院大学・教授
- 荒木 和憲 本館研究部・准教授

分析機器・設備利用型

(25) 関東縄紋時代中期後葉の土器群の年代的位置づけ 2019年度 (研究代表者 西本志保子)

1. 目的

南関東における、縄紋時代中期後葉の連弧文土器の年代的位置づけを明確にするために連弧文土器と共伴する加曾利E式土器と曾利式土器を含めて炭素14年代測定を行い、南関東縄紋時代中期後葉の土器群の序列を探る。同時に、炭素・窒素安定同位体分析も行い、縄紋中期の南関東において煮炊きした調理物の内容を調べて当時の食環境についても考察する。

2. 今年度の研究計画

縄紋時代中期後葉の土器群の年代的位置づけについて、小林が提示する縄紋時代中期の実年代（小林謙一2017『縄紋時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代』同成社）を基本として、詳細な検討を行う。

3. 今年度の研究経過

神奈川県勝坂遺跡を対象として当該時期の連弧文土器、曾利式土器、加曾利E式土器を調査したところ、連弧文土器には炭化物の付着がほとんどなかった。そのため同時期に共伴する南関東の曾利式土器、加曾利E式土器の炭化物を採取して年代を測定することにした。さらに発掘に関わった2遺跡の炭化物について年代を測定した。

神奈川県相模原市立博物館の協力を得て、同収蔵庫に保管してある勝坂遺跡の資料から中期後葉の土器に絞って炭化物付着土器を探した。炭化物を採取できた土器は9点あったが、炭化物の重量を測ったところ、年代測定可能な炭化物が採取できたのは4点のみであった。そのため関東の同型式の土器の炭化物付着土器から、東京都府中市清水が丘遺跡出土1点、三鷹市滝坂遺跡出土2点、武蔵野市御殿山遺跡出土1点、千葉県松戸市中峠遺跡出土1点の試料を加えた。また中央大学考古学研究室の発掘資料から、相模原市大日野原遺跡の後期住居跡床直上出土炭化物1点、福島市和台遺跡の前期住居跡床直上出土炭化物1点と炭化物付着土器1点を加えて、合わせて12点の試料を集めた。

土器については、炭素・窒素同位体分析も行い、調理物の中身について検討し、縄紋時代中期の食性について考察を行った。

4. 今年度の研究成果

和台遺跡の2点の試料の年代測定結果は、予想された年代とは離れた値を示していたが、住居跡床直上の炭化物の出土位置は、住居跡が埋まった後、後期に土坑を掘った痕跡が確認されており、攪乱であると推察できた。また土器については、炭素・窒素同位体比分析の結果と合わせて検討すると、遺跡の傍を阿武隈川の支流が流れており、サケの利用による海洋リザーバー効果により年代が古くなったことが推察できる。

縄紋時代中期後葉の土器群に関しては、それぞれ土器型式と齟齬のない年代が得られた。

勝坂遺跡は、昭和初期に大山柏によって「縄文農耕論」が論じられた遺跡である。勝坂遺跡出土土器の圧痕レプリカの研究成果として、ツルマメの利用が指摘されている。炭素・窒素同位体比分析からは、試料数が少ないものの、C3植物や堅果類が利用されていると考えられる。同時期の東京都の遺跡でも同様の傾向がみられる。

5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- ◎西本志保子 中央大学文学研究科・博士後期課程日本史学専攻2年
- 坂本 稔 本館研究部・教授